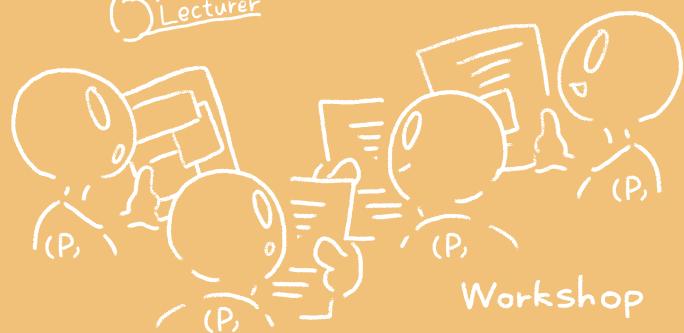
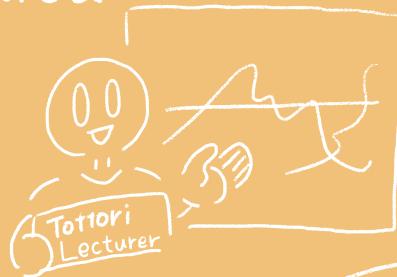


Online Guest Talk

Lecture &



Gallery Exhibition



Workshop

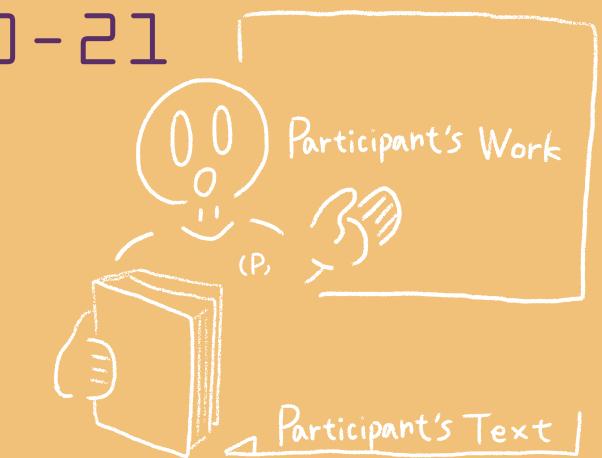
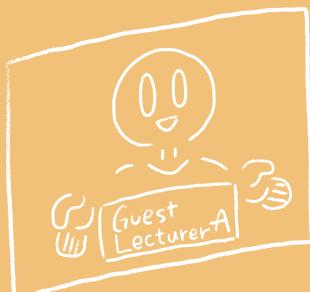
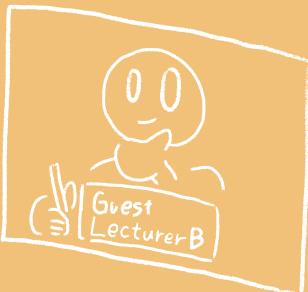
ことばの再発明

– 鳥取で「つくる」人のためのセルフマネジメント講座 –



記録集 2020-21

Dialogue Time



Result Presentation



ことばの再発明

– 鳥取で「つくる」人のためのセルフマネジメント講座 –

記録集 2020-21

「ことばの再発明」とは、鳥取で活動するアーティスト、クリエイター、デザイナー、パフォーマーなど広い意味での表現者=「つくる」人を対象として、活動を続けていくために必要なセルフマネジメントの技術を学ぶ連続講座。本書はその思想と実践、そして受講生である「つくる」人たちの魅力を紹介する記録集である。

はじめに

2020年6月から2021年1月にかけて、鳥取大学地域学部・佐々木研究室とコーディネーターの蔵多優美さんとの共同企画として「ことばの再発明」と題した連続講座を行いました。鳥取で活動するアーティスト、クリエイター、デザイナー、パフォーマーなど広い意味での表現者=「つくる」人を対象として、自身の作品や活動を適切に言語化し、他者に伝える技術を学ぶ場を作る試みです。本書はその思想と実践、そして受講生である「つくる」人たちの魅力を紹介する記録集です。

誰もが兼業芸術家である時代

わたしたちは今、ある意味で、かつて宮沢賢治が夢見た「誰もが芸術家である」かのような時代を生きています。何かしらを作つてみようと思えば、そのために必要な機材やアプリは安価で手に入りますし、ネットを活用すれば、何千何万の人々に作品を届けることも夢ではありません。さらには作品を販売したり書籍を出版するなど、手軽に利益を上げるための仕組みも整ってきました。

けれどもわたしたちには、別の現実も見えています。どれだけ環境が整っても、現実に専業芸術家として生計を立てられる者は一握り。作品も作家も増えすぎて、鑑賞が追いつかなくなくなりました。日々生み出される作品たちは、ほとんど誰にも見られぬまま、その存在に気づかれぬまま、情報の洪水に飲まれて消えていきます。

他方で経済状況は年々厳しさを増し、格差社会が進行。ごく一部の富裕層を除いて、多くの人びとの生活は以前より苦しくなりました。生きていくだけで精一杯で、採算を度外視した表現活動、あるいは余暇や趣味に没頭できる余裕はない。別の仕事で稼ぎつつ、制作活動でも多少なりとも収入を得る方法を探して、何とかやりくりしていくほかない……。「誰もが芸術家である」という理想は、ここではあまりに空疎に響きます。より正確に言い直すなら、わたしたちは今、「誰もが兼業芸術家である」ような時代に生きているのではないでしょうか。

セルフマネジメントの困難と向き合う

「誰もが兼業芸術家」だということは、ただ作品を作るだけでなく、トークイベントやステイトメント、プレゼンや助成金申請など様々な場面で「言語化」が求められることを意味します。ふだんから言葉を用いる小説家や詩人でさえ、それとは別に「説明」や「紹介」の言葉を求められます。ただ「作品」をつくるだけでは作家活動を続けられない。いやでも自画自賛しなければ、制作費や発表機会が得られず、生活もままならないという現状があります。コロナ禍への対応策として、文化庁が「文化芸術活動の継続支援事業」を始めたものの、条件の厳しさや手続きの煩雑さから申請件数が伸び悩んでいるという報道も、記憶に新しいでしょう。

「語るべきことは作品で全部語っているのに……」

「言葉にできないから作品を作っているのに……」

そんな悩みや迷いを乗り越えて、堂々と（あるいはおそるおそるでも）納得いくかたちでセルフマネジメントを実践できるようになることが、この講座の目標です。

講師と共に悩み、共に考える

書店を見渡せば、ウケの良い企画書の書き方や、プレゼンの方法を教えてくれるハウツー本が山積みされています。けれども、そこで手に入れた言葉と、自分自身の作品や活動の間にある齟齬や矛盾、もやもやを解消してくれる本にはなかなか出会えません。あまりにもナイーブな悩みだと感じる方もおられるでしょうが、わたしたちはそんな「もやもや」こそを大切にします。表現と言葉の間にある決定的なズレを避けて通るのではなく、真正面から向き合って、納得がいくまで考えることは、「つくる」人にとって何よりも重要な時間だと信じるからです。

そこで本講座では、優れた「作り手」であることに加えて、優れた「受け手」でもある方、他者の言葉に真摯に耳を傾けてくださる方を講師としてお招きすることにしました。便宜上「講師」としていますが、教える／学ぶ関係、すなわち、一般的な講演のように聴衆に向けて壇上から一方的に語りかけるだけの形式はとりません。講師一人につき受講者二人という少人数での対話の時間を設け、そこでじっくりと言葉を交わしてもらうことにしました。受講生と問題や課題を共有し、共に悩み、共に考える役割を担っていただきたいと考えたのです。

ことばを再発明する

本講座名の元になっている「車輪の再発明」とは、すでに普及している技術を一から作り直してしまうこと。非効率で無駄な努力として否定的に見られがちですが、ここでは肯定的に捉え直したいと思います。

作り手の数だけ表現のかたちがあるのと同様に、言葉との適切な関係性や距離感も人それぞれ異なる。表面的に目新しい言葉や奇を衒った言葉を得ようとするのではなく、たとえそれが講座参加前と較べてさほど代わり映えしない言葉であったとしても、その人自身にとって必要な言葉、適切な言葉を吟味し、選べるようになること。それが、わたしたちの目指す「ことばの再発明」です。

鳥取で「つくる」人のために

本講座は当初から鳥取在住の受講者を想定していましたが、オンライン実施が決まってからも、その方針を変えることはありませんでした。なぜ「鳥取」にこだわったのか、その理由を最後に述べておきたいと思います。

2020年はコロナ禍で多くのイベントが中止になり、代わってオンラインでの開催が増えてきました。しかし一見、ネットの利用は地理的な障壁を取り除き、人びとの距離を縮めているようでありながら、実は却って都市と地方の格差を広げている面もあるのではないでしょうか。遠方のイベントにも参加が容易になったことで、すでに高い知名度のある講師や権威のある団体のイベントに観客が集中し、むしろ多様性は損なわれてしまっているように思います。

そのような問題意識から、オンライン実施でも受講生を鳥取在住者に限定することに決めました。少人数で密なコミュニケーションができたり、講師と仲良くなれたり、知らない作品や作家との思いがけない出会いが期待できるという「地方」ならではのメリットをオンライン上にも持ち込み、そこに擬似的な「鳥取」を作り出そうとしたのです。

(文・佐々木友輔)

目次

Contents

イントロダクション [1-14]	
ステイトメント 佐々木友輔	2-3
メンバー	6-7
タイムライン	8-9
受講ロードマップ	10
part.1 講演と対話 [15-32]	
レポート 講演① 後藤怜亜×白井明大 講演② 大林寛×西島大介 対話＆ミニワークショップ 講演③ 榊原充大×篠田菜 講演④ 熊野森人×高橋裕行	18-27
受講生エッセイ：講師との対話を終えて 田中京子	32
part.2 成果発表展 ギャラリートーク [33-86]	
レポート 成果発表展「ことばの再発明×18展」	37-38
受講生と作品 井澤大介、ISOIYO、磯崎つばさ、exkeee、奥井彩音 音泉寧々、神山かなえ、品岡トト里、Seizan 田中京子、中村友紀、ナカヤマサオリ、にゃろめけりー 藤原京子、水田美世、村瀬謙介、もりさと、yamasaki	39-75
レポート 成果発表会「ギャラリートーク」	76-79
受講生エッセイ：作品制作を終えて 村瀬謙介	86
part.3 フォーラム「鳥取で出会う表現とことば」 [87-99]	
レポート ゲスト講師：波田野州平、吉田恭大、ひやまちさと 参加受講生：exkeee、にゃろめけりー、もりさと 磯崎つばさ、中村友紀、ナカヤマサオリ、水田美世 井澤大介、奥井彩音	90-95
「ことばの再発明」を終えて [100-111]	
受講生エッセイ：「ことばの再発明」を終えて ナカヤマサオリ	102
企画者より：芸術（家）の再発明／現時点での私の「ことば」 佐々木友輔／藏多優美	106-107
受講生エッセイ：これから先の未来でもつくっていくことを目指して にゃろめけりー	108
参加者データ	109
編集後記／鳥取企画運営チームプロフィール／「ことばの再発明」実施体制	110-111

「ことばの再発明」の主役は受講生。そこで受講生がたどったプロセスがわかるよう、プログラムの時系列に沿ってこの記録集のページを配置している。また受講生が講座をどのように体験したか、その声も聞きたいと考え、4名の受講生によるエッセイを収録した。

コラム・表現とことば

- | | |
|---------|---|
| 11 | 西島大介 |
| 12-13 | 高橋裕行
表現とことばの関係 |
| 28-29 | 後藤怜亜
2020年、「ことばの再発明」をした私たちの夏によせて。 |
| 30-31 | 榎原充大
ことばはいつも手渡せるわけではない |
| 80-81 | 多田かおり
「ことばの再発明」成果発表に関する所感 |
| 82-83 | 大林寛
再発明された「ことば」の体系 |
| 84-85 | 熊野森人 |
| 96-97 | 田中ちえこ
ことばの再発明—作品と言葉の関係について考えてみる— |
| 98-99 | 篠田栄
言葉はその都度、発明されるもの |
| 103-105 | 白井明大
詩：内なる火 |

講師が「表現とことば」についてどのような考えをもつのか、講座後に執筆していただいたコラムを各所に配置した。それぞれのスタイルを反映する文章が、講座そのものの雰囲気を再現し、各講師にとって「ことばの再発明」がどのようなものであったかを窺い知ることができるだろう。

メンバー

Participants and Staffs



ナカヤマサオリ

助産師／執筆業

受講生

1期「アートとことば」



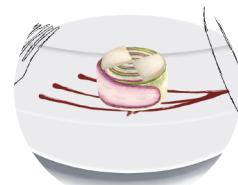
Seizan

医師／対話ファシリテーター



exkeee

painter



yamasaki

アニメーション作家

ISOIYO



水田美世

totto 編集長／
ちいさいおうち管理人



品岡トトリ

鳥取絵師／イラストレーター

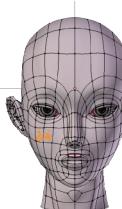
ISOIYO

作品制作



藤原京子

デザイナー／水引作家



音泉寧々

鳥取大学地域学部
4年生（受講時）



神山かなえ

絵描き／デザイン／旅ライター／手相読み／
イベントファシリテーター／食育インストラクター



田中京子

Reading ACT 代表



もりさと

米泳ぐ代表／
サンインテラス編集長



にやろめけりー

ZINE 作家／DJ／音楽をつくる人

小取舎

kotorisya

村瀬謙介

小取舎 代表



中村友紀

演劇



奥井彩音

林業／山のデザイン

井澤大介

深夜の美術展 in 鳥取 主催／
企画者／雑談をデザインするひと

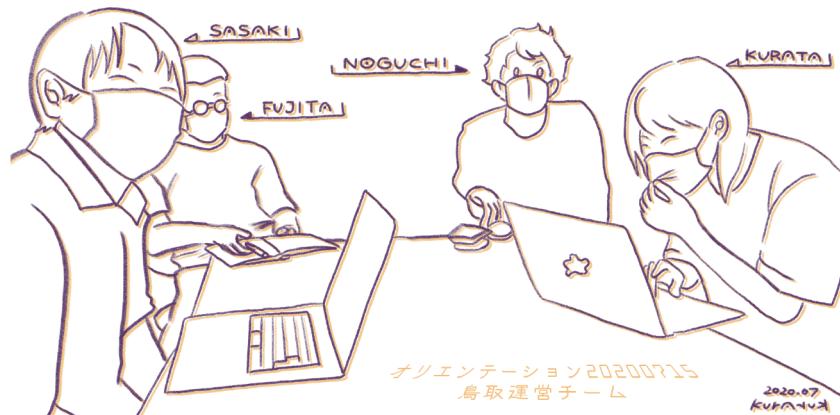
鳥取企画運営チーム

藤田和俊

ライター／フォトグラファー／編集者
サポートコーディネーター／2期講師

野口明生

企画者
サポートコーディネーター／1期講師



佐々木友輔

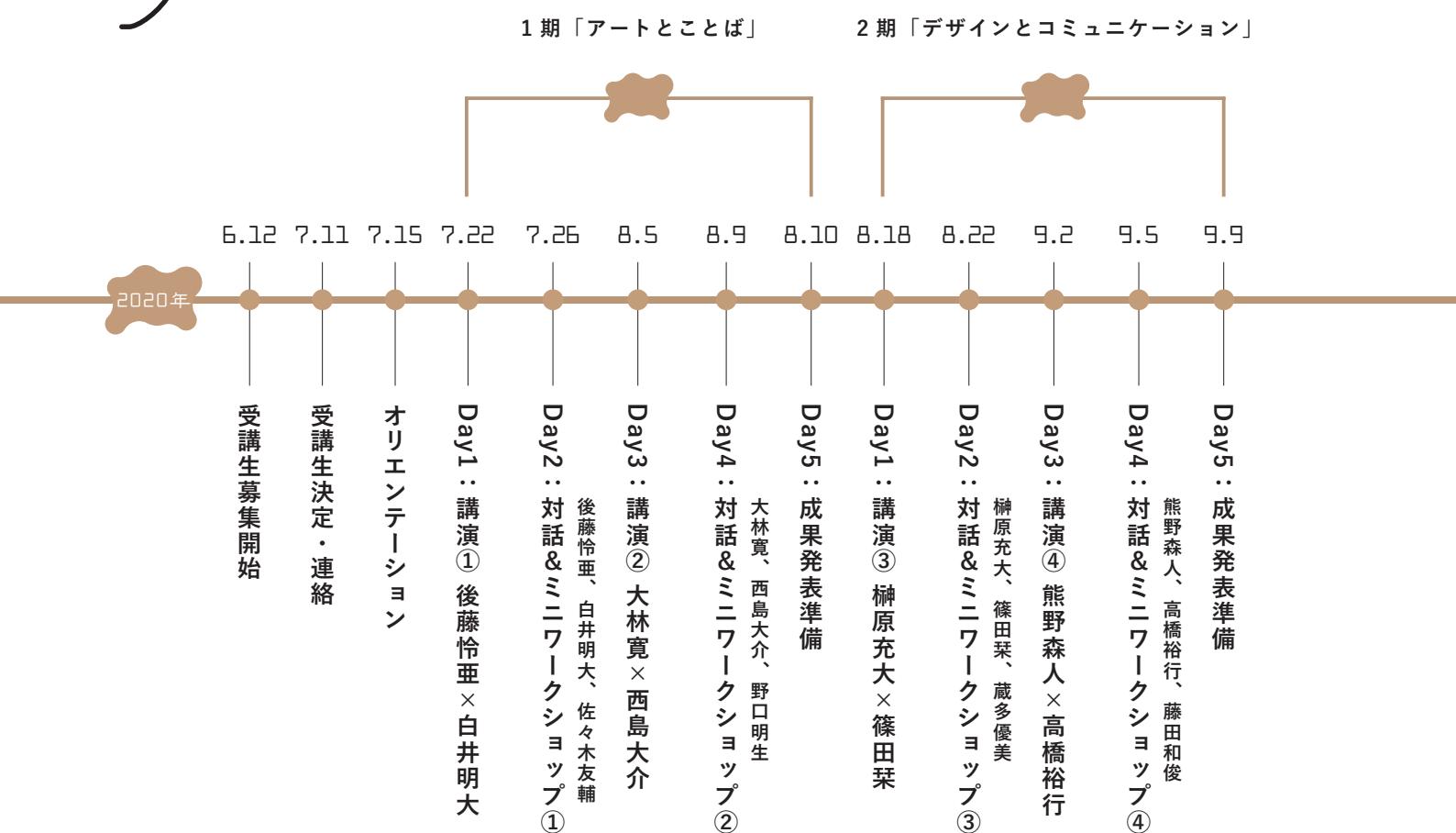
映像作家
共同企画運営／1期講師／担当教員

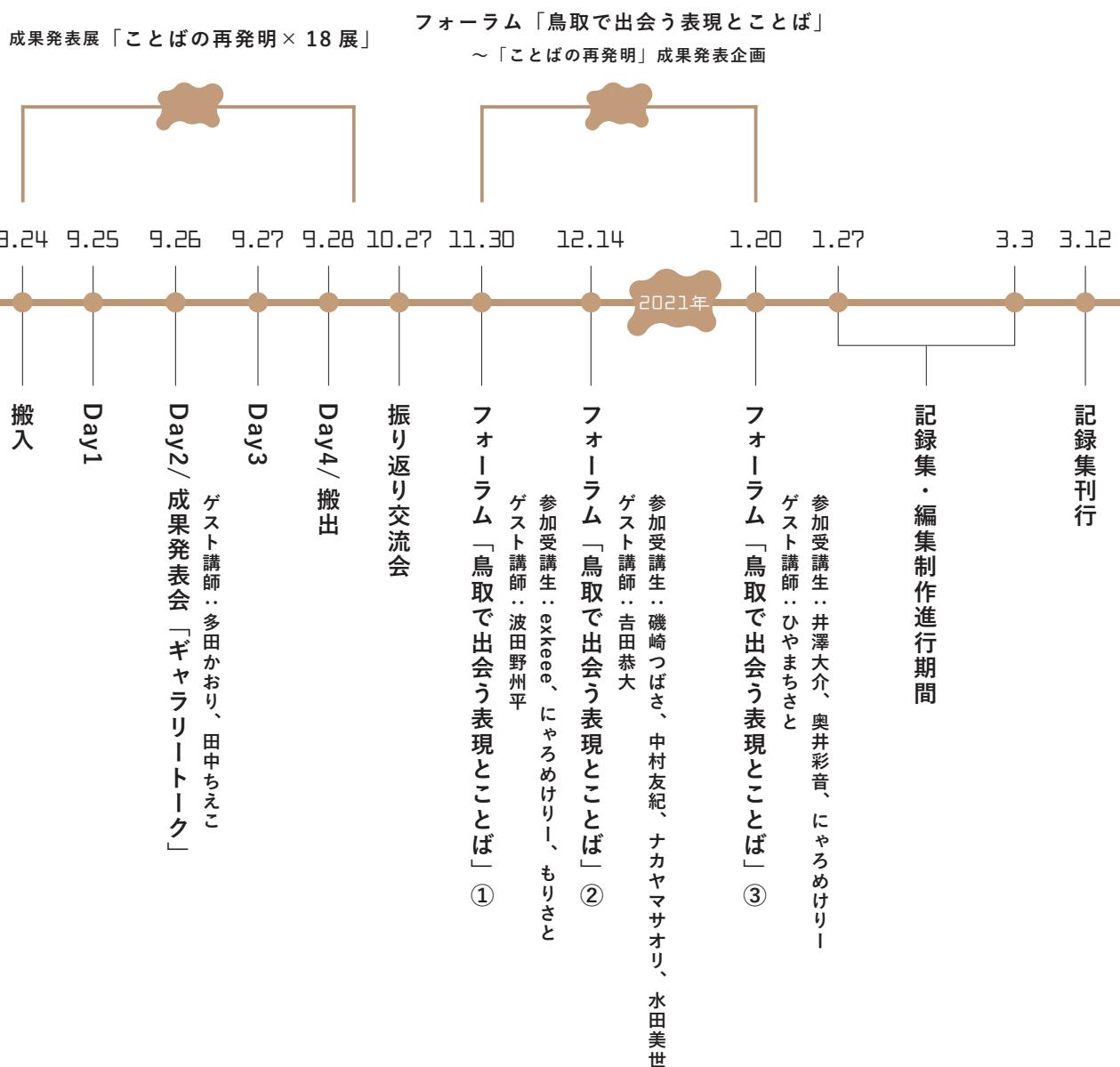
蔵多優美

デザイナー／コーディネーター
共同企画運営／2期講師／事務局

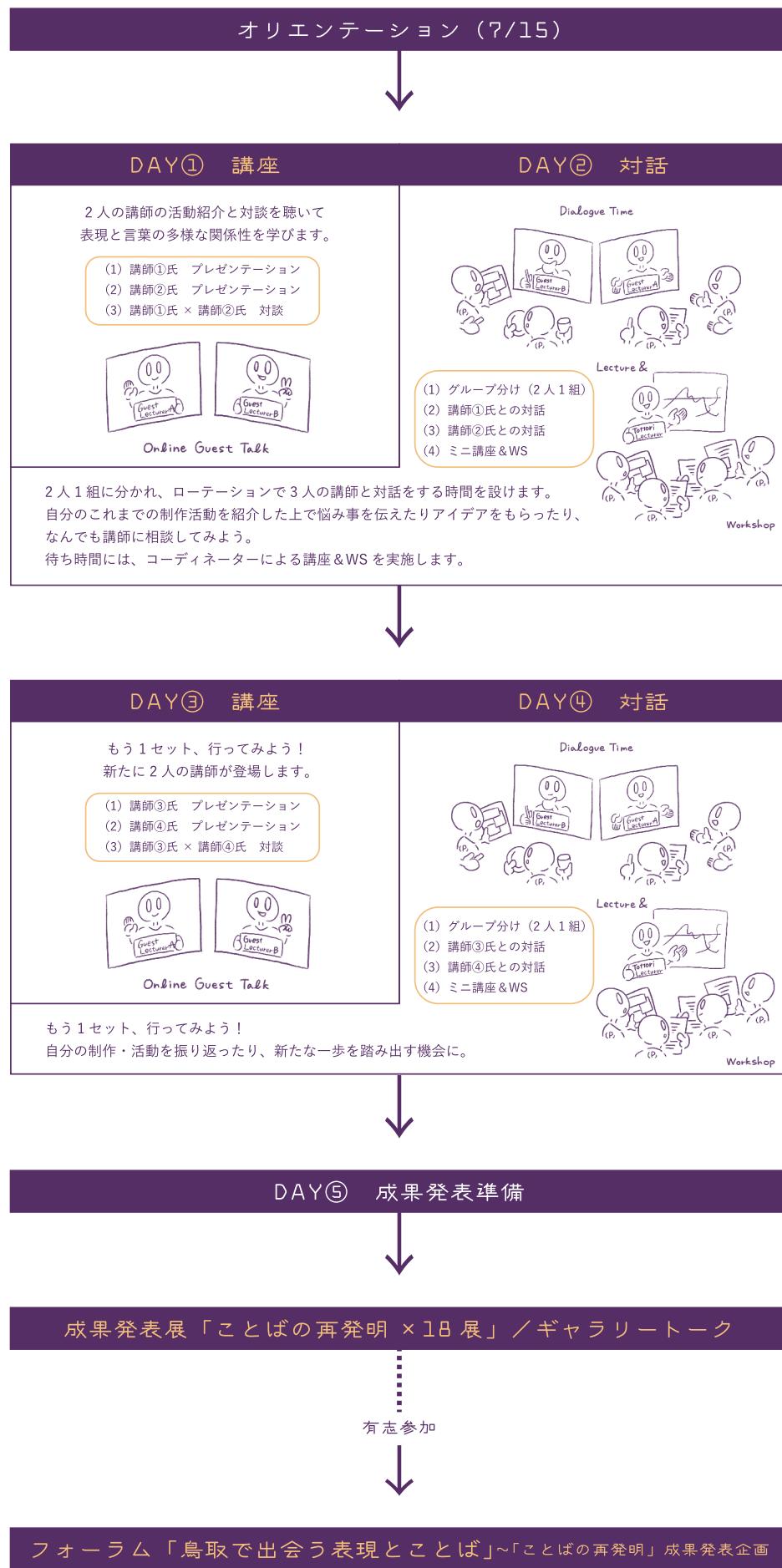
タイマーライン

Timeline





講 口 一 ア マ ツ ブ Roadmap



西島大介（漫画家）

基本的に僕は日頃から「誰でも、そう考えれば、それになれる」と考えています。僕の場合は「漫画家」ですが、それが「芸術家」「音楽家」あるいは「写真家」でも大差はありませんし、東京や大阪であれ、地方都市であれ、活動場所も問いません。

仮に漫画家になろうとするならば、例えば「マンガを完成させなくてはいけない」「雑誌に載らなくてはいけない」と、やや難しいハードルをイメージしがち。でも、現代において雑誌や紙だけではなく、ウェブやアプリの中に無数に「マンガ」は存在します。仮に皆さんそれぞれに「創作を志した幼少期」があったとして、その時に固定化されたイメージよりも、現実世界は毎日変貌しているので、「それになる」条件は実は変わっています。

端的に言うと「漫画家」になることが一見難しいなら、「マンガ」それ自体の定義を変えてしまえばいい、という考え方。これは、僕が自分自身の経験から導き出したシンプルな発想で、個人の講義や「ひらめき☆マンガ学校（教室）」などのワークショップのコンセプトも同様です。困難と思える「クリエイター像」の定義をイージーなものへ変えること。僕の思う「再発明」とは、まあ、そのようなもので、このやや詐欺めいた客観性を「セルフ・マネジメントができる」というのであれば、きっとそうなのでしょう。クリエイターをこそさらに特別視しなくとも、八百屋さんでも、宅配業でも、医師でも、起業家でも、いっそ路上生活者でも、ニートでも、それは同様だと思います。

かくいう僕は、新しい「業務」として電子書籍に特化したセルフ・パブリッシングと、IP（知的財産）の自己管理をしています。過去、大手出版社にとっては残念ながら大きな売り上げとならず、久しく重版をしなくなった作品も、僕個人の目線では大きなビジネスとなり、過去に描き散らした作品が、十分な「資産運用」となることを知ったので、気分的には「資産家」です。気分だけなんですけど。

でも、「誰でも、そう考えれば、それになれる」理論なので、つまり僕は漫画家以上に「IP」という見えない資産を転がす「資産家」なのです。ごつい腕時計や、パリッとしたスーツを着ていなくても、資産家。IP 転がし。

だいたいそんな感じ～～～！

表現とことばの関係

高橋裕行（キュレーター）

「表現と言葉の関係」を考えてみる。メディア論というたぐいの授業をいくつかの大学で教えている私からすると、言葉とはまず何よりもメディアである。しかも、絵と並んでもっとも原初的なメディアである。では、メディアとはなにかというと、東京大学の水越伸先生の定義によると、「コミュニケーションを媒（なかだち）するモノやコト」である。

人類の歴史は、次々と新しいメディアを発明する歴史だった。文字は、もともと人の言葉を記録したメディアであり、その文字をまとめて記録するために本が生まれた。15世紀に活版印刷が発明されると、世界は文字と本に埋め尽くされた。18世紀は視聴覚メディアが飛躍的に発展した。まず写真が生まれた。「写真」は英語だと *photography* だが、photo は光、graph は書くもの、つまり光を記録するものが写真である。次に蓄音機とレコードが発明された。そして、世紀末に映画が発明された。映画は動きを記録するメディアである。

いまでは VR や AR まで含め、視聴覚メディアは発展の最終段階にあるともいえる。これからはひょっとすると、嗅覚や触覚、味覚まで含めたメディア技術が開発されていくのかも知れない。さて、そんななかで、あらためてメディアとしての言葉について考えてみる。

表現との関わりで考えてみた場合、第一に言葉はコンセプトを考えるための道具である。もちろん、絵や図や音が先におもい浮かぶ場合もあるだろうが、逆にいうと、言葉（思考）を完全に排除して作品の構想を練ることは困難であろう。これらの言葉は、通常、作者以外の者が知ることはない。スケッチブックの片隅や、メモ帳アプリにこっそり書きつけられるような言葉たち（メモランダム）だろう。そして、多くは作者の母国語で書きつけられるだろう。

第二に、言葉はそれ自体が表現の媒体となる。つまり、詩や小説、演劇のように、最終的な表現媒体が言葉であるという芸術形式がある。これはもっともわかりやすい「表現と言葉の関係」といいえるだろう。

第三に、言葉は作品を装飾する。「作品解説」がもっとも代表的だが、作品に「ついて」の言葉というものだ。加えて、作品を宣伝広告するための、つまりプロモーションのための言葉もある。

今回の連続講座で問題とされていたのは、もっぱら第三の言葉であるように思われる。作品についての言葉は、作品そのものではなく、かといって作品と無

関係でもない。ドイツ語で「Umwelt（環世界）」という単語があるけれども、Umというのは、「なにかの周り」または「なにかについて」を指し、「Welt」は世界を指す。たとえば、ダニが見ている世界と人間の見ている世界は違うものなのではないか、それぞれがそれぞれの「環世界」を生きているのではないか、と考えた生物学者ユクスキュルが生み出した言葉だ。

作品に「ついて」の言葉というのは、作品の環世界といえるだろう。つまり、作品そのものではないが、作品が覆うオーラとも、纏うベールとも、あるいは作品の周辺に広がる環境とも言いかえることができる。

かつて哲学者のジャック・デリダは『絵画における真理』（1978）で、絵の額縁について考察した。額縁なしに絵を飾ることができない以上、額縁は作品の本体ではないが、かといって作品と無関係でもない。そして、例によって、デリダは、両者を判然と区別することは不可能なのだ、という風に脱構築の論を進めていく。

ここで、作品について観客が発する言葉という視点が抜けていたことに気づく。これもまた作品の環世界といえる。さらに、観客参加型の作品まで視野にいれるならば、観客が発する言葉によって、はじめて作品が完成するという場合もあるだろう。たとえば、2019年のあいちトリエンナーレに出展されたドミニク・チェンの『Last Words / TypeTrace』という作品がある。観客は与えられた10分間で、もっとも愛するものへ10分間の遺言を書くことを求められる。それを書く間の筆致、というかタイピングの右往左往はすべて記録される。誤字やその修正、推敲の模様もすべて記録される。そして、他の観客の遺言とともにディスプレイに表示される。より深く考えるなら、それらは遺言である以上、本来は、宛先となる人に到達したときに完結する言葉といえるかも知れない。

かつてイタリアの記号学者のウンベルト・エーコは、『開かれた作品』（1967）のなかで、作品の「解釈」と、作品自体に観客の関与する「動的作品」と、さらに複数の作者からなる「共同作品」を区別した。しかし、これは程度の問題ともいえる。どんな作品であっても、それが外部に発表される以上、他者の言葉に晒されることは避けられない。誰一人見ることが許されない「秘密の作品」というものは原理上「作品」とは言えないだろう。作品というのは「開封済」になったとき、はじめて「作品」になるのである。

今回、「ことばの再発明」というタイトルの連続講座だったが、作品は、語り直されることによって、新たに生まれる、生まれ直す。作品の魅力とは、そんな新たな言葉を引き寄せる力なのかも知れない。

ことばの再発明



はじめに

- Scrapboxの使い方

- はじめに

The screenshot shows a Scrapbox dashboard for the course "ことばの再発明". The interface includes a header with the course name and a sidebar with navigation links like HOME,はじめに,講師紹介,受講生一覧,Zoom接続で困ったことがあればこちらへ,地域を知り、地域で実践するアーツマネジメント講座2020のご案内, Arts Management Lectures in Tottori, etc. The main area displays a grid of cards with various course details:

- 「ことばの再発明」取り上げ情報共有
- メーリングリスト
- 事業報告書進捗共有
- フォーラム「鳥取で出会う表現ことば」
- 展示の感想を共有しませんか？
- ギャラリートーク | 9/26 (土) 14:00-16:30
- 受講生アンケート回答願&振り返り交流会案内&事業報告書について
- フォーラム③ | 2021/1/20 (水) 19:00-21:00
- フォーラム② | 12/14 (月) 19:00-21:00
- フォーラム① | 11/30 (月) 19:00-21:00
- 中村友紀
- 井澤大介
- ひやまちさと
- オリエンテーション | 7/15 (水) 19:00-20:30
- DAY5 | 9/9 (水) 19:00-21:00
- DAY3 | 9/2 (水) 19:00-20:30
- DAY1 | 8/18 (火) 19:00-20:30
- DAY5 | 8/10 (月・祝) 19:00-21:30

● 200字以内。書式は各講師陣のプロ

成果発表

皆さまから提出いた
希望に添えてない
詳細については、
また、展示や備
9/9 (水) 12:00

1期生 (1F)

1F S=1:72



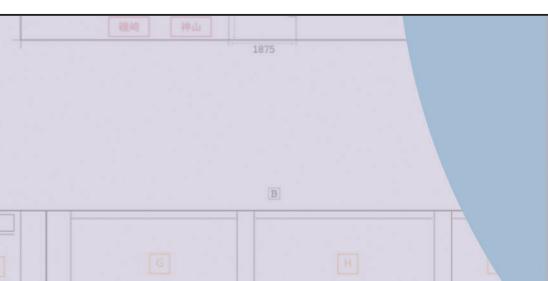
本講座ではオンライン上の情報共有ツール(Scrapbox)を使用し、企画運営・受講生・講師間の情報共

有を行った。導入にあたり特別な知識は必要なく、リアルタイムで参加者同士が編集出来るため、講座の枠組みを越えてコミュニケーションが取れるスペースになった。(関係者のみの公開)

2期生 (2F)

2F S=1:72

14



- 自分の表現や活動についての思いを
- 各々のスタンスで構いませんし、現
いと考えています。
- 奇を衒わずに自分自身の『ことば』

part.1

講演と対話



1期「アートとことば」

2020.7.22 Day1：講演① 後藤怜亜×白井明大

2020.7.26 Day2：対話 & ミニワークショップ①
後藤怜亜、白井明大、佐々木友輔

2020.8.5 Day3：講演② 大林寛×西島大介

2020.8.9 Day4：対話 & ミニワークショップ②
大林寛、西島大介、野口明生

2020.8.10 Day5：成果発表会準備



2期「デザインとコミュニケーション」

2020.8.18 Day1：講演③ 榊原充大×篠田栄

2020.8.22 Day2：対話 & ミニワークショップ③
榊原充大、篠田栄、藏多優美

2020.9.2 Day3：講演④ 熊野森人×高橋裕行

2020.9.5 Day4：対話 & ミニワークショップ④
熊野森人、高橋裕行、藤田和俊

2020.9.9 Day5：成果発表会準備

1期講師



后藤怜亜

NHK 番組ディレクター



白井明大

詩人



大林寛

クリエイティブディレクター／編集者



西島大介

漫画家

「講演」の回と「対話」の回を1セットとして、それを2セット繰り返す。

これが本講座のメインプログラムである。

「講演」回では、2名の講師が自己紹介と活動紹介を兼ねたプレゼンテーションを行い、続けて対談を行う。講師には、1期は「アートとことば」（対談テーマ：わたしとことばの距離感）、2期は「デザインとコミュニケーション」（対談テーマ：あなたに伝えるための言葉）という大枠の方向性を事前に伝え、それに関連する活動やエピソードを中心にお話をしていただいた。

「対話」回では、受講生が2人1組になって、ローテーションで、講師を交えた3名で語り合う。受講生は「講演」回であらかじめ講師の活動概要を知り、人となりに触れ、自分自身がその講師と言葉を交わすイメージを掴んだ上で、「対話」回に臨むことになる。

2期講師



榊原充大

建築家／リサーチャー



篠田栞

企画・編集／仮面劇作家



熊野森人

コミュニケーションディレクター



高橋裕行

キュレーター

講演① 後藤怜亜×白井明大

Report レポート



連続講座『ことばの再発明－鳥取で「つくる」人のためのセルフマネジメント講座－』の1期は「アートとことば」というテーマで行われる。

7月22日(水)は、1期の講師である、NHK番組ディレクターの後藤怜亜さん、詩人の白井明大さんのお二人による講座内講演が行われた。講演はオンライン会議システムであるZoomを利用して行われ、1期受講生のほか、事前申し込みにより講演のみを観ることができる聴講生ら合わせて約40名が参加した。

講演は、前半に後藤さん・白井さんがそれぞれに自身の活動を紹介、後半は「わたしとことばの距離感」というテーマでのお二人の対談で進行した。

言葉が誰かに届く、ということはどういうことなんだろう、という一言から始まったのは白井さんの活動紹介。ここで白井さんは、自身の活動を個別に紹介するだけでなく、詩人として、現在「言葉」をどのように感じているかということを率直に語った。

「詩から作者の思いや考えを汲み取る必要はなく、感じるものがあったかどうか、あなたの心に詩が訪れたかどうかが大切」

「言葉が届くとは、書き手と読み手のキャッチボールではなく、浜辺で貝殻を拾うようなものではないでしょうか。それが拾われることを根拠もなく想像して、必ず誰かに届くことを信じて言葉を書いています」

(白井さんの活動紹介の全文は
QRコードのリンク先にてご覧いただけます。)



沖縄移住以来、東京とは違うゆっくりとした時の中で詩作を続けているという白井さん。言葉に向けるこれら的眼差しは、ひたすら時間をかけて言葉と向き合う作家としての洗練と凄みを感じさせた。

続く後藤さんは、2016年よりNHKで担当する福祉番組「ハートネットTV」「#8月31日の夜に。」、そこから派生したオンラインプラットフォーム「自殺と向き合う」「夏休みぼくの日記帳」の紹介を中心に、番組制作やサイト運営を通じて、精神疾患や希死念慮を抱える10代の若者らとのやり取りの中で「言葉」がどのような役割を持ったかをお話しされた。

生きづらさを感じる若者の“声”を集めることを通じて、理由を尋ねても本人にもわからないことがあると気づいた後藤さん。そこで「夏休みぼくの日記帳」では日記という形で日々の“エピソード”を集めることによって、同じ感情に対してもバリエーションのある言葉がたくさん出てきたという事例を紹介。「言葉にすることは、この瞬間これだと思ったことを信じてそれを定着させること。自分の感情に輪郭を与えること」という視点は、彼らと向き合った後藤さんだからこそ説得力を持つものであった。

プログラム後半の後藤さん・白井さんの対談は、互いの活動紹介を受けて気になったことなどを質問し合う形で行われた。

「若者たちの話を聞くとき、自分が発する言葉についてはどうしているか」という白井さんからの質問に、後藤さんは「絶対否定をせず、驚かず、ただ『そうなんだね』と言うように心がけている。否定されると思っているから言えないことがある」。一方、後藤さんの「詩を書くとき、これで書ききったという感覚は得られるのか」という問い合わせに、「時間をかけることが大事。書き切ったという感覚は技術でなく、時間をかけることで得られる」と答える白井さん。

結果的にこのテーマを語るには短すぎる時間ではあったが、言葉を発する人と受け止める人という立場を横断しながら、言葉の持つ様々な性質や側面を考えさせられる話が続いた。

本講座のキックオフとなる今回の講演がどのような内容になるのか、サポートコーディネーターである筆者自身も非常に興味があった。

お二人に共通して印象的だったのは、いま現在も揺れ動きながら言葉と向き合っているということ。そして、言葉に対して前向きな思いを持っていることであった。

それは白井さんの「自分の心と結びついた言葉が一番伝わる言葉。セルフマネジメントとは手持ちの言葉で精一杯伝えたいことを伝えようすること」という発言であり、後藤さんの「ネガティブな内容であっても、自分の状況を変えられるかもしれない。言葉にできるということは希望だと思う」という発言である。

「ことば」の持つ、その掴みどころのなさと豊かな可能性。そこに向き合い続けるお二人の講演は、本講座の初回にふさわしい内容であった。

(文・野口明生)

講演②

大林寛×西島大介

Report レポート



連続講座『ことばの再発明－鳥取で「つくる」人のためのセルフマネジメント講座－』の1期「アートとことば」2回目となる今回の講演に登壇するのは、クリエイティブディレクター／編集者の大林寛さん、漫画家の西島大介さんのお二人。

オンライン会議システムであるZoomを利用して行われ、1期受講生のほか、事前申し込みにより講演のみを観ることができる聴講生ら合わせて約40名が参加した。

講演は前回同様、前半に大林さん・西島さんがそれぞれ自身の活動を紹介し、後半は「わたしとことばの距離感」というテーマでの対談という形で進行した。

自身の会社で企業やサービスのブランディングデザインを専門に行う大林さんは、様々なデザイン領域を実例とともに紹介しながら、本講座のテーマにちなみ、各領域に潜む“言語性”について語った。

ユーザーにとってのブランドとの関係をデザインする「エクスペリエンスデザイン」については、ユーザー(S)と対象(O)との間に行動(V)という注目すべき要素があり、英語のSVO構文として捉えた時にそれが連続するようにデザインを考えるのだという。

また、ユーザーが対象を“発見”し、それを“選ぶ”までをデザインする「インターフェースデザイン」については、名詞・指差し・ジェスチャーを中心に会話をする言語「ピジン語」の性質に近いことを挙げ、言葉をなくすほどその特性が高まる“反言語性”があることに触れた。

筆者含め、デザインの話題に初めて触れる聴講者も多かったと思うが、ピジン語性のように言葉から離れていく指向の存在によりさらに言葉が意識されることなど、専門性の高い分野の中にも「ことば」を介した共通性が感じられ、知的好奇心が刺激されるプレゼンテショ

- 大林寛（おおばやし・ひろし）**
クリエイティブディレクター／編集者
株式会社オーバーキャスト代表。
デザイン思想系メディア「ÉKRITS／エクリ」編集長。情報設計とエクスペリエンスデザインを専門にしたクリエイティブディレクターとして活動。サービス・事業のコンセプトや企画からインターフェースの設計まで行う。書籍『制作へ』『エクリ叢書 I』『Intertwingled』『学習まんがアフォーダンス』などの監修。東洋美術学校クリエイティブデザイン科 エクスペリエンスデザイン講師。
- 西島大介（にしじま・だいすけ）**
漫画家
1974年東京都生まれ、広島在住。
2004年に描き下ろし単行本『凹村戦争』(早川書房)で漫画家としてデビュー。代表作に『ディエンビエンヌ』(KADOKAWA／小学館／双葉社)『世界の終わりの魔法使い』(河出書房新社)など。2020年「令和元年度文化庁メディア芸術クリエイター育成支援」を受け、個人電子出版レーベル「島島」を設立。自作をせっせと電子書籍化している。

ンだった。

西島さんは、2004年のデビューから漫画家として歩んできたこれまでのキャリアを振り返る形で、自身の活動を紹介。

ベトナム戦争をテーマに描いた代表作『ディエンビエンフー』の連載が出版社都合により継続できなくなってきたことをきっかけに、西島さんは自身で個人電子出版レーベル「島島」を立ち上げることになる。「有名誌での連載を目指して漫画を描く仕事」という一般的な漫画家のイメージを大きく超えて、「自分で自分を運営する」活動に足を踏み入れていった西島さん。作品をコンビニエンスストアで販売されるペーパーバックで出版したり、キャラクターデザインを手がけるほか、令和元年度文化庁メディア芸術クリエイター育成支援事業を活用し、文化庁の支援を受けて制作した電子書籍『世界の終わりの魔法使い』では、同作の二次創作やグッズ制作を誰もが行える仕組みを提供することを試みた。これは「そもそも文化庁はなぜこのような支援を行っているのか」という問いを自ら立て、クリエイティブ・コモンズのように権利を解放し、誰もが自由に使える作品を作るという発想を得てのことだったという。

「道無き道を歩いてきた」と自ら語る西島さんの活動紹介は、その言葉にふさわしい独立独歩の記録であり、自身の作家活動の今後を考える聴講者は、大きな勇気をもらったのではないか。

大林さんと西島さんが互いの活動紹介を終え、続く対談パートでは、お二人に共通する出版の話題を中心に話が始まった。

西島さんは「漫画家として商業的に行き詰った時に、電子書籍の制作や権利の運用などに取り組むようになった」と語り、大林さんが同じくデザイン領域で広範な活動をするようになったきっかけを尋ねる。大林さんは「具象と抽象を行き来するような思考に関心があり、その思考プロセスを言語にしたいという思いがあった」として、自分が編集長を務めるデザイン思想系メディア「ÉKRITS」（エクリ）立ち上げの経緯を紹介した。それを受け、あるテーマについて第三者的に言

葉で語る「ÉKRITS」のような場所は日に日に少なくなっているという意識があると語る西島さん。自身は漫画のコマ割りや奥付をはじめ、ひいては商業の意味や法人の存在など、あらゆるものに対して「それがあるのはなぜだろう」とまず考えてしまうと言う。ここにも、一つ一つを自分で確かめながら活動を進める西島さんの姿勢がうかがえる。

聴講者から寄せられた「ブランドと自分の関係について、作品を売るというのは自分自身を売ることと同一と思うか」という質問に、大林さんは「自分とブランドは、矢沢永吉と YAZAWA のような距離感（笑）。元々は自分から出てきたものが、少しずつ自身を離れて異なるイメージになっていくもの」として、ブランドは自分自身とは異なるが、もっとも近くで理解できる対象として捉えていると言う。一方、西島さんは作品と自己はほぼ直結しているとしながら、出版レーベルを自身で立ち上げた経験を振り返って、「作品を流通・販売させるという立場に立った時、初めてブランディングを意識するようになった」と語った。

その他の質疑応答も話題性に富み、講演は時間をおーバーして幕を閉じた。

前回の白井明大さんと後藤怜亜さんの講演とはまた異なる雰囲気に、両講演を聴講した人は驚いたのではないだろうか。同じテーマに軸足を置きながら、別のベクトルで充実の議論が展開される、これもまた「ことば」という普遍で根本的なテーマの面白いところだろう。

また特に今回は、自身の活動についての具体的なブランディングの方法論についてなど、本講座のタイトルにも含まれる「セルフマネジメント」にかかる話題にも、結果的に多くの時間が割かれた。それはデザイン／漫画というそれぞれの領域で独自性の高い活動を続けてきたお二人だからこそだったのである。

（文・野口明生）

本講演は、坂間菜未乃さん(OVERKAST)によるグラフィックレコードが公開されている。QRコードのリンク先にて合わせてご覧いただきたい。



本講座の特色は、少人数での「対話」にある。

受講生はペアを組んでオンライン上の個室に移動し、

講師と3人でじっくりと語り合った。

(文・佐々木友輔)

1期 Day2

1期 Day2 の講師は、NHK 番組ディレクターとして悩みを抱える人々の声に耳を傾け続けてきた後藤怜亜さんと、詩人として言葉と向き合い続けてきた白井明大さん。それぞれ「聞くこと」と「書くこと」のプロフェッショナルであり、受講者が抱える深刻な問題から些細な問題まで分け隔てなく、妥協せず、とこどん付き合ってくれる強さを持つ二人だった。

講座＆ミニワークショップは、佐々木友輔による「「聞く」技術の共有」。前半は、佐々木が自らの作家活動の経験をもとにドキュメンタリーや参加型アートの事例を紹介し、現在において「優れた芸術家は常に優れた鑑賞者である」「優れた作り手は常に優れた受け手である」のではないかと仮説を提起。後半は受講生がそれぞれの活動や仕事の現場で取り入れている「聞く」技術を共有し合う時間とした。デザイナーがクライアントから正確な要望を聞き出すための工夫や、精神医療の現場で試みられているオープンダイアローグなど、様々な事例が紹介された。

1期 Day4

1期 Day4 の講師は、クリエイティブディレクター・編集者の大林寛さんと、漫画家の西島大介さん。大林さんはデザインについて、西島さんは自分自身の作品や活動について、それぞれ、言語化が困難なものや言語化が忌避されているものを敢えて言葉で語りきることにこだわってきた経験を活かし、受講生が自分の言葉を作り上げていくためのヒントを提供してくださった。

講座＆ミニワークショップは、野口明生による「わたしと共に変わりゆく言葉」。前半は、とりいくぐる、鳥取銀河鉄道祭、現時点プロジェクトなど様々な団体・イベントの運営に携わってきた野口が、そこで体験した言葉にまつわるエピソードを紹介。自らが置かれた立場や状況に応じて、求められる言葉や必要な言葉が変化することについて語った。後半は、忘れられない言葉の思い出とその状況について受講生が発表。他人のラブレター執筆を手伝った思い出や親から受け継いだ決め台詞など、個人的な体験・思考・試行に根差した言葉に宿る独自の魅力を掘り下げていった。

対話の話題は、今後の活動の展望や温めているアイデア、いま悩んでいることや迷っていることなど様々。皆が話しやすい場を作るために録音・録画は行っていないが、対話の雰囲気は、本書の講師コラムや受講生コラムからも想像することができるだろう。

また、講師との対話はローテーションで行うため、受講生には1時間ほどの待ち時間が生じる。その隙間を利用して、企画運営チームによる講座＆ミニワークショップを実施した。講師との対話に向けたウォーミングアップ、もしくは対話後のクールダウンの役割を担うと共に、本講座の目的を皆で確認・共有するための時間となった。

2期 Day2

2期 Day2 の講師は、建築家／リサーチャーの榎原充大さんと、企画・編集／仮面劇作家の篠田栞さん。共に、クライアントの話を聞いて問題を摘出し、解決策や打開策を提示することのプロフェッショナルであるが、人と人の間に立って円滑なコミュニケーションをデザインすることに主眼を置く榎原さんに対し、篠田さんは個人の趣向や欲するものを深く探ることを重視するというよう、対照的なアプローチで対話する姿が印象に残った。

講座＆ミニワークショップは、蔵多優美による「「好奇心」と「視点」の交換」。前半は、好奇心が刺激され、知らないことを面白がることができる場所やイベントについて、蔵多の例示をもとに、受講生が自らの体験を交えながら情報を交換。個々人が持つ独自の視点を掘り下げていった。後半は、そうした複数の視点を組み合わせることで生まれるアイデアや、実現できるものについて考える時間。自分自身の活動を振り返り、そこでいかなる視点の組み合わせを行っていたかを語る者もいれば、周囲の人々とのコミュニケーションから、自分の視点の癖や傾向に気づいた経験について語る者もいた。

2期 Day4

2期 Day4 の講師は、コミュニケーションディレクターの熊野森人さんと、キュレーターの高橋裕行さん。受講生からの相談に対して、豊かな知識と経験を背景に、既存の枠組みに収まらない「見せ方」「伝え方」の技術や実例を数多く示してくださった。合理的かつ経済的な正解を求めるだけでは不十分。あらゆる作品やプロジェクトには余白や余裕が必要だ、遊び心を持つべきだという信念を、両者は共通して持っているように思えた。

講座＆ミニワークショップは、藤田和俊による「伝えるために、内外を編集する」。藤田は冒頭で、自分が伝えたいことを伝えるためには、自分の内側にあるものと外側にあるものを整理し、つなぐことが必要であると指摘。内側の整理とは、自分自身の人生や活動を振り返り、いま自分が持っている武器を確認する作業。外側の整理とは、居住地域や家族との関わり、仕事や趣味など、自分の環境的な武器となり得るものを探査する作業。藤田はそのための具体的な方法として、「未来予想図を作る」と「インタビュー練習」（記者に取材を受ける想定で返答を考える）の二つを挙げ、受講生たちにも実践を促した。

講演③ 榎原充大×篠田栞

Report レポート



「言葉」とはなんだろうか。普段だれでも使うものなのに、この講座の中でも何度も自問自答するほど容易に答えが出ないものだ。その難解な問いに挑戦する「ことばの再発明」の2期が始まった。この講座は自分自身の内外に向け、「言葉」の意味や役割と向き合うもので、1期がより内（自身）にある言葉に向き合う内容であれば、この2期は「デザインとコミュニケーション」と題し、外（他者や社会など）に向けて発信していくために考える内容だ。

1回目の講師には、榎原充大さん（建築家／リサーチャー）と篠田栞さん（仮面劇作家／言葉と企画）の二人をお呼びし、約35人が受講、聴講した。様々なプロジェクトを巧みな言葉で交通整理する榎原さんと、人の内側に秘められた言葉をうまく引き出して外へのチャンネルを作る篠田さん。それぞれの活動紹介から興味深く、その後は「あなたに伝えるための言葉」をテーマとして、言葉のプロフェッショナルによる対談が進んでいった。

課題を解決し、対話の交通整理をするための「言葉」

榎原さんは、大学時代に文学部でありながら建築を研究対象にし、建築物よりも建築の背景や歴史といった文脈に関心があったという、異色の建築家。自身を設計者でも研究者でもなく「リサーチャー」と定義し、2008年に建築リサーチ組織「RAD」を立ち上げ、2019年には株式会社を設立した。地域移動型短期滞在リサーチプロジェクト「RESEARCH STORE」(2011～)や、古い地域の写真と住民の記憶を蓄積する「斑鳩の記憶アーカイブ」(2012～)などを企画。その後も大学や地域の建築物のディレクションなど活動を広げている。建築物を建てる地域のことを調べ、住民の声を聞き、建てるまでのストーリーを言葉にしてまとめていくのだが、実は言葉の使い方はもう一つある。「行政や市民や設計者といった違う立場の対話の交通整理

榎原充大(さかきばら・みつひろ)

建築家／リサーチャー

1984年愛知県生まれ。2007年神戸大学文学部人文学科芸術学専修卒業。建築や都市に関する調査・執筆、提案、プロジェクトディレクション／マネジメントなどを業務としプロジェクトの実現までをサポートする。2008年から建築リサーチ組織「RAD」を共同運営。2019年に、公共的な施設の企画運営のサポートをおこなう「株式会社都市機能計画室」を設立。

篠田栞(しのだ・しおり)

企画・編集／仮面劇作家

1990年、奈良生まれ。京都大学在学中より日本の民俗芸能や古典芸能、特にお能の身体に惹かれ、パフォーマーとして国内外のプロジェクトに参加。その傍ら、会社員として広告・デザインのプロデューサー業を経験。現在は、2021年に立ち上がったオンライン劇場、THEATRE for ALLの研究機関、THEATRE for ALL LABの編集長として、アクセシビリティをテーマとした多様なコミュニケーションづくりを模索中。

をすること。課題を言語化して整理して解決へと向けて進めていくので、言葉を扱う比重はどんどん大きくなっている」。榎原さんは、本質的な目的に軸を持たせるために言葉を扱い、さらにそれを誰かに伝わりやすいように伝えるための言葉へと変換する作業を行っているようだった。

あなたしさを掘り上げ、人に伝えていくための「言葉」

本講座の企画者である佐々木さんの言葉を借りれば、榎原さんが「3者間の言葉」を扱うのであれば、篠田さんは「2者間の言葉」を巧みに扱う人だ。大手広告代理店でプロデューサーとして勤め、この春から独立してフリーランスでライターや企画、編集までをこなしている。そして、忘れてはならないのが「仮面劇作家」という肩書き。幼少期から演劇を続けてきた経験を活かして、物語を生み出す過程で言葉を編んでいる。

「みんな自分たちらしさが何かわからないことが多い。説明するための一般的な言葉は使われすぎている」と篠田さん。この講座の目的でもあるセルフブランディングのためには、自身のことを知らないことには始まらない。篠田さんは様々な珍品を陳列するオレ・ウォルムの「驚異の部屋」などを例に挙げた。「自分の好きなことが陳列された博物館や、もしくは自分の葬式や回顧展を考えてみてください」。子ども時代の記憶やコンプレックスまで紐解きながら、自分の選択には必ず理由があり、それこそが「独自性」であると話した。

対談

それぞれの活動紹介と言葉に対する考えを聞いた後は、二人の対談と質疑応答が行われた。

榎原さんからの「言葉の捉え方が違いますね」の第一声から対話がスタート。「僕にとって言葉は伝えるための手段。相手がどんな人か、どうやつたら伝わるか。目的を達成するために使いますが、篠田さんは自分の言葉をどう整理していくか、なのかなと思う」と言う榎原さんに対し、「相手の文脈を汲み取って伝えることは大事。その上で、自分が挑戦したいと思っているのは、その人が人として何を持っているかを聞き出すこと」と篠田

さん。

「榎原さんは翻訳者だと思う。私の場合はどうやって個人に寄せていくかがテーマですね」と話す篠田さんは、その人自身も気づけていないような心の奥底にある言葉を拾い、そこから物語を生むイメージだった。一方の榎原さんは「僕は個人という考え方はありません、仲介の立場にいると思っています」。リサーチャーというだけあって、多方面の情報や声をバランスよく聞き取り、全体を俯瞰したストーリーを伝えていく人だ。

質疑応答の最後は、言葉を届けるために必要なことについての質問が寄せられた。クライアントが誰に向けて伝えたいかあやふやな時はどうするか、と受講生が質問。榎原さんは「とにかく聞くことを重視する。あやふやな場合は、組織の論理が働いて担当者個人の意見が薄れている場合が多い。それだと言葉自体に責任感がなくなる。言葉の重みは、そこに人がいることが大事」と話した。篠田さんも「本当に伝えたいことがあるかが大事で、それを探すために他の事例や具体をぶつけてみて近い像を詰めていく作業をする」とアドバイスし、ここで対話の時間は終了となった。

内の言葉を整理する篠田さんと、外への言葉を整理する榎原さん。一見、タイプの異なる二人だが、実は共通項があるように感じた。それは二人とも向かい合うものの「本質」がどこにあるかを大事にしている点と、そして徹底的に「聞く」ことだ。その人らしい言葉があって初めて誰かに響くのであって、その次に、それを誰にどのように伝えていくかが求められる。二人の話からは、人が持つ本質や本音こそが「言葉の重み」になることが感じられた。内にある言葉を紡ぐことと、発信するための言葉は実はちゃんとつながっている。内側に言葉を掘り下げていく1期と、言葉が誰かに届くまでをデザインする2期のつながりも学ぶことができた初回となった。

(文・藤田和俊)

講演④ 熊野森人×高橋裕行

Report レポート



1期から続いてきた「ことばの再発明」もいよいよ最後の講演となる2期 DAY3が行われた。豪華な講師陣の最後を締めくくるのは、クリエイティブディレクターの熊野森人さんと、キュレーターの高橋裕行さんの二人。両者とも本質を的確に捉えて言葉に落とし込んでいくことに長けていたり、そこには迫るまでの視点の持ち方やアプローチに違いがあり、興味深い内容となった。この日もZoomを使った講座で、受講者と聴講者を合わせて約35人が参加した。

熊野森人（くまの・もりひと）

コミュニケーションディレクター

1978年大阪生まれ。株式会社エレダイ2代代表取締役／コミュニケーションディレクター。株式会社ゆっくりおいしいねむたいな代表取締役。京都精華大学、京都芸術大学非常勤講師。著書に「うまくやる～コミュニケーションが変わる25のレッスン～（あさ出版）ウェルビービング研究の末、罪悪感のない夜食カレー「22時のカレー」を開発、発売。

高橋裕行（たかはし・ひろゆき）

キュレーター

1975年生まれ。キュレーター。慶應義塾大学環境情報学部卒、岐阜県立国際情報科学芸術アカデミー（IAMAS）卒。主な企画展に「動き出す色の世界」「影のイマジネーション～星降る夜の魔法使い～」展（SKIPシティ映像ミュージアム）など。著書に『コミュニケーションのデザイン史』（フィルムアート社、2015年）がある。多摩美術大学非常勤講師。慶應義塾大学SFC研究所所員。

クリエイティブディレクターという仕事を「うまくっていないことをうまくいくようにするためのプランを作る」とことだと表現した熊野さん。大学講師の経験も長く、学生への授業で実践している内容を教えてくれた。

そのために必要なことの一つが「視座の置き方」。「後ろ向きに学校から近くのマクドナルドまで歩く」や「何らかのコンテストで受賞する」という課題を出し、新たな視点を見つける力や考える力をつける。後者の課題は「自分がこれを作りたい」という作家的思考はいらない。人が求めていること、そこで評価されることはどういうことかを考える」ことが目的だという。つい主観的な視点でばかり考えてしまう者にとって、大きなヒントとなる考え方であった。

必要なことのもう一つは「解像度を高め、考えること」。自分自身の思考や問い合わせが明瞭でないと人に伝えられない。まずそれを、はっきりと見ることができる解像度にしておくことが大事で、その次に、それを他者に伝えるためにどうするかを順序立てて考えることが大切だと話された。

高橋さんはキュレーターとして、展覧会や道後温泉（愛媛県）での現代アートの場づくりを行っている。また企画や本の執筆、編集者に近

い活動も行っており、自身の仕事の全体を「新たな文脈を生んでいくこと」と評した。さらに自身の仕事の分野を9つに分類し、それぞれ工夫している点を紹介。例えば「まとめる」では、字数を制限したりタイトルをつけてみる。「論じる」では、「好きなものの中の嫌いを探す」など逆視点で考えるという。展覧会など「並べる」仕事では、「小から大、大から小など、色や形や間隔などを踏まえ、入口から出口まで順路を考えることによって伝える方法を探っていくそうだ。高橋さんは歴史や哲学などの幅広い知識を背景とする広い角度を持った視点を駆使して、さまざまな切り口で問題を捉えておられた。

二人の自己紹介が終わると、お互いに気になったところや、参加者から寄せられた質問に答えながら持論を展開していく対話の時間となった。

どう伝えるか

高橋さんがライゾマティクスと共同制作した映像作品について、「コミュニケーションにおいて難しいのはバックグラウンドが違うこと。その溝をどう埋めるか。結構、調整が必要だったのでは?」との質問が寄せられたところから対話がスタート。ここから話は、クライアントへの伝え方、さらには「人に伝えるためにどうするか」を議論していく流れになった。「同じ内容でも、それを誰が言うかによって通るか通らないかが決まることもある」と、発信者のカリスマ性や伝達力の重要さを語る熊野さん。高橋さんは、「ユーザーが求めるものを突き詰めるデザイン思考、自分のやりたいことを突き詰めるアート思考があるが、僕は『プレゼント』として考える。自分が渡したいもので、人が喜ぶものを渡そうとしている」と話した。

センスはどう磨く?

時代の変化は「多様性」の点でも変わってきた。「他人と違うことをどう捉えていくか、またセンスをどう磨くべきか」という質問に対し、熊野さんは「視点はそもそも人それぞれ違うものなのだから、そこに自信を持つことが大事」と説いた。「普通はこう、一般的にはこう、というようなマジョリティーはなくなり、みんながマイノリティーの時代。自分が良いと思うことを、人になんと言われようがやるだけ」と話し、高橋さんも「新しいセンスを探すのは冒険。それには大冒険もあれば、散歩道のような小さな冒険もある。『冒険』と定義すれば冒険になる」と話した。日常で周りに起こることをどう捉えるかというところからも、センスは磨けるのだという指摘でもあるだろう。

今回の講座も学ぶべき点が多くあったが、中でも「表現は内でも外でも、過去でも未来でもない」という言葉が印象に残った。発したい何かがあって、伝えたい相手がいる。その目的を達成するためには、自分の思考を整理し、相手を知り、また時代や社会を知ることが求められる。またそれゆえ、場所や時間や相手によって、言葉は変化する。私たちはそのことを理解し、コミュニケーションの中で言葉や表現を届けるために考え続けないといけないというわけだ。

外にある表現、内にある根

「伝える」ことについて考える上で、二人とも時代の変化を感じると意見が揃った。「今の時代は、相手のレスポンスを見て、それに作品を合わせていくことも多い」と高橋さんが言えば、熊野さんも「他と違うことをリスクとし、『ウケる』ものが正義になった。昔は、表現とは内発的なものだという認識があったけど今は違う」と指摘。つまり「表現が外にある」とも言える時代になったという。一方で、両者ともに「内」も重要だと話した。高橋さんは「結局は、居ても立っても居られないもの、つまり根みたいなものを持ちなさい、ということ。自分の好きなものが見つけられないという人が多いが、例えばワインなら、最初は酸っぱいか甘いか、どちらかを選ぶだけ。その感覚からどんどん細かくしていけば良い」とアドバイスした。

何に価値があるのか

「今後も残るメディアとは」という質問に対して、唐突に「今、徒然草を読んでいるんですよ」と高橋さん。「徒然草も最初は残すつもりじゃなかったと思うけど、結果的に長く残った。人間の情や思うことって、実は昔と今あまり変わらないのかかもしれない。また、それを現代訳するときにどの程度解像度が落ちるかといったことを考えたい」。熊野さんは「必ずしもロングライドなものが良いというわけではない。一瞬でも螢のように光ることもあるから、決めつけるのは良くない」と話した。この考え方には、情報やメディアが生まれては消えるスピードが速い現在だからこそ、大事にしたいと思えた。

(文・藤田和俊)

2020年、「ことばの再発明」をした私たちの夏によせて。

後藤怜亜（NHK 番組ディレクター）

7月26日。いつも以上に長かった梅雨がうだうだと明けていく気配の日曜日、だれもいないオフィスの9階から窓の外に目をやると、青空とビルと雲の隙間にちっちゃな虹がかかっていた。

送ってもらっていたZoomのリンクを触る。ヘッドフォンをつけてログインすると、鳥取大学の一室に静かに集まつた運営の皆さんのがいた。ウェブカメラを通して見下ろすアジト的な部屋のなんだか生暖かい夏の湿気が伝わってきて、「今日の感染者数」と毎朝頭上に書かれた東京の空とは少しちがう、パラレルワールドとつながったような気持ちになる。誰かが「世界中が同じ文脈を共有している時代だ」と息巻いていたが、果たして本当にそうだろうか。画面越しに見るお互いの世界も、きっとそれぞれにちがう難しさと、ちがう豊かさを抱えているのだろう。道すがら原宿で買ったドトールのパンと冷たいミルクティーを飲みながらしばし運営陣と談笑。前週に対談させていただいた、沖縄にお住まいの白井明大さんがいらっしゃる。まったくした空気の中で私たちはこの日5時間半、鳥取に暮らす12名の制作の方々と「ことばの再発明」を行つた。

2人1組のペアになったメンバーと、45分ずつ対話の機会をいただいた。この日を迎えるにあたって自分で決めていたルールがあった。その1つは、誘導しない、ということだった。だれかとセッティングされた場で対話するとき、とりわけそれがオンラインという“生産性”“効率性”的高い空間であるとき、10年ちかくサラリーマンをしている自分のような人間は、落としどころを探したり、まとめたり総括する方向への導きを無意識に探し始めてしまうだろうな、と思った。参加された人にきっと何かを持ち帰ってほしい、というよこしまな感覚とも関係があるのだろう。でも企画者の1人である佐々木友輔さんが期待しているのはそうしたものではないと理解した。教える／教わる、与える／受け取るではない、もっと対等でふつうで自然発生的な「対話」「ことば」の本質こそが、この講座のめざすハピニングなのだろうと考えた。

最初の20分、ペアのうち1人の方が口火を切り、テーマとか主題とかそういう最短距離のアクセスではない、ナチュラルな独白みたいなものがZoomの小部屋の壁に反響し、もう1人と静かにそれに聴き入った。その人が持ち寄ってくれたことばに反応し3人で話す。すると自然に、乱暴なカットインの必要もなく20分が経ち、次の1人が話を始める。この頃にはなぜか、一応「講師」である自分の存在はほぼ不要になっていて、ペア同士の間に対話が生まれる。最後の5分。3人の間に、ぼんやりと、でもたしかな共通の核心みたいなもの

が浮かび上がってくる。それを無理矢理掴もうとすることもせず 45 分が経ち、小部屋を出て行く。3人が確かに“話した”という残響だけが、みえもしない Zoom の小部屋の中に響いていた。

自分自身のこれまでのキャリアー制作者とか社会人としてではなく、人間としてのーと、まじまじと向き合って、大切な経験を話してくれた ISOIYO さんと Seizan さんペア。バックグラウンドもちがうけど、お互いの活動や日々考え悩んでいることに、自然なことばをかけられる水田さんと品岡さんの柔らかさ。先に対話を終えた白井さんから「後藤さんに聞いてみて！」と無茶ぶりだったのは、オーラルヒストリーの実践的研究にも取り組む磯崎さんとイケメン研究で卒論に取り組む音泉さんという異色ペアだったが、何かいろいろなちがいを越えて 2 人がこの日つくり上げた独特の空気が小部屋に充満していた。神山さんと yamasaki さんは「つくる人」として深くまで潜り込んでいくからこそのことばとの折り合いの難しさを共有していたように思う。exkeee さんと藤原さん、つくること、自分であるということへの向き合い方が全然かっこつけていないくて、弱さも迷いも飲み込んでしまうピュアな感覚を持ち続けられる姿勢が素敵だ。そして田中さんとナカヤマさん、お 2 人ともとてもはっきりとしたライフワークと主題の持ち主でありながら、あえてその輪郭のあいまいな部分にきちんと触れていくとする勇敢さに心から拍手をしたい。

夕暮れが近づく 18 時半。部屋を出るときの皆は何故だかちょっといい顔をしていた。1 人 1 人がログアウトしていくのを見送りながら、このイレギュラーな状況で迎えた季節の中で、強い夏の匂いを今年いちばん感じた瞬間だった。

あの「ことばの再発明」には、どんな意味があったのか。生産性や効率性という今とりあえずあるような指標に基づいて、この価値をだれかに伝えることはむずかしい。そうなると、せめて参加されたメンバーの中に、何か残ったものがあることを願うばかりだが、そもそもその辺りにレスポンシブルであるはずの「講師」の 1 人である自分すら、早々に「何かを持ち帰ってもらおう」とすることは主旨に相応しくないと思いやめてしまったので、正直わからない。ただ言えるのは、こんな時間は二度とないだろう。こんな時間はほかにふたつとないだろう。ことばについて考えるとき、自分を取り巻く今日という現実の中の、諦めと惰性と暴力に満ちたそれに絶望しない日はない。もうやめてしまいたくなることも、諦めて雑になってしまふときも、1 週間のうちに数え切れないほどある。そういうときに、私には思い出す人たちがいる。それは恩師や友人や昔の仲間、1 年に数回も会えない同志、二度と会えないところに行ってしまった恩人。いま私が向き合っている原稿用紙なり白紙のワードに留めようとしている一言一句に、彼らは何と思うだろうか。そう考えるとき、私は嘘や体裁やわかりやすさ、格好よさ、洗練されたものだと思われたい邪念以上に、事実と真実を、わかりにくさを、青臭く扱いづらい本当のことばを書き、語ることを、やめられない。

この夏「ことばの再発明」に集った人々との時間も、私にとってそうした新たな記憶の 1 つである。

ことばはいつも手渡せるわけではない

榎原充大（建築家／リサーチャー）

「アーティスト、クリエイター、デザイナー、パフォーマーなど広い意味での表現者＝「つくる」人にとって、「自身の作品や活動を適切に言語化し、他者に伝える」ことは、正直さほど気が進まないこともかもしれません。自分は言語化がうまくない、とか、助成金の申請がうまくなるよりももっとしっかりしたものを作れるようになるのが先だ、とか、そもそも言いたいことは作品に全て込めているから説明なんていらない、とか、喋りばっかりうまいのってなんかダサい気がする、とか、理由はいろいろ浮かんできそうです。

でも、先に結論めいたことを言うと、制作や作品とことばとを分けている時点で、その考えは改められなければならない、とわたしは考えています。作品はことばとともに生まれ、制作を成立させるものこそことばに他ならないからです。

<こんなことを書き出しているわたしは一体何をしている人か>

わたしの普段の仕事は（とても地味なので説明し出すと細かくなってしまうのですが）すごく抽象的に言うと、ものをつくる人と、使う人と、つくるためにコストを支払うとの間に立って、「もの」がよりよくなるように支援することです。

その「もの」は、ときに大学や図書館などの公共施設だったり、公園だったり、展覧会だったり、それらを知らせるため／つくるプロセスでおこなうワークショップのためのチラシやウェブサイトだったり、もう少し広い視点でまちを広く知らせるためのシティプロモーションと呼ばれるものだったり、いろいろです。

わたし自身は「建築家／リサーチャー」という肩書きで活動していますが、その「つくる」プロセスの中でどんなことをすればよりよいものになるのかを考え、企画し、実施することもよくします。例えば、使う人の声を集めるリサーチ（一般には「ワークショップ」と呼ばれます）をおこない、それをつくる人に伝えて「もの」に影響を与えるとか。

ともあれ、そういう仕事をしていると気づくのは、「ことば」というものの大事さと、大事であるにもかかわらず「ままならない」というやっかいな性格です。ままならないということはつまり、不自由であるということです。

<ことばは大事だけどままならない>

例えば、ある公園をつくろうとするときに、いろいろな人の声を聞いた上で「柵のない自由な公園にしよう！」というテーマを掲げたとします。あなたはもしかしたら柵の有無はどうでも良くて、「それくらい自由な公園にしたい」と思って言っただけかもしれない。でもその「柵のない自由な公園にしよう！」ということばは、いつの間にか一人歩きして、まだ声を聞いていない人から「柵をなくしたら24時間だれでも入れるようになるので危険だ」とか、「むしろ柵によって囲われているからこそ自由なのだ」とか、「そもそもここで言われている自由とは何かがわからない」とか、あなたにとっては「そういうことじゃないんだけどな……」ということも含めて、バシバシといろいろな意見に晒されることになります。

ことばの「ままならなさ」は、ことばそのものが一人歩きをする、ということに多く由来すると言えるでしょう。あなたが発したことばは、発せられた時点から、他者の解釈に全面的に委ねられてしまう。自分のことばが誤解される自由をあなたは止めることができないわけです。

もしそうやって「そういうことじゃないんだけど」な誤解をしている人があなたの目の前にいれば、あなたは「いや、わたしが言ったのはこれこれこういうことでして……」と直接話すことができます。直接話すことによって、お互いのコミュニケーションがはかられ、相手の誤解も溶けるかもしれません。でも、リアルとバーチャル問わずコミュニケーションの種類が膨大になっている現在、すべてのコミュニケーションが対面でできるわけはありません。ことばはいつも手渡せるわけではないのです。

<世界の認識はことばを通してでしかできない>

先に「誤解」といいましたが、それがおこる理由を考えてみると、根本には、ひとりひとりが異なる世界を生きているから、という言い方ができるかもしれません。「赤」という概念に様々な種類のことばを持つ言語に生きる人と、そもそも「赤い」という状態にことばを持っていない言語に生きる人との間では、コミュニケーションを円滑におこなうことはできません。

それは極端にせよ、人間の認識はどうしてもことばに頼らざるを得ないです。ことばが与えられていないものについては認識ができないわけです。そういう認識不能なものに適切なことばを与えるのも、いわばアーティストの仕事だと言えるかもしれません。人はことばがなければ認識ができず、それゆえに認識の違いが誤解を生みだすという「ままならなさ」を備えているのがことばだと言えるでしょうか。

そう考えたときに、「ことば」との向き合いで意識しないといけないのは、「その精度を高める」ではなく、「その効果や影響を考えながら常に更新する」なのかもしれません。完璧に説明できるようにならなければならない、なんて考えるだけ無駄です。どんなにうまく説明しても誤解されるのです。ことばをことばとしてだけ磨き上げても意味がありません。

それよりも、相手の反応を意識しながら、こう説明するところ取られることが多いから、こういうふうに調整してやってみよう、みたいに、トライアルアンドエラーを繰り返しながら柔軟にことばと付き合っていく方がいいのでは。その時にたくさんの「無駄になった言葉」があるかもしれません。でもそれでいいのです。ときにことばを他者に手渡し、ときにより多くの人たちに投げかけ、その中で揉まれながらことばを更新してこそ、ことばの持つ強さが高まっていくのではないか、と思うのです。

講師との対話を終えて

田中京子（Reading ACT 代表）

「ことばの再発明」というタイトル、二つの名詞が合いそうで合わないピースのように感じられる。「何をするんだろう？」イメージがわかないまま、「活動に悩みや迷いを抱えている方」という言葉にひかれて参加した。講師との対話は、受講生2人がペアとなって1日に講師2名とそれぞれに対話を持つという、ブロックを組み替えるようなカリキュラムである。プロフィール情報はあるものの、全く接点がない業界の人もいる。「あれを聞こう、これを話そうと考えるより、ノープランでいいではないか」そんな気持ちでZOOMにアクセスした。

仕事では「いま見ているものをどう伝えるか、伝わる表現とは何か？」にいつも七転びしている。ときに起き上がりせず、言葉の海に沈んでいる。知識でたぐろうとして、頭でっかちだから沈むのか…力を抜いたら水面に浮かぶはず。

「対話」は境目のない海原だった。暖かい南洋だったり、寒流にぎゅっと身が締まったり、心のよどみに動きが生まれて流されていく。話題がどう転ぶのか、講師も分からなままに？いつもあっという間に終わりの時間が来た。風を吹かせるのはペアを組んだ受講生。社会人もありきたりな経験ではない。生業を持ちながらも他の空間で伸び、開こうとするさまは、はたから見れば驚異のバイタリティ。

講師が後藤怜亜さんの回では、ナカヤマサオリさんとペアを組むことになった。女性ばかり、ゆるりとした対話のなかで、ふと「ことばの産婆さんがいるといいのに。」とつぶやいていた。これも違う、あれも違うと探しているものの、実は…答は自分の中に持っているんじゃないかな。それを生みだす助けとなるもの、そんな存在がないだろうか。思いがけないつぶやきが生まれたのは、ナカヤマさんが助産師という、日ごろあまり出会うことのない人だったからかもしれない。

対象と一直線に向かい合うのではなく、別の頂点を持った、多角形の対話。全員とシャッフルして話してみたかった。きっとみんな、講師陣と同じくらい疲労困憊したに違いないけれど（笑）。

part.2

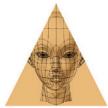
成果発表展
ギャラリートーク

2020.9.24	搬入
成果発表展「ことばの再発明×18展」	
2020.9.25	Day1
2020.9.26	Day2／成果発表会「ギャラリートーク」 ゲスト講師：多田かおり、田中ちえこ
2020.9.27	Day3
2020.9.28	Day4／搬出

2020.09.25(金)-09.28(月) 10:00-18:00 (26(土)13:00まで / 28(月)16:00まで)



ISOIYO



Seizan

×1日展

ことばの再発明

-鳥取で「つくる」18人による成果発表展-



+

小取舎
kotorisya



入場無料

Galleryそら

POSTCARD

ことばの再発明

-鳥取で「つくる」18人による成果発表展-

「ことばの再発明」は、鳥取で活動するアーティスト、クリエイター、デザイナー、パフォーマーなど広い意味での表現者「つくる」人々を対象とした連続講座です。

「ただ作品を作るだけなく、トークイベントやワークショップ、ブレゼンチングや助成金申請など様々な場面で『言語化』が求められる現在の状況下で、表現と言葉はどのように関係を保つべきか」という問題意識のもと、受講者は講師との対話を通じて、これまでの作品や活動を顧み、検証し、言語化して、さらに自分を掘り下げたり、他者に伝えるための技術を磨いてきました。本展はその成果発表です。

言葉に深く関心と思い入れを持つ18名の「つくる」人が一堂に介するこの機会、どうぞ高齢ください。

出展作家一覧(五十音順)

井澤大介 / ISOIYO / 遠峰つづき / ekoee / 斎井彩香 / 齊藤華々 /
仲山かなえ / 詩例トリ / Seizan / 田中京子 / 中村友紀 /
ナカヤマサオリ / にやろおひかり / 鹿野京子 / 水田和世 /
もりとこ / jansaki

日程: 2020年9月25日(金)-28日(月)

時間: 10:00-18:00 (25(土)13:00まで / 28(月)16:00まで)

主催: 鳥取大学地域社会実践研究センター・佐伯講師室

企画運営: 在住木村純、鹿野京子、野口洋平、野田和也

WEB: リンピード評議会を開くください
出展作家の紹介 / 開催概要 /

ことばの再発明 / ワークショップ / ブレゼンチング /
マガジンメント国際2020 / の
詳細はこちで
artscholarcenter.tohoku.ac.jp/archives/news/kotoba_kirei/presentation/

令和2年度 文化庁 大学における文化芸術推進事業



大學から
文化力
POWER OF CULTURE

ギャラリーそら（鳥取市栄町）で、本講座の「成果発表」となる展覧会を行った。受講生は作品一点以上に加えて、ポートフォリオやZINE、パネルなど自分自身を紹介するものをセットで展示。講座を通じて過去の作品や活動を顧みたり、自分自身を掘り下げたり、他者に伝えるための技術を磨いてきた成果を、「ひとまず」のかたちにすることを目指した。展覧会場は、これまでオンライン受講を続けてきた受講生たちにとって初顔合わせの場でもあった。

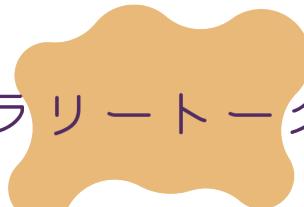
ここからは、成果発表展とギャラリートークの様子を伝えるレポートを掲載とともに、受講生18人のプロフィールと成果発表展で展示した作品、さらにそれぞれの作家へ寄せられた講師によるコメントを紹介する（掲載にあたり、文中の敬称、語尾の統一は行なっていない）。また講師のうち白井明大さんからは、1期の受講生全員へ向けて12の詩が贈られた。詩の宛先は白井さんによりランダムに振り分けられている（その理由については、103ページのコラムを参照）。その詩も併せて掲載する。



田中ちえこ

新宿眼科画廊ディレクター

ギャラリートーク講師



多田かおり

東京都写真美術館学芸員



成果発表展
「ことばの再発明×
18展」

「言葉」というシンプルかつ難解なキーワードを掘り下げようと、7月から9月までの2ヶ月間、オンライン上で開かれた連続講座「ことばの再発明」。その成果発表展として受講者の作品展が、9月25日～28日の4日間、鳥取市の駅前サンロードにある「ギャラリーそら」で開かれた。コロナ禍ではあったが無事に開催を迎え、1期と2期合わせて18人の受講者たちがそれぞれ頭を悩ませながら作品を展示。映像、アニメーション、絵、ポートフォリオ、文章……。まさに多種多様なクリエイターたちによる興味深い作品展となった。4日間で約200人が来場し、本展を鑑賞した。

各自に与えられたスペースは横幅約2メートルほど。受講者たちはライター、絵描き、映像クリエイター、編集者など多業種にわたり、それぞれ得意としていたり、講座を終えてカタチにしたいと考えた作品を準備した。ここで何人かご紹介してみたいと思う。

1期「アートとことば」の受講生で構成された1階の展示は、自分自身の内側を深く掘り下げ、「言葉」で伝えていくという講座テーマへの返答を感じられるような作品が多く見られた。

まちづくり団体の事務局で働く磯崎つばさんは、自身が短歌を作っていく過程でどう言葉が削られたり、紡がれていくかを見てもらおうと、いくつもペンを入れた推敲中の原稿用紙を展示。どういう思考で言葉を作るのか、その作業はどこで終わりを迎えるのか。言葉を決めるのはその人自身であるからこそ、磯崎さんの作品の裏側の作業を見ることができたのが良かった。

自分の内面を表に出すという点では、助産師として働く傍らで、執筆業・書き書きをするナカヤマサオリさんも同じで、出産予定を10月初旬に控え、もうすぐ母になる過程で揺れ動く心を文章に表した。そもそも文章は印刷物に閉じ込めることが多く、展示形式での発表自体が珍しいことかもしれない。決して短くはない文章なのだが、ナカヤマさんの人生や母になる覚悟がそうさせたのだと思うが、何分も立ち止まって食い入るように見る来場者も少なくなかった。

「言葉」というキーワードのもと、自分の中にある言葉と外に向けて伝えるための言葉を学んだ受講者たち。「言葉」でどう表現するかが鍵かと思いや、あえて言葉を用いないことで作風を強調する人も。特に映像や絵を表現手段とする作家は、自己紹介的な文章以外は、なかなか言葉にしづらい部分もあると推測する。

アニメーション作家のyamasakiさんは、3つの画面に、奇妙なフルコースが登場する皿とそれを口に運ぶ手が映し出された映像を制作。普通の料理には使わない色彩を使っていると言う。また、食べる所作に音が乗っているのだが、その音がどうも料理の絵と合わない。(例えば、ナイフで切る時の音が、まな板で包丁を使って切る音になっていた気がしたのだが……)。あえて色と音のズレを生じさせることで、「普通の食事」という既成概念が崩れ、食べること自体を考えさせられる作品だった。



2期「デザインとコミュニケーション」の受講生で構成された2階の展示は、鑑賞者参加型の展示が多く、まさに「デザインとコミュニケーション」というテーマに沿ったアウトプットが多かったように思う。

林業家でデザイナーの奥井彩音さんは、普段林業の仕事で入る森林の写真を展示。彼女自身はそこを「山」と呼ぶが、写真を見た人はその風景をどう感じ、どう呼ぶかをノートに書いてもらっていた。個人の価値観の枠だけでなく、より広い意味での「山」という概念、あるいは写真に映し出された風景そのものを捉えるための「言葉」が集められていたように思う。

個人出版社を立ち上げる予定の村瀬謙介さんも、何種類かの装丁デザインをした本のカバーを置き、好きなタイトルを書いてもらうことで来場者に「言葉」について考えてもらうアイデアをカタチにしていた。編集者らしい、さすがのアイデアだった。

『自己肯定感』と題した、自分を掘り下げるZINEを出しているにやろめけりーさんは、どうやって「この私」が言葉を作っているかを知ってもらおうと、自分の部屋にあるCDや本、雑誌などを卓上にずらりと展示。鑑賞者はまるでその部屋にいるかのような感覚を味わえ、またそこから、よりいっそう作品にも興味がわく展示となっていた。

ここに挙げさせてもらっただけでも、本当に多様性のある展示だったことは疑いようがなく、見ていて飽きない内容になっていた。「言葉」というテーマに、それぞれが真摯に向き合った過程と結果を示すことで、言葉とは何か、向き合うことはどういうことかを来場者にも考えてもらえるような展示だった。非常に内容の濃い講座に食らいつき、最終的にこのような展示としてカタチにした受講者の皆さんに敬意を表したいと思う。

講座と成果発表展を通し、個人的にも改めて言葉について考えるきっかけを頂けたことに感謝したい。言葉とは何か。それは個人個人が考える世界を自分で整理し、人に伝えるために使う手段。そして、言葉それ自体もまた一つの表現となりうるもので、その位置づけは時代や年齢や状況によって如何様にも変化する。よって、言葉とは終わりなき旅のようなものなのかな……。いずれにせよ、簡単に答えが出せるものではないし、正解もないのだろう。思考の迷路に入り込みそうになりながら、会場を後にした。きっと私も受講生たちも、このようにしてずっと「言葉」と向き合い続けていくのだろう。

(文・藤田和俊／写真・平木絢子)

受講生と作品

井澤大介 (深夜の美術展 in 鳥取 主催／企画者／雑談をデザインするひと)

伯耆町出身。大学時代の鳥取のアートギャラリーとの出会いを機に、「自分の知らない価値観と出会える場所」として、ギャラリー等での出会いをSNSに記録し始める。2018年より、カフェで夜の時間帯にアート鑑賞を楽しめるイベント、『深夜の美術展 in 鳥取』を鳥取の仲間と運営している。



アートイベント運営などを行う企画者の井澤大介さんは、自身の活動を通じて関心を持ってきた“人”にフォーカスする展示を用意した。ギャラリーを巡って収集してきたポストカードのアーカイブ、仲間達と共に運営する「深夜の美術展 in 鳥取」の様子、鳥取大学美術部在籍時より心理学やコミュニケーションに関心を持って制作した作品などをまとめて展示した。

過去に同ギャラリーで何度も展示をしてきたという井澤さん自身も「講座を通じて自身でも今まで最も満足のいく展示ができた」と笑顔を覗かせた。(レポートより)



ギャラリーを多くめぐり、「深夜の美術展 in 鳥取」という企画などを通してコミュニケーションの場をつくっている井澤。人ととの出会いによってインスピレーションを受け、まさにコミュニケーションをテーマとした展示をつくりあげた。キャプションと言うには詩的な、しかしそのことばによって作品の解釈が揺さぶられるような一言が印象的に散りばめられているところに注目したい。

雑談できる場をつくり、人と人の間に立つ通訳者。2019年より『深夜の美術展 in 鳥取』を鳥取市のカフェで不定期的に開催している。もともと創作活動をしていた井澤だが、いまでは「100枚の絵を描くより、100人の人、考え方と会いたい」という。ところで、井澤は何座なのだろうか？ コミュニケーションを司る水星を守護聖とする水星を守護聖とする、ふたご座か、はたまたどんな人にもフェアに接するてんびん座か？



鏡やタブレット表面への、端正な手書きのドローイング。バラバラのパズルの、放り出された美しさ。添えられた、短い言葉の数々。井澤のプレゼンテーションは、ささやかで、カラフルで、機知に富んでいる。美術作品というより、美術や文化の領域への敬意や喜びが現れているようだ。彼の企画する「深夜の美術展 in 鳥取」も、詳細こそよくわからないが、概要を見るだけでワクワクする。展覧会広報や記録といった営為の素晴らしさを再確認できる。





Comments 講師からのコメント



貸しギャラリーという特殊な文化圏を、コミュニケーションのための場として定義し直す活動。それは、誰かにとってのなにか「入り口」をひらくような、コンプレックスや生きづらさに対して居場所をつくる活動であるように思う。同じ人間が生み出した芸術作品に、同じ人間としてアクセス可能な状況をつくることで救われる人がいる。作品について言葉を交わし、反応を交換することで、「自己紹介」以上に、無意識の自分の思考に出会えるような体験があったりする。参加者の内なる言葉を誘発してくれる「作品鑑賞の場作り」今後も楽しみである。

アートイベント運営などを行う企画者による、活動のアーカイブを主体とした作品。収集していたポストカードや過去の展覧会の様子がまとまっていたりするが、作品の向こう側に様々な人の存在を感じられた。そもそもは「コミュニケーションの場数の少なさにコンプレックスを抱えていた」事からスタートしているそうなので、今回の展示が今までの活動の集大成だと感じた。



人と関わるきっかけを探し続けるリサーチャー。アートという見解がひとつではないものを媒介に人とつながることで、お互いの思想の深い領域まで知り合うことができることに面白みを感じている。具象性はものの定義を決定づけるので、もう少し定義の境界線が甘い、抽象性が高い表現を意図的に好む。ポエティック・キャプションは良い例。



受講生と作品

Participants and Works

ISOIYO (作品制作)

鳥取県出身（倉吉市生まれ）神戸市外国語大学第二部英米学科卒業。鳥取市内ザウルス版画工房にて銅版画・シルクスクリーンの制作を学ぶ。並行しデジタルでの制作を続け、挿絵等を受注。

1期受講

本講座での経験を踏まえ、あらためて言語と作品の関係性を問い合わせし、その思考を展示空間上にビジュアライズする試み。中央にはシルクスクリーンの平面作品《Listen》。その右側に過去作品の記録写真などを置いた「見る」エリア、左側に書き下ろしの英語テキストなどを置いた「読む」エリアを設け、言語による表現と言語以外の表現を対比的に示している。（佐々木）



言葉、写真、グラフィック・デザイン。状況が整理されていて観客側が把握しやすい表現だと思います。でも、最も強い印象を残すのは「赤」と「黒」のグラフィック。印象がとても強く、忘れない印象だと思いました。



ISOIYOさんの中にあることばの正確さとつよさに、正直驚きました。夏にお話したとき、作品を語ることば、もっといって、ときには刃にもなってしまうことばによって他者を傷つけぬよう、慎重に悩みながら向き合っていたISOIYOさんを思い出します。いま、ISOIYOさんが獲得しつつあることばとの距離や折り合いは、作品と対等な関係でそこに自然に在ることが伝わりました。「ことばの再発明」をしたISOIYOさんの夏から秋にかけての思考と熱量の一端を、アーカイブを通してでも受け取ることのできるものでした。



ISOIYOさんの描かれるイラストは、懐かしい雰囲気なんだけど、とくに何かに似ているわけではないところが魅力です。そして、今回の作品では、これまでISOIYOさんの中でぼんやりとしていたものが自己表現としてアウトプットされたように感じました。講座での対話における「対面」に対して、「紙面」や「画面」ということを考えなおしたセンスもすばらしい。自分の強みを客観視しながら、これからも活動を続けてほしいと思います。





Comments 講師からのコメント

シルクスクリーンの作品の展示と、作品のキャプション（挨拶文）、「はる」「なつ」「あき」「ふゆ」と題されたZINEの展示。

〔作品を伝える為の言葉〕ではなく、〔しごと〕〔対面〕〔紙面〕〔画面〕など、それぞれのシーンでの言葉の紡ぎ方、表現の仕方について考えられていて、作品の方向性も固まっているように感じた。



ルーレット



ルーレットを回す前に、ごく時々、なんだか出てほしい目がてくれる予感がある。そしてその予感が見事に当たることも。

ただの偶然かもしれない直感の声が、いつもじゃないけど、聞こえることがあると知っていることは、人生において大事なことだろうか？ 気にしないでいいことだろうか？

どうでもいいことについて考えてみる。どうでもよくないと思ってみる。答えがないことを考えるとき、答えはなくていけ。ないほうがいい。

レトロでお洒落、輪郭線が印象的な人物像のシルクスクリーンと、英語で書かれたメッセージ。ISOIYOという作家名と相まって、国籍や性別などによる作品への判断を拒む態度にも見える。ISOIYOの作品に添えられた言葉は、日本語であれ英語であれ、作品の内容を説明しようとはしない。そのような押し付けがましさは一切ないので、毅然とそこにはあって、彼女がどのようなアーティストなのかを、端的に表すものである。



受講生と作品

Participants and Works

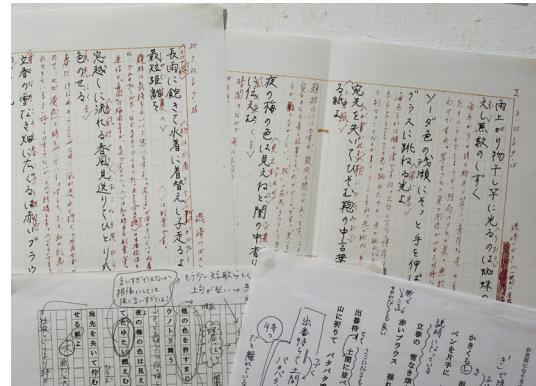
磯崎つばさ

(地域自主組織ふれあいの郷かあら山事務局長)

高校時代に中村哲さんに憧れ、イスラム史を専攻。百貨店バイヤー、編集者を経て、6年前に大山町に移住。趣味は短歌と観劇。まちづくりの一環で、最近はオーラルヒストリーの採集を行っている。ことばのかたちに関心があります。福岡市出身の一男一女の母。

1期受講

磯崎つばさんは、自身が短歌を作っていく過程でどう言葉が削られたり、紡がれていくかを見てもらおうと、いくつもペンを入れた推敲中の原稿用紙を展示。どういう思考で言葉を作るのか、その作業はどこで終わりを迎えるのか。言葉を決めるのはその人自身であるからこそ、磯崎さんの作品の裏側の作業を見ることができた。(レポートより)



短歌を作る過程を作品として展示。

紡ぎ出される言葉と削られる言葉、生まれてきたものを人に見せる状態にするまでの経緯。形になるまでにどういう思考のプロセスでそれが行われているかを視覚的に見る事ができ、非常に興味深く、新鮮だった。手書きの原稿と活字を意図的に混ぜているところもよく考えられているな、と思った。

道

どんな道を歩こうか。考えてみる前に一步を踏み出してみる。するとすでに、そこには一步ぶんの道ができている。自分の足で、進んだ結果、生まれた道が。もしも迷ったら、出した足を引っ込めたらいい。迷いながら、また一步踏み出してみてもいい。どっちでもいい。どっちにしても、道は消えてなくなる。どんな道を歩こうか。決める前に、もう自分の道はある。これまでも、これからも。



インスタレーションの中央に、未完成の短歌。取り囲む日記。フィールドワーク、短歌や詩作、オーラルヒストリー、領域を横断しながらも、ことばに対して一貫した姿勢と信念を持っておられた磯崎さんの夏から秋にかけての解が未完のことば、逡巡の履歴であったことは、なるほど、とちいさく唸ってしまいました。磯崎さんに今度お会いしたら1つ、伺ってみたいです。(他者あるいは自身からみて) 完成されていないことばでも、今この瞬間、この状態で出さざるを得ない、どうしても出したい、ということばも、あるものですか。(私は、あります。)

お問い合わせ等、お問い合わせしていただけます。お問い合わせ等、お問い合わせしていただけます。

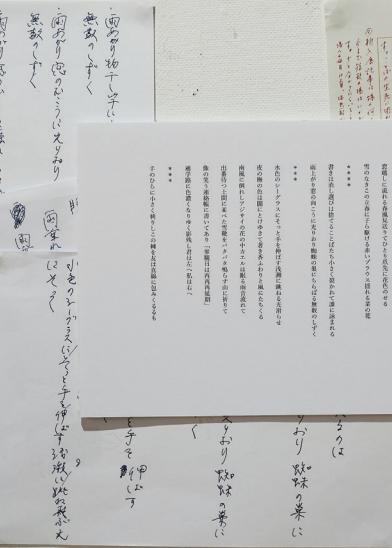
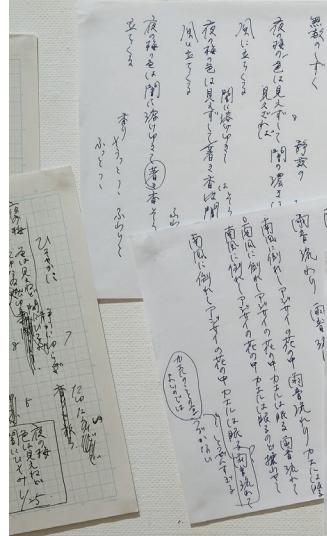
お問い合わせ等、お問い合わせしていただけます。お問い合わせ等、お問い合わせしていただけます。

お問い合わせ等、お問い合わせしていただけます。お問い合わせ等、お問い合わせしていただけます。

お問い合わせ等、お問い合わせしていただけます。

お問い合わせ等、お問い合わせしていただけます。

お問い合わせ等、お問い合わせしていただけます。



2020年8月
1日

2020年9月
1日

2020年9月
18日

2020年9月
20日

Comments 講師からのコメント

磯崎さんは普段からオーラルヒストリーを研究・実践されているので、この講座との相性がとてもよかったです。日記の形式で思考のプロセスを記述して、それ自体を作品にするというアイデアも賢明で、しっかりと考えながら歩みを進めていたのが伝わってきました。「記憶」としての「声」を形にして残すというライフワークが、ご自身の活動に対しても例外なくできた結果ではないかと思います。



プログラムのテーマである「ことばの再発明」に呼応する忠実さを感じる展示。ドキュメンタリーのように日々を追うテキストデータのプリントアウトと、原稿用紙に手書きの「短歌」（添削付き）という古風さの混在が面白いです。中身がしっかりあり、読み応えがあり、芸術とも文学とも、詩とも、出版とも言えそうですが、それらの可能性をはらみつつ、堂々と「作品」と呼べる内容だと感じました。



普段、編集者として仕事をしている磯崎。今回は、彼女自身が編集される体験を視覚化する試みだった。添削された和歌の書かれた手書きの原稿と、タイプされた日記のような文章の載ったパネルの組み合わせの展示である。手書きの言葉に強く引き寄せられる一方、逡巡する日記を読むことは正直疲れる作業である。しかしそれこそが、磯崎の意図したこと、つまり「頭中のごちゃごちゃ」を露わにすることである。

受講生と作品

Participants and Works

exkeee (painter)

1989年生まれ、兵庫県淡路市出身。昔から絵を描くことは好きで、自分の想像の中で描くスタイルは変わっていない。自由に描く事が楽しいからやっているという感じ。暗い重い作品が多く、その時の感情のまま描いていく。特にコンセプトもなく。目の前の絵を引き上げ、いろんな感情と出会う事が自分の再確認になっている。



exkeeeさんは、《Lisa》と題した「自分の角度から見たモナリザ」を180センチ四方の板に迫力の色彩で描いた大型の作品を展示。自身の作品のコンセプトをなかなか考えられず講座に参加したというexkeeeさんは、プレゼンの場で「多様な角度から物を捉えることや色の混じり合う瞬間を大切にする」「計画性や正確さに抵抗するために、その時に出会う線や形、色を自由に描いていく」と講座を通じて考えた自身の活動コンセプトを発表した。(レポートより)

exkeeeさんは、文脈ではなく身体で表現する、つまりストリートアーティストの感性で押し切る作品をつくられている印象でした。当初もったいないと思ったのは、その方法論だとどうしても無意識に何かに似てしまうというところだったのですが、今回展示された作品では、その呪縛が解けたように感じました。すこし大人になったと言いますか。この先もいろんなものをディグしまくって、さまざまなインスピレーションを身体化し、独自の世界観を表現していってください。

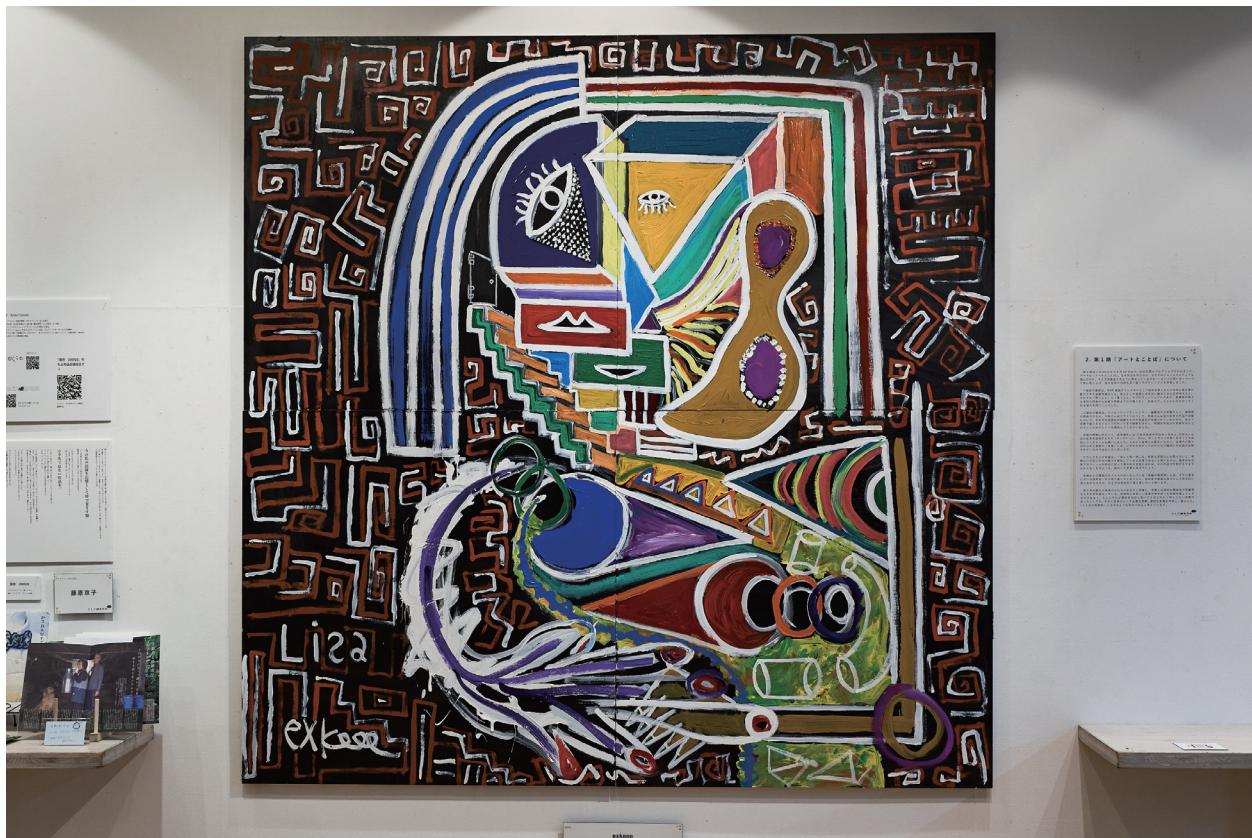


作品に添えられたインタビュー形式のキャプション。exkeeeさん自身がexkeeeさんに尋ねているものと勝手に理解しました。Q&Aにすることで、少し無骨でやわらかい余白のあることばがexkeeeさんの作家性や作品性を知る上で、とても最適な役割を果たしていると感じます。言い切り調だったり体言止めだったり、最後はチャーミングに敬語だったり。自分のことばに耳を傾けるという姿勢がシンプルに表れていて、作品のもつ世界観と重なり展示全体をより強いものにしていました。ぜひ、世の中にかましてください。



180cm角の板に絵具で「自分の角度から見たモナリザ」を描いた作品。筆の運びや絵具の乗り方が大胆でかなり迫力を感じた。「自身の作品のコンセプトをなかなか考えられずに講座に参加した」そうだが、講座を通じて作品の取り組み方が見えてきたようだったので、今後も勢い良く画面にぶつかって行ってほしい。





Comments 講師からのコメント



作家としてストリートアート、あるいはHIP HOP的な「成り上がり方法」について対話をした記憶があります。表現は、絵画、グラフィティであり、展示スペースにおいては完全勝利を果たしている（目立つ、抜きん出る）と言えると思いますが、では、それを展示以外のどこに持ち出すか、が今後の問題だとは思います。絵自体は、以前見せていただいた作品群よりも、一段階良い、と素直に感じました。

作家自身の的確なステートメントによれば、多様な角度から物を捉えることや色が混じり合う瞬間を大事にしており、計画性や正確さに抵抗することがコンセプトであるそうだ。exkeeeeの作品はまさに、色同士が喧嘩してしまうほどカラフルで、人一人分の身長よりもやや大きいくらいの迫力サイズの画面が、線や面や筆跡で満たされている。exkeeeeという作家名すらも、勢いや相反する力のダイナミズムを感じる。



友だち



友だちが少ない。グーチョキパーのパーの指の数より少ない。グーじゃない。チョキぐらいかもしれない。友だちは数じゃない、というけど、そうだろうか。うん、きっとそう。数じゃない。チョキがパーに勝つことだってあるように。でもそのたとえだと、パーがグーに勝ってしまうなあ。友だちとジャンケンは関係ないかな。うん。

関係ないことを比べて、落ち込むのはよそう。くよくよく考えてしまうときの自分を、まずはわかってあげたい。あたたかい飲み物とおいしいお菓子で、もてなしてあげたい。

奥井彩音 (林業／山のデザイン)

東京都板橋区出身。大学の環境学部で日本庭園について学び、「木」と「環境」についての興味から林業をはじめる。智頭町の林業事業体で、間伐・植栽等環境負荷の低い山の整備を模索する傍ら、個人事業でパンフレットやロゴのデザインなどもする。

2期受講

奥井彩音さんは、普段林業の仕事で入る森林の写真を展示。彼女自身はそこを「山」と呼ぶが、写真を見た人はその風景をどう感じ、どう呼ぶかをノートに書いてもらっていた。個人の価値観の枠だけでなく、より広い意味での「山」という概念、あるいは写真に映し出された風景そのものを捉えるための「言葉」が集められていたように思う。(レポートより)



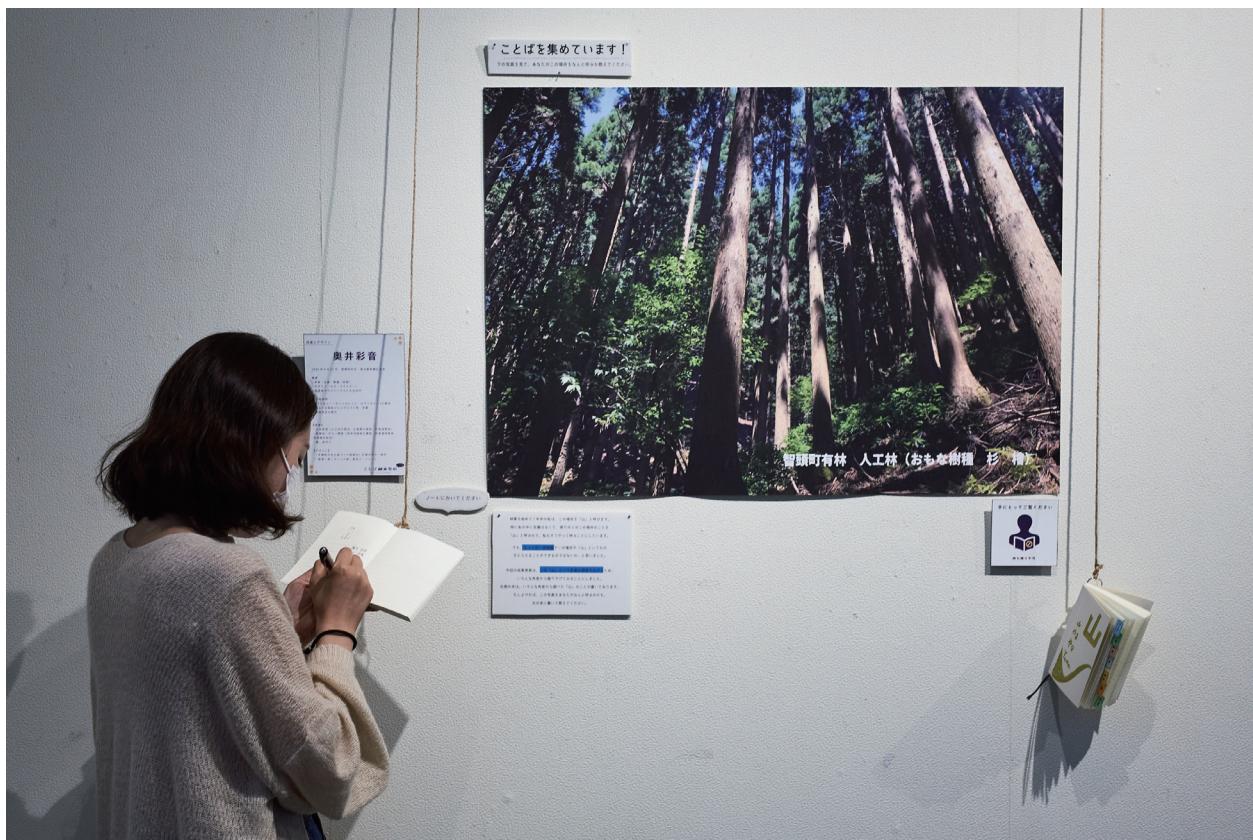
山というものがなんだったかを考えさせるとともに、name（名付けること、名前を呼ぶこと）という行為について考えさせる作品である。1冊目の本は、作家自身が「山」にまつわる言葉を集めたもの、もう1冊は鑑賞者に対して、目の前の写真（作者が山だと思っているもの）について言語化してもらうというもの。2冊目の本について、鑑賞者に対して、目の前の写真についての言語化を引き出す工夫、前提や問い合わせの設定は工夫が必要な面もあると思うが、ある種、彫刻的に、対象物についての言語を収集することで対象物の枠組みを捉えなおすリサーチとして面白い。

山で働く表現者。山は山であって山ではない。山に関しての定義が増えるのではないかという山っ気から、言語的に山を要素分解してみたり、他者の視点で山を再定義してみることを実験している。そこに当たり前にあるものを、過去に誰かが定義した情報とは違う言葉で再解釈してみようとする試みは哲学的でもあり、イノベーティブでもある。ちなみにジャマイカのパトワ語で「元気ですか」は「ヤーマン」。



作者が普段仕事で出入りしている森林の写真を展示し、鑑賞者がどう呼ぶのかをノートに書いて貰うという参加型の作品。普段そこに立ち入っている者の感覚と、そこあまり意識のない者では同じ視覚情報を基にしながら異なる意識を持つという事（又は同じ場合もあるかも知れない）を集計により表現するという行為が今回の講座のテーマに合致していて興味深かった。





Comments 講師からのコメント

展示空間に提示されたのは、謎めいた森の写真とノート。森の写真といっても、エモーショナルでもフォトジェニックでもなければ、特定の用途もなさそうな、不思議な写真である。写真を見た鑑賞者は「これを何と呼ぶか?」という問い合わせに対する自分なりの答えを、添えてあるノートに書いていく。溶接から薪づくりまで、20代にして様々な物づくりのスキルを持つ奥井は、現在林業を生業としている。この展示は、そんな彼女の言葉の世界を、もっと知りたいと思うような呼び水になっている。



東京出身でデザインを専門にし、環境問題に興味を持ち林業に携わる奥井は、林業とデザインという二つのスキルを持つという特徴的なつくり手と言えるだろう。そんな奥井の作品は、山を対象にして、自身が多様な角度からその「山」ということばを突き詰めることと、逆に山の写真を見せて人がそれをなんと呼ぶかを聞いていくこと、というリサーチの成果に見える。ことばへのアプローチの多様さを体感させてくれるようでもある。



木と話す人。林業とは、どんな山をつくるのか、という表現。選木、切り口、倒す方向、すべての動作が、木のその後の目的によって変わる。彼女はいう。「林業家として新しく作り出すことは今はあまりないけれど、自分のためが誰かのためである。そういう人でありますと心にとめながら生きています。」こんな素敵な人がいるだろうか。



受講生と作品

Participants and Works

音泉寧々 (鳥取大学地域学部 4 年生 (受講時))

1998年香川県生まれ。もともとアニメやゲームに出てくるイケメンが好きだったので、大学3年生の専門ゼミという授業で「3DCGで自分好みのイケメンキャラを作る」ことをしました。その時、「イケメンとは何なのだろうか」と思ったのがきっかけで、卒業論文はイケメンについて研究しました。



3DCG モデリングソフト「Blender」を用いて、自分自身の理想の「イケメン」を制作するプロセスをスライドショー形式でまとめた映像ドキュメント。初心者から出発し、何とか人の顔と認識できる段階、毛髪、全身像の造形、衣服の着用、そして最終的には作成したモデルを踊らせる段階まで、徐々にモデリング技術が上達していく様子を、短いコメントや失敗例も交えながらユーモラスに提示する。(佐々木)



3DCG モデリングでイケメンを作るというプロジェクトに、1年以上取り組んでいる音泉。CG で作られたイケメンの「成長過程」を記録しているという言葉遣いに、思わず笑わせられる。しかしその記述は、決して自身の作り出したイケメンに耽溺するようなロマンチックなものではなく、むしろ徹底して客観的である。彼女自身が将来の二次創作を見越しているという言葉にある通り、他の人にも再現できるよう、知恵を共有することを目指すような記述スタイルである。

好き

好きなものについて、いったい何時間語れるだろう。語るとき、気持ちは静かだろうか、熱くなるだろうか。「好き」と「優れている」と「素晴らしい」の違いはなんだろう? 静かに熱く語ることって、できるかな?

好きだったものについて、思い出してみる。いったいどうして、あんなに好きだったのか。そしてそれはいつ、それほどでもなくなったのか。いまでもまだ熱く静かに好きなのか。



「Blender でイケメンを作る」という一見軽めな試みは、他に類なく明瞭。顔がイケメンにならず、どう見ても不気味な制作初期段階の展示も、とても面白いです。作者の想定以上の答えかもしれません、イケメンを求める結果、「イケメンでない方が芸術性が宿るのではないか?」という深読みや、テーマの逆転的解釈を行う余地が残されていて、この作品・展示が届く範囲はかなり広いと感じました。「イケメンではないけど、人間ができた!」など、素朴なキャプション(言葉)に詩情が宿り、神が人間を創るような、宮崎駿が強く批判した AI によるゾンビ動画の生成のような、そういう危うさも漂っています。髪の毛の失敗例なども、グリッジノイズのようで見ごたえがあります。真にメディア・アートと言えると思いました。





Comments 講師からのコメント



音泉さんは非常に明るい雰囲気の方で、臆面なくイケメン研究していると言われるところがすでにおもしろい。「イケメンがないなら自分でイケメンをつくってしまえ」と手にしたのがBlenderというモーデリングツールというのも興味深いです。プロセスを動画にするアイデアも選曲の意外性もよかったです。個人的にはもうすこしイケメンへの偏愛について掘り下げて聞きたかったです。

展示された動画と、なぜか手書きとハイブリッドな資料、楽しく拝見しました。「足が動かなかった原因は骨の名前が全角ではなかった」には大分ウケてしまいました。夏の対話で音泉さんとペアを組まれた磯崎さんが展示された日記を読んで「できなかったことができるまでの道のりが楽しい」という音泉さんのことばを思い出し、「成長過程」とそのことばの嘘のなさになんだかじんわりしました。音泉さんは、ことばと生活が高い純度で結びついている人のように思います。いま音泉さんが好きだと思えるもの、心地のよいものを手放さず。それはきっと、誰かを温かくするものにもなりえるのだと思います。



3DCGで作成したイケメンの動画作品。「イケメンとは何か?」という問い合わせ始まり制作をしているとの事だが、作り出されている人物はスタイルが良く、整った顔にも関わらず、奇妙な動きをしており、さらに「イケメンとは何なのか?」という問い合わせが生まれているように思った。制作のプロセスも見ることができて面白かった。



神山かなえ

(絵描き／デザイン／旅ライター／手相読み／イベントファシリテーター／食育インストラクター)

学習院大学文学部哲学科卒。画廊勤務後、パリ島の画家の家に住み込みで伝統絵画を習う。帰国後、仏画と出会い、仏画教室へ通う。光傳寺曼荼羅制作。ファシリテーションを学び、イベント企画主催。旅好きで旅専門のライターをする。その人に感じたインスピレーションで絵を描く。現在は、「つながる工房」として活動。

民族的伝統絵画や仏教画を学んで絵を描く神山さん。展示したのは《ことばの神さま》という一点の作品。言葉に宿る「神さま」を、直観して描くスタイルで表現したという。「神さま」の手の中にあるのは、「あ」の文字。みずめざくらの木を使った額の中に、明るい色調で描かれた「神さま」がたたずんでいる。(nashinoki)



神山さんの作品は、「ことば」をテーマにしながら、イメージと色彩で語っているのが興味深かったです。共感覚にパリ島での経験や仏画をつくってきたスキルが入り混じって、独自の空想的な世界観を表現されているように感じます。ちなみに「あ」は、「ことば」やイメージなど、すべてのはじまりを意味していると解釈しました。これからも「ことば」をイメージに、またイメージを「ことば」に翻訳していってもらいたいです。



神山さんは、ことばにしづらい感覚や情景を視覚化しようと絵を描いてきた方だと思うのですが、そうした方が「ことばの再発明」に挑まれたことがとても貴重で勇敢で、そうした神山さんの態度に感じるのびやかさは、作品から受け取られるものと同じ輝きを持っています。今回、成果発表として提示された作品は「ことばの神さま」。神山さんは当初「文章以上に話すことが苦手」とされていましたが、口語によるのびやかで曖昧なことばの応酬は、神山さんには案外合っているのでは、と思ったりもしました。いろんな言葉の神さまを神山さんの視点で見つけていかれて下さい。



「ことば」をモチーフにしながら、想像の「神さま」を描いた作品。展示作品は小作品が1点のみではあったが、作家の世界観がとてもはっきりと出ていた。最早言葉での説明は不要で、作品の裏側にある作家の思想がそこからじみ出ているような印象を受けた。他の作品も見てみたいと思った。



Comments 講師からのコメント

第一印象はサイズも雰囲気もかわいらしい絵だ。ただよく見ると調和する1つの色のトーンだけではなく、補色も使われている。共感覚を持つ神山の言葉のイメージは、そういう雑多なものなのだと思う。「ことばの再発明」という講座であるにも関わらず、言葉を視覚的に表現した。



散歩

素朴ですが、これはこれで、なんか良いです！
(言葉の無力を知るパターン)



池のほとりを散歩していると、水面に浮かぶ波紋に目が釘付けになることがある。水面に映る空に、池の向こうで遊ぶ子らに、さらに向こうの情景に見とれて立ち止まることがある。しばらくそうしていて、また歩きはじめる。そういえば、この（立ち止まっている時間の長さ）って、どれくらいだろう？ いつも大体同じだろうか。気分次第でまちまちだろうか。よりみちの時間は長ければ長いほど、なんだか豊かになれる気がする。しあわせより大事な用件なんて、なんにもないんだから、半日くらいばーっとしてもいいかもしれない。



受講生と作品

Participants and Works

品岡トトリ (鳥取絵師／イラストレーター)

1998年生まれ、鳥取県出身。小学生の時に知った地元の言い伝えをきっかけに鳥取に興味を持ち、徐々に鳥取を好きになった。無類の鳥取好き。鳥取のいろんな魅力を伝えるためにイラストを描き、『#とりとっと』でTwitterに投稿している。同人イベント『鳥取アートフリマ』の共同主催兼デザイン担当を務める。



鳥取砂丘や大山、ウサギや梨、しゃんしゃん傘や鬼伝説など、品岡がこよなく愛する「鳥取」に関するモチーフを散りばめた擬人像のイラスト《狂信的鳥取愛》を出品。同作をきっかけとして、品岡は図像学に関心を持ち、漫画やゆるキャラなど各地の擬人化キャラクターのリサーチを開始。その知見を踏まえて、鳥取の多面的な特徴や魅力を擬人化するイラストシリーズの制作に取り組むようになった。(佐々木)

鳥取県が大好きなローカル愛溢れる絵師。主に地元の特産物を縦にレイアウトし、トーテムポール化したものを「鳥取ファンアート」とネーミングし作品を描いている。モチーフのベタさが、親切すぎるほどのわかりやすさを醸しだす。絵師名を決めるときのバリエーションくらい「鳥取に関するイメージ」にもバリエーションを持たせられるかが今後の課題。



大きなイラストレーション、これは新作でしょうか？ 新作であれば「頑張った！」と言えますし、資料にあるように間に合わなかったのであれば、評価は難しいです。しかしながら、ラフ・スケッチにマンガ的な、アニメーション的なアイデアがいっぱい詰まっていて、読み物として面白いです。独立した作品としては、評価することが難しい作品ながら、展示から「能力」をうかがい知ることができます。プレゼンテーションと考えれば、とても良い内容だと思いました。

品岡さんとは対話の際、ことばで説明しづらい感情を主題にした作品をポートフォリオに入れ込むべきか、といったような話になり、いくつかの作品を見せていただきました。今回提示されたポートフォリオにも含まれている「殻と薄皮」はその1つで、ペアだった水田さんと共にとても引き込まれた作品でした。アニメーション作品も拝見しましたが、孤独やもやもやした感情、その瞬間の情景と向き合う作品は、鳥取を扱った大作と同じくらい、品岡さんの作家性がつよく表れている良作だと思います。品岡さんはことばに対しても特別な思慮深さ、他者への眼差しをもって関わる人だと思います。品岡さんの孤独を孤立させないために、きっと作品はあり続けますし、つくることが癒やす傷があると思っています。

地域の特産物や名所、伝統芸能、県民性の擬人化などを1枚の絵におさめる、という印象的なイラストを手掛ける品岡トトリ。今回展示した作品にはことばはない。「感情が言語化されるからことばが怖い」と言う品岡だが、この取り組みには情報を編集して届けるという、きわめて言語的な操作がなされている。それが説明的にならずに魅力として届くところに、品岡の制作の特徴があると言えるだろう。

作家の《言葉の裏側》という短編アニメーションをみた時、言葉というものの恐怖心を感じた。言葉にすることで抑圧してしまう感情、言葉にできなかつた時に手から滑り落ちてしまう本心。言語化することの暴力的な侧面への抵抗心。そんな感覚が作家にあるのだろうか。一方で、鳥取への個別無数の愛の数々を曼荼羅のような画面にひとつずつ、丁寧に並べた代表作のイラストレーションは、そこにあるものについての愛を、ある意味、言葉よりも具体的に正直に誠実に語りかけてきてくれる。



額装作品1点と、フライヤー、作品ファイルの展示。

体調不良で満足いく展示ができなかった、との事だが、作品自体は色彩豊かで構成力もあり、とても魅力的だと感じた。各作品それぞれ明確なテーマがあり、作家が作品に向き合う真っすぐな姿勢を感じられた。





Comments 講師からのコメント



鳥取にこだわりあり。あらゆる作風を身につけた万能イラストレーター。鳥取のあれやこれやをキャラ化し、イラストで表現することに情熱を捧げている。鳥取という県は正直なところ、全国のなかではマイナー県である、などと思っているのは、東京人のおごりかも知れない、と思わせられる。これからの時代、クリエイティブの可能性は地方にしかない。

ジンクス

鳥が目の前を横切ることがある。島にはヒヨドリくらいの大きさの、青い鳥がいて、その鳥が横切るときは、ちょっと嬉しい。まるで幸運が訪れてくれたような気分になる。南の島の青い鳥。

そんなことってないだろうか？
自分だけの、ささやかなジンクスのようなもの。春先に咲く野花の開花に、今年はいつ気がつけたか、とか。ベランダから二重にかかる虹を見た、とか。小さなことに目を向けてみると、なにもないようで、なにかある。そのよろこび。



地元の神話を題材にした商業でも通用するほどハイレベルなイラストの数々。鳥取アートフリマを主催するフットワークの軽さ。品岡は、高い画力と行動力、それらの才能を鳥取に注ぎ込んでいる。一方で、個人の内面的な世界を表現した静かなショートアニメーションも制作。イラスト、アニメーション、いずれもまずは画力に目がいくが、実のところ目に見えない靈的なものや心の動きを語る物語の構成能力が、作品を支えている。



品岡さんが作られてるファンアートは「トーテム」なのだと感じます。「トーテム」をざっくり定義すると、「集団が信仰する象徴を並べたもの」といった感じでしょうか。ただ観光名物や名所を列挙するだけではなく、同一のフォーマットに押し込めてることで、新たなイメージが浮かび上がってくることに、作品の意義を感じさせられました。この手法で、鳥取以外の地域にも展開していくば、きっと喜んでくれる方がたくさんいると思います。



受講生と作品

Participants and Works

Seizan (医師／対話ファシリテーター)

1976年佐賀県生まれ。在日コリアン。20年以上住んだ東京を離れ、2020年鳥取に移住。医療者でありながら、映像や即興劇などの可能性に注目し、これまで様々なコミュニティプロジェクトを実践してきた。〈対話〉を通じて、人々の生きる意味を探求することがライフテーマ。



医師としての仕事と並行して表現活動を行うSeizanさん。成果発表展では、映像詩による作品『ワタシの詩』を展示した。生きることの意味、虚無主義への抵抗といった哲学的なテーマを巡って発される言葉が、古い家屋やその庭にある草むらのような、作者の生活の身近にあると思われる景色や、静かな音楽とともに流れしていく。(nashinoki)



日常の業務からも言葉の力の強さを感じているというSeizan。しかしその映像作品の中では日常から離れ、世界や歴史を俯瞰して、世界に対して言葉をつきつける。作中、社会の抑圧に抗ってきた過去の人々に想いを馳せていた。Seizanの作品の言葉を通して、彼獨りではなく過去のそうした人々が、内面化されたようだった。一方映像は、静謐で美しい。だからこそ、言葉の強さが際立っている。

音楽

音楽を聴いていて、ああ、じぶんの心って、こんなにもこわばっていたんだと気づくことがある。たいていは夜だけれど、休日の昼間にそう感じるときもある。音楽は、ただ聴きたくて聴くものなのに、いつのまにか役に立ったり、助けてくれたりする。じゃあ、役にも立たず、助けてもくれないけれど、ふだんしたいことや、そばに置いておきたいものってあるだろうか。たぶんある。なんでもそうだと思うけど、音楽を聴きたい気持ちが、最初。気づいたら助けてくれているとしても、そんなことのために聴くわけじゃない。なんでもそう。心が最初。心が求めるものが最初。



哲学的な問いかけによる、個人的な映像作品。落ち着き整理され作品然としていて、まとまりがよく、戦争、暴力、自由など扱うテーマが自覺的に大きいです。それがデカルトに達するのは、展開として割と普通なので、そこで何らかの「跳躍」「飛躍」が欲しいと思いました。大きな話と小さな風景の対比は、美しいと感じました。





Comments 講師からのコメント

「ワタシという個人が〈虚無〉と戦ってきた過程」を表現した映像作品。「ワタシとは何か。」「名前とは何か。」「人間の存在とは。」自己及び人間の存在の意味を自分自身に問いかけ、対話を繰り返している。独特的な色彩とカメラワーク、そして日本語と英文でのテキストの表示。盛り込まれている要素が多く、とても見応えがあった。



Seizanさんは医師でありながら人文的・文芸的な活動をされていますが、医療に軸足がある上で領域を横断されているので、何をするにも非常に説得力があります。今回の作品では、存在論的な命題を詩によって明らかにされようとしている感じました。作品の根底にあるのは、何ごとも素直に受け取ることができるSeizanさんの態度ではないかと思います。今回の講義の意図を、誰よりも理性的に感じられて、形にされたんじゃないでしょうか。



作品、非常に良かったです。夏の対話のなかで、自分について作品をつくること、客観と主観、ということについてお話をじことを思い出しました。Seizanさんは、ご自身のこれまでの経験や体験から、“上手く”みせたり、洗練された印象を受け手に与えることも、スキルとして持っておられると思います。しかし今回の作品からは、それらを敢えて排除し塞ぎ込み、自身の内のことばを徹底的に聞こうとしたSeizanさんの決意を感じられました。自分のことばを聞き取る力こそ、作家の領分であることを改めて気づかせていただきました。



田中京子 (Reading ACT 代表)

音声ガイド制作者（ディスクライバー：audio describer）。視覚的な表現に頼るコンテンツ（映像・美術・ダンス・演劇など）を言葉で伝える、「音声ガイド」の原稿執筆やライブナレーションを行なう。鑑賞のユニバーサルデザインをめざし、コンテンポラリーダンスなどの解説にも取り組んでいる。広島県出身。



本来は目でしか受け取れないイメージを音声で伝える、舞台芸術やイベントの音声ガイドの制作をしている田中京子さん。視覚障がい者などの鑑賞を補助する音声ガイドという職業自体の認知向上と、自身が感じている音声ガイドそのものの作品性をどのように展示するのか、大変悩んだという。最終的には、音声ガイドをつけた映像をディスプレイとヘッドホンで鑑賞できるようにし、手書きで校正した台本などの資料と併せて展示をした。（レポートより）

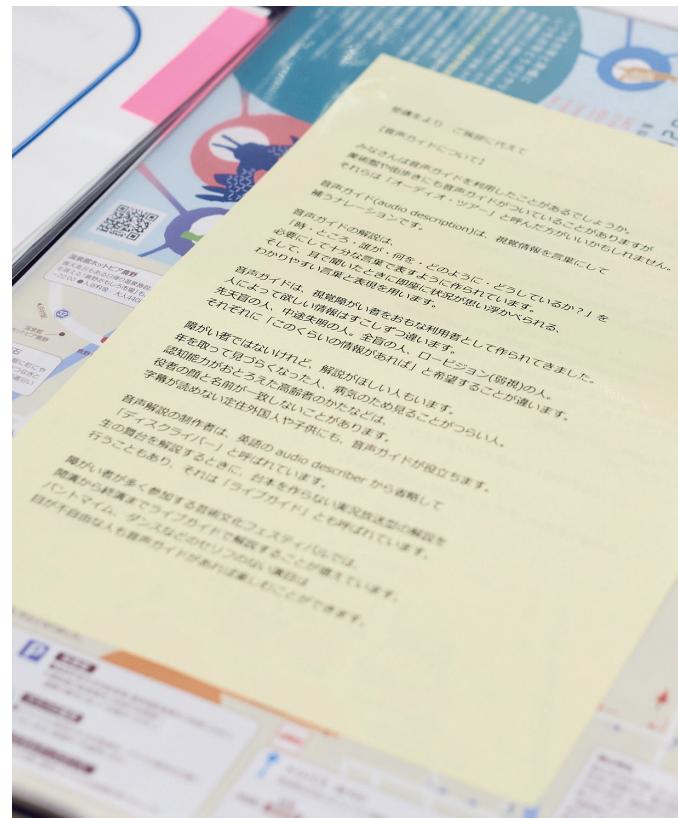
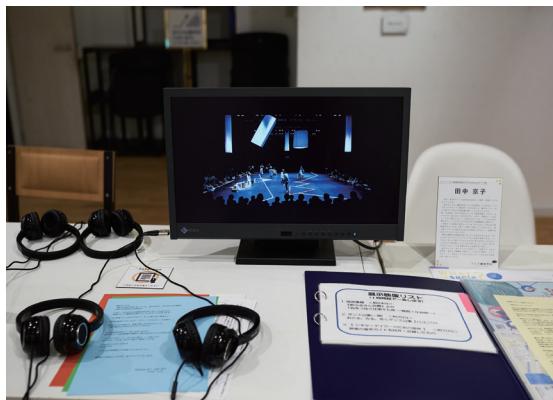


田中さんが仕事でされている「音声ガイド（audio description）」を、そのまま展示して体験してもらうというアイデアが、すごくいいと思いました。田中さんの活動は、その内容や重要性を「ことば」で説明するよりも、体験してもらった方が手っ取り早いからです。むしろ、その体験を通じていろんな「ことば」が生まれてくるものだと感じます。これからも音声ガイドの重要性を広めていってください。

「音声ガイド」というやや特殊な、珍しい職業、職能に軸足をしっかり置いた展示。素直に、「知らないこと」への興味をかき立てられます。展示写真を見る限り、アフレコ台本や機材を配置し、実際に録音する風景を展示したのでしょうか？ 素晴らしい展示だと思います。大きく「アート」「自己表現」「作品」と考えなくても、そのままの状態が見応えのある展示になることがあるという好例だと感じました。



ダンス公演の音声ガイドは、一見して、言語の翻訳に解釈が加わることと似ているようだが、そうではない。情景を音声ガイドに変えるというプロセスは、誰もが理解できる言葉、文法を使い、説明は正しいけれど、面白くない。田中はそのような状況で試行錯誤し、このシーンの面白さを伝えたい、という思い込み、思い入れを大事にしようと考えている。音声ガイドの可能性の幅が広まれば、ダンス公演の可能性も広がるだろう。



Comments 講師からのコメント

田中さんは今回参加されたメンバーの中で最も“ことばにならない”と言えない使命を持った方でした。言語化の限界を誰よりも知りながらも、ことばで伝え尽くす、そのことに労力やエネルギーを惜しまない姿勢に、心から敬意を表します。福祉番組を担当する放送人の端くれとして、解説放送に携わる人々の仕事にはいつも助けられてきましたが、「正しいけれど面白くない」という境界に揺れながら、あらゆるトライアルを重ね、作品のバトンを渡すためのことばと対峙し続ける田中さんの存在は“希望”です。習作で拝聴した田中さんの声、とても素敵でした。一瞬のことばが、だれかの人生を輝かせるのだと思います。



舞台芸術やイベントの音声ガイドという一般的にはあまり認知されていない領域を扱った作品。この作品を通して、そういった音声ガイドの存在を知る事ができたので、機会があれば利用してみたいと思った。映像や台本などの資料を用いて展示が構成されており、作品としても興味深く鑑賞する事ができた。鑑賞者を引き込む力のある作品だと感じた。



今日は
日曜日だから
仕事はしない
、て
言いながら
これを書いてる
のは
仕事じゃないの?
、て
聞かれたら
日曜日にしか
できない
仕事があるんだ
、て
うそぶいてみたら
けっこう
ほんと
ほんとうそ?



Comments 講師からのコメント

田中さんは今回参加されたメンバーの中で最も“ことばにならない”と言えない使命を持った方でした。言語化の限界を誰よりも知りながらも、ことばで伝え尽くす、そのことに労力やエネルギーを惜しまない姿勢に、心から敬意を表します。福祉番組を担当する放送人の端くれとして、解説放送に携わる人々の仕事にはいつも助けられてきましたが、「正しいけれど面白くない」という境界に揺れながら、あらゆるトライアルを重ね、作品のバトンを渡すためのことばと対峙し続ける田中さんの存在は“希望”です。習作で拝聴した田中さんの声、とても素敵でした。一瞬のことばが、だれかの人生を輝かせるのだと思います。



舞台芸術やイベントの音声ガイドという一般的にはあまり認知されていない領域を扱った作品。この作品を通して、そういった音声ガイドの存在を知る事ができたので、機会があれば利用してみたいと思った。映像や台本などの資料を用いて展示が構成されており、作品としても興味深く鑑賞する事ができた。鑑賞者を引き込む力のある作品だと感じた。



今日は
日曜日だから
仕事はしない
、て
言いながら
これを書いてる
のは
仕事じゃないの?
、て
聞かれたら
日曜日にしか
できない
仕事があるんだ
、て
うそぶいてみたら
けっこう
ほんと
ほんとうそ?

受講生と作品

Participants and Works

中村友紀 (演劇)

1998年生まれ、和歌山県和歌山市出身。鳥取大学地域学部地域学科国際地域文化コース4年生(受講時)。中学生の頃にアマチュア・未経験者対象の演劇ワークショップで演劇に出会い、大学へ進学後も様々な文化人に出会ったことで演劇の興味をさらに広げる。これまで、大学の講義室を使った演劇公演の企画などを行う。



演劇を学ぶ中村友紀さんは、講座を通じて新たに制作した詩「ことばとからだ」を展示。会期中に、作品の前で自身で詩を読むパフォーマンスを行なった。中村さんは「パフォーマンスをした時は相当緊張していた」としながら、「このくらいの規模の小さな演劇を続けていきたい」と今後の展望にも触れた。(レポートより)

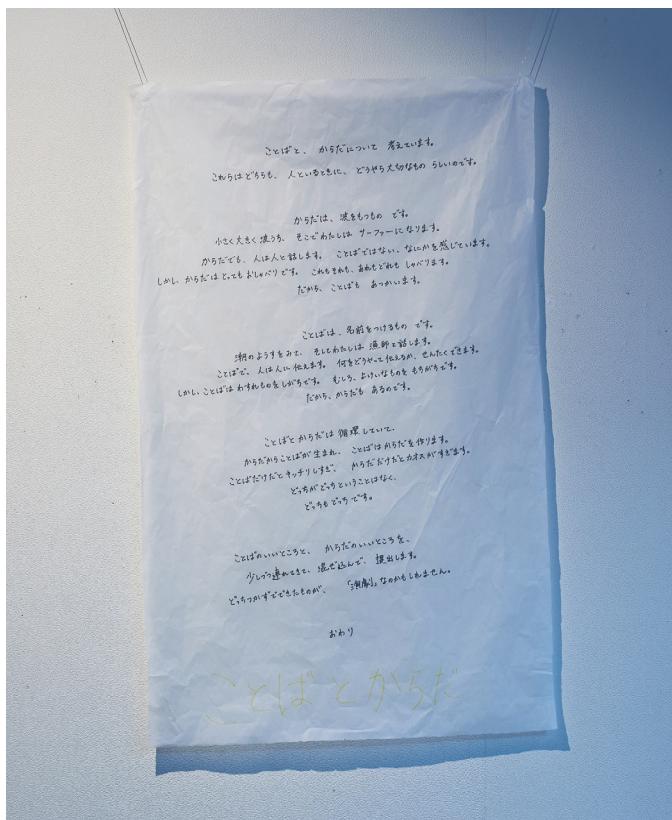
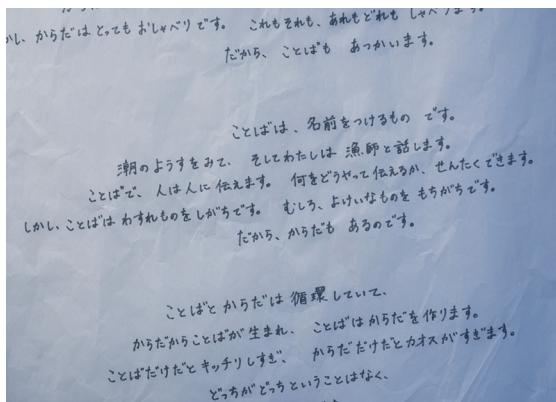


「演劇って何なんだろう」という問い合わせから始まり、「ことばとからだ」をテーマにした作品。紙に詩を書いた作品を展示し、会期中に詩を読むパフォーマンスを行った。詩の見せ方と、演劇の形について考えさせられたが、もっと様々なアプローチで表現する事が可能だと思うので、今後も試行錯誤をして自分らしい方法を見つけてほしい。

「ことばとからだ」にこだわる。言葉というのは出っ張りや引っ込みが生まれてしまうメディアだ。言い過ぎだったり、言葉足らずだったり。だから誤解が生まれることもあるけれど、逆に魅力的なものもある。からだも言葉を持っている。けど、その言葉は口がしゃべる言葉とは違う。もっと曖昧で、直接で、すっしりと響き、心に残り続ける、そんな2つの言葉をしゃべる人です。

演劇を専門とする中村の作品は、「ことばとからだ」という詩と、その朗読パフォーマンスを作品として提示する。人と人との間にあり、コミュニケーションの媒介者であるという両者の共通項と、その上で浮かび上がる相違点を検討しながら、その両者の関係性の中から演劇が生まれるのでは、と投げかける。ことばと何かとの関係性に焦点を当てながら自身の追求する要素について問いかけていくような、批評的な作品だ。





Comments 講師からのコメント

朗読という発表形式を通して「ことばだけでは漏れてしまうものを代弁してくれる身体」や「言葉によって作られる身体性」という、テクスト内に書かれたことを実際に演ってみせるというアプローチに演劇人らしさがある。役者としての作家が、おしゃべりすぎる身体を、言葉（文字だけではなく、思考や声を通した表現）の技術で抑制しようとする時、その言葉と身体のせめぎ合い自体がアウトプットされていること。そうそう、それが演劇のひとつの面白さだよなあ、と感じた。



言葉を話すパフォーマンスを行った中村は、演劇をバックグラウンドとしている。彼女にとっては演劇について考えて出てきた言葉だったが、結果、今回の成果発表全体を包み込むようなものになった。自身が「詩のような研ぎ澄まされたものを狙った」という通り、熟考された言葉で「体はとってもおしゃべり、だから言葉をあつかう」あるいは「反対に言葉はわすれがちだから、体を使う」などのフレーズにはっとさせられる。



舞台女優。朗読パフォーマンスで、言葉はんぶん、身体はんぶん、どっちもあって一人前というテーマで作品を制作。運動と記号を掛け合わせたものが人間のコミュニケーションであるということは、送受信する情報量の問題でもある。言葉という記号だけでは満足できない、信用できない情報はフィジカルで補うことは、至極真っ当なアプローチである。

ナカヤマサオリ

(助産師／執筆業)

東京生まれ。大学で心理学を学び、書店員を経てから看護師・助産師となる。鳥取生活8年目。助産師として働く傍ら、執筆業・聞き書きを行う。鳥取県中部で活動する記録集団「現時点プロジェクト」のテキスト班。雑誌「私の、ケツダン」、リトルプレスdm「鳥取という場所で助産師をすること」執筆。

出産を控え、もうすぐ母になる過程で揺れ動く心を文章に表した。そもそも文章は印刷物に閉じ込めることが多く、展示形式での発表自体が珍しいことかもしれない。決して短くはない文章なのだが、ナカヤマさんの人生や母になる覚悟がそうさせたのだと思うが、何分も立ち止まって食い入るように見る来場者も少なくなかった。(レポートより)

1期受講

手紙



手紙を書いた。ずっと送らなくちゃと思っていた手紙。投函するとき、コトンとポストの口が揺れる。手紙はポストの中に落ちていき、書かなくちゃ送らなくちゃという気持ちが胸に落ちていく。

帰り道は晴れやかな気持ちになる。足どりも軽くなる。ちょっと自分が好きになる。

手紙を書くことは、ほかの何とも似ていない。そんな特別なことを時々しかしないのは、もったいないんだろうか？ううん。手紙には手紙の時間がある。時々とかいつもとかそんなんじゃなくて、手紙のための手紙だけの手紙にとつての時間が流れてる。

助産師に関する話をしたこと覚えています。まず、テキスト、文章が素晴らしい。序盤に出てくる「傲慢でプライド高い」とは真逆の、丁寧で心にしみるような静かな文章力とその内容に胸を打たれました。展示も、おそらく実感や手応えはないかと想像しますが、文章・文学の展示として悪くないと思います。



助産師として様々な家族の出産に立ち会いながら、それは他人の物語であり自分のものにできないと感じ、本講座を受講した、出産直前のナカヤマ。「家族をつくる」という一見誰しもが自然に営んでいるようなことが、実はいかにそれまでの人生からの変化を迫り、苦しく、難しいか、その過程を明らかにする文章だ。文章の中でナカヤマは、最初「家族を持つ」ということを理解できず、疑問を持ち、警戒するが、最後は引き受ける。出産後いつか、家族日記が始まることを願っている。



Comments 講師からのコメント

「家族って何だろう」という疑問から助産師になった女性が妊娠し、自分が「親になってゆく過程」を綴った作品。生い立ちや葛藤、家族への想いなど文章にし、プリントアウトして額装したものを展示していた。〔文章を展示する〕という形態としては非常にシンプルではあるが、文章の内容が非常に濃いので、特異な形で展示するよりも作品に集中する事ができて良かった。



7月の対話でお会いした順に講評を書かせていただき、ナカヤマさんが大トリでした。成果発表を拝読しながら、ああ、やっぱりあの順番にこだわって正解だったなあ、と思いました。「運命なんてものを、私は信じない。」は、ナカヤマさんの助産師として、母として、人間としての一端を書き留めたエッセイでありながら、今この瞬間、コロナとか他人とか家族とか自分に振り回され辟易しながらも毎日を生きている人たちと細い糸でつながった、ひらかれた作品だと感じました。個人的なことですが、昔からナカヤマさんと近い感覚もあり、妊娠した知人友人に「おめでとう」と言わないようにしています。ただ作品を拝読した今、ナカヤマサオリさん自身の人生に、敢えて一言だけお祝いを言わせて下さい。おめでとう。

ナカヤマさんは助産師であり、対話したときにはご本人も妊婦だったので、異常なまでの説得力がありました。今回、助産師のときに考えていた理想と妊婦としての現実に向き合われ、身を持って取り組まれたこと、それを「ことば」でアウトプットしたことは、またとない経験になったのではないかと思います。機会があれば、前にお話した中上健次の『千年の愉悦』を読んでみてください。



にやろめけりー

(ZINE作家／DJ／音楽をつくる人)

1998年6月27日蟹座生まれ。『にやろめけりー』という名前は本名をもじったものであり、ほぼ本名。絵や音楽などアートに関する事何でも大好き。2019年4月に自身初のZINE『自己肯定感』を発表。その後『自己肯定感2』、『まじないの不在』、『わたしことば』とZINE制作を続ける。2019年5月からDJを始め、初心者ながら既に4回のイベントに出演。



『自己肯定感』と題した、自分を掘り下げるZINEを出しているにやろめけりーさんは、どうやって「この私」が言葉を作っているかを知つてもらおうと、自分の部屋にあるCDや本、雑誌などを卓上にずらりと展示。鑑賞者はまるでその部屋にいるかのような感覚を味わえ、またそこから、よりいっそう作品にも興味がわく展示となっていた。(レポートより)

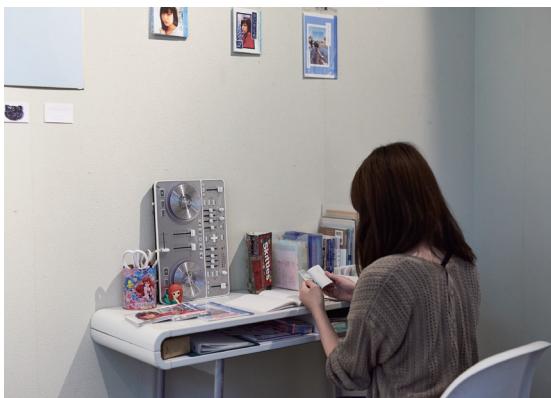
誰もが自分の容姿や性格について悩む時期があるものだ。鏡に映る自分みて、いろいろと思いを巡らせたことは誰にでもあるだろう。しかし、自分で「本」を作るまで行く人は稀だろう。にやろめけりーは、自己肯定感をテーマにZINEを作った。これがとても良く出来ている。個人的には、これを、他人のためにも作ってあげたら良いのではないかと思っている。みんな、今までよりも少し自分が好きになれるかもしれない。



加算型マルチタレント、にやろめけりー。あれもしたい、これもしたい、な勢いを瞬間フリーズドライできる才能を持つ。「わたし」を拡張した一部を「あなた」の一部に取り込んでみて。きっと面白いから。と控えめにアピールする。説明よりも言語化する前の感覚を言語化せずに共有したい欲求をもつ。コンニヤロメ～♪と今日も、いろいろしたい欲求をこなしていく。

身の回りの可愛いものを集めたスクラップブックのような、部屋の一角。壁にはアイドル写真集のような「自己肯定感」というZINEが飾られている。作者のにやろめけりーは、まず、自分の喜びのために、そして自分ではどうにもならない現実を受け止めるために、言葉をつかい始め、今ではZINEとして人と分かち合うまでになった。冒頭の一見キッチュで個性的に見える部屋は、彼女自身の部屋の似姿で、様々な言葉に出会ってきた／紡いできた、その時々の彼女自身に、鑑賞者が出会うための、仕掛けとなっている。





Comments 講師からのコメント



「作家自身が自分について展示することを通して、鑑賞者に自分と言葉との向き合いを考えさせる」という手法は、今回の作品に限らず、これまでの発表作品にも通底するテーマでもあるのだろうか。「書くという行為が存在してよかった」と作家自身が綴るように、言葉が表現手段であること以上に、作家の出自、等身大の自分としての生活、生きていくための“祈り”的な言葉を見つめる時、私もまた、何を信じて生きていこうか?と考えさせてくれる。

「自己肯定感」「まじないの不在」と題し、自分自身について綴ったZINEの展示と、自身の部屋にある本やCDなどで机の上を再現。どういう本や音楽から影響を受け、考え、そして自分の言葉が生まれてきたのかを、この展示を通して作者自身がもう一度考え方きっかけになったのではないかと思う。そして鑑賞する者もまた自分自身の言葉の根源を見つめる機会になったのではないかと感じた。



自身とことばとの関係性についてのことばを豆本のかたちで組み立て、自らの部屋を模した空間として届けるにやろめけりー。ことばそのものではなく、その効果でもなく、ことばを生み出していく「書く」という行為自体が人にどんな影響を与えるのか。ことばの持つ複層的な意味を読み取れるかが鍵になる作品だと言えるだろう。

受講生と作品

Participants and Works

藤原京子 (デザイナー／水引作家)

2016年大山村地域おこし協力隊に。2017年にグラフィックデザイナーとして独立し、同時に水引ブランド「gocco」を立ち上げた。

1期受講

2期受講

本講座とほぼ同時期に「ゲンロン ひらめき☆マンガ教室」を受講してマンガの執筆を始めた藤原さんは、《はじめての原画展》および《習作》と題し、制作中の漫画のネームやマンガ教室の講義ノート、原稿をプリントしたTシャツやトートバッグなどをインスタレーション的に展示。またこれまでの活動紹介として、水引アクセサリーやグラフィックデザイン、ポートフォリオを閲覧できるコーナーを設けた。(佐々木)



自身が持つ二面性の一方、ダークサイドのアーカイブを楽しむコレクター。自身を恥ずかしくて見たくないという現在の気持ちをウェアラブルなアイテムにし、身に着けることで記憶に刻む作品を制作する。自らを「考えて考え抜かないとも手をつけられないタイプ」と分析するが、この「考え方時間」の過程で光と闇の二面性が形成され、それぞれの側面が言語化されて意味や罪を持つことを、このときの彼女は知る由もなかった。

水引作家さんですね。展示自体は、デザイナーとして、あるいは漫画家としてのご自分がごっちゃになっている印象で、まとめがありません。しかし、少なくとも水引作家としては既に実績があり、デザイナーとしての能力もあるので、そこを生かしつつマンガとしてどうブーストさせるか? が悩みどころだろうと察します。複数のお仕事を武器とし、うまくマンガとして定着させる方法が見つかるといいなと思います。難に考えると、マンガ「水引物語」とか? ゲンロン ひらめき☆マンガ教室も発見のある良い講座だと思うので、アイデアをくれることでしょう。

漫画の原稿と、エコバックやTシャツに印刷した漫画の展示と自身が立ち上げたブランドの水引の展示。キャッシュレスで、自分が表現したい事と、「恥ずかしい」「人に知られたくない」気持ちとの葛藤について触れられており、それを脱するか否か、または共存するかで生まれてくる表現の形は大きく異なってくるな、という、忘れていた感覚が蘇ってきた。それらを含め、今現在のありのままの自分を表現する姿勢が潔く、新鮮だった。



西島

これまで隠していた自身の漫画を、はじめて人に向けて発表する途上だという。その初期衝動と、恥ずかしさや苦しさ、楽しさをひっくり返して視覚化したのが、「ことばの再発明」の成果発表である。展示は漫画そのものを見せる構成にはなっていない。むしろ、未完成の作品のグッズが先に制作されて、全面的に展示されている。客観的になれないほどめり込んだ自分を、客観的に見るための試みだとも言えるし、近い将来、この漫画がグッズ化されるほどの価値をもつはずだと、自分自身を鼓舞するようでもある。



水引でごっこ遊び? どういうこと? そう思った方は、Instagram (<https://www.instagram.com/xxgocco/>) を見て頂きたい。冠婚葬祭という固い枠に収まっていた水引を開放し、自由自在に遊び倒す。身につければ、え? それ何? と必ず聞かれること間違いなし。結ぶということは、縁をつくるということ。コミュニケーションとネットワークの時代に相応しいアクセサリーかも知れない。

藤原さんの宣誓文、震えました。夏の対話でお会いしたとき「今度、ゲンロンの漫画教室を受講するんです」というお話を伺ってから4ヶ月。藤原さんの展示のアーカイブを拝見して、ああ年の瀬がくるなあ、とようやく3つの季節の巡りを感じました。藤原さんは自分という人間に対する理解の深度が非常に深い方だと思います。自分自身がつくってしまった作品や作家性、培ってしまった技量や経験値を自己否定し、先へコマを進められるのは、自分自身だけなんですね。藤原さんは藤原さんの魂を先に進めるために、自分を抱きしめられることばを獲得されているのだと思います。





Comments 講師からのコメント



フリーペーパーをつくり、マンガも描くことができる藤原にとってのキーワードは「言語化」だと感じた。ことばに厳しい彼女が、「小手先ではない作品を」というテーマで今回提示した作品は、これまで自分が制作した断片群だ。ことばに誠実に向き合うが故に、ことばそのものではなく、その記憶の断片を通して自身のことばを伝えようとする試みにたどりつくのかもしれない。

水引創作、デザイン、ライティングなど様々に活躍する本作家が提出した作品が「漫画をモチーフにしたグッズ」であることが面白い。漫画自体でもなく、文章自体でもない。漫画の一部を取り取ったTシャツとトートバッグ。赤入れされた原稿。並べて展示されているデザインの制作物と対照的な世界観。デザイナーとしてコントロールされた普段のご本人のもう少し奥にあって、普段は抑え込んでいる熱情のようなものなのか。私の好きなものについて、どのように向き合い続けていられるのか？ そんな迷いや葛藤を感じた。



藤原さんは、水引作家としての作品だけに留まらず、デザイナーとしてメディアを問わずいろんなものを形にされてきた経験が、今回の展示アイデアにもつながっていると思いました。現代的なセンスをナチュラルに身に付けられている方なので、今回のマンガをテーマにした作品のように、思いついたメディアで好きなようにアウトプットしていけば、恐れるものも悩むこともないと思います。



腕時計

腕時計がこわれてしまった。直そうか、買い替えようか、悩んでいる。ずいぶん長い間使ってきた時計だ。でもいま見ると、どうしてもこれを使い続けたい、というほどでもなくなっている。じゃあ、買い替えたらいいかというと、事はそう単純じゃない。

ひとつのものと長く長く付き合うには、時に、決心がいる。

それはほとんど、自分とは何者なのか、を決めるのと同じかもしれない。違うかもしれない。違うけど同じだと思いたいのかもしれない。同じだけど違うと思いたいのかもしれない。ものと付き合うのは、鏡を見るみたい。

受講生と作品

Participants and Works

水田美世 (totto 編集長／ちいさいおうち管理人)

千葉県我孫子市生まれ。鳥取県米子市育ち。2008年から8年間、川口市立アートギャラリー・アトリアにて芸術員として勤務。2人目の出産を機に帰郷。2016年に子どものためのスペース「ちいさいおうち」を自宅隣に開く。2017年には鳥取県内のアート活動を伝えるウェブマガジン+○++○(トット、以下 totto と表記)を仲間と立ち上げ編集長を務める。



水田さんが編集長をつとめるウェブマガジン「totto」の紹介と今後の展望を、鑑賞者にも参加を促すかたちで提示する試み。机上のノートパソコンには「totto」のトップページが表示されており、鑑賞者は自由にサイトを閲覧することができる。壁面には、同サイトへの掲載が予定されている推敲段階のテキストを掲示。赤字で書き加えられた訂正指示や取り消し線が「今まさに生まれつつある言葉」を活き活きと伝えている。(佐々木)

つくる、みつける、たのしむ、くらす。
十人十色のとっとり Magazine「トット」



推敲中のテキスト展示、という手法に、水田さんらしさとことばに対する誠実さを感じました。「totto」のこと、鳥取のこと、書くということへの「慈しみ」みたいなものが、水田さんの取り組みや姿勢からはあふれています。私は水田さんと同じく「メディア」とよばれる世界にかかわる人間の1人ですが、このことばが常々あまり好きではありませんでした。でも、水田さんのやつておられることは語源としての mediate—何かと何か、誰かと誰かの間を媒介する者の矜持と慈しみに満ちています。有り物のことばを越えていくのは、そうした誰かの愛情であることを信じています。



鳥取県内のアートや文化を扱う「totto」というウェブマガジンを紹介する展示。

totto のステイトメントやロゴ、及びウェブデザインの紹介をキャプションで説明し、WEBで閲覧可能な状態になっている。キャプションは赤字や文字修正の校正段階の体で作成されており、普段どういう形でウェブメディアを作り出しているのかが垣間見えた。普段から文字を扱っている人がこの講座を通じ、今後どういう風に言葉と向き合ってゆくのかが気になった。



ウェブマガジン「totto」を軸にしたプレゼンテーションとしては完璧。赤字の入った本文展示も「お?」と一瞬思させ、フックになっています。冷静さ、大人感があり、雑多で勢いのある「にやろめけりー」さんとは好対照だと感じます。





Comments 講師からのコメント

水田が主催するのは、鳥取の色々な人の言葉を集めて紹介するウェブマガジン「totto」。鳥取の人同士をつなぎ、その良さを再発見させ、鳥取以外の人にも発信する機能を果たしている。サイト上の厳選された情報を通して見る・知る鳥取は、正直、飽きることがない。その理由の1つは、「totto」が顔が見える個人にフォーカスし、一人の行動が状況を変えていく尊さを伝えようとしているからだろう。ありがちな観光地のPRとして、簡単に消費されたりしない、新しい地域情報の価値が、「totto」から見えてくる。



はちみつ



ヨーグルトにはちみつをかけるとおいしい。ホットケーキにかけてもおいしい。たこ焼きにはソースをかける。冷奴にはしょうゆをかける。ホットドッグにはケチャップをかける。これこれにはこれ、という組み合わせを知らず知らずのうちにいくつも覚えていくのは、人生の約束事でもあり、小さな幸せのこつでもある、と思う。はちみつみたいな言葉を、いつも、いくつか、心の鞄にしまっておこう。一例として「またお目にかかりますように」という言葉を、あなたに。



自ら運営しているウェブマガジン「totto」のリニューアルそのものを作品にして、その制作プロセスを展示してしまうアイデアが、とても地に足が付いた実践だと思いました。今回リライトされた ABOUT ページを眺めながら、「ことば」はイメージでもあり、その内容だけでなく、どれぐらいの文章量のものを、どんな書体を使ってどんな文体で表現するかによって、意味が決まってくるのだと再認識させてもらいました。

村瀬謙介 (小取舎 代表)

1978年鳥取市生まれ。ビジュアルアーツ専門学校大阪放送・映画学科卒業。大阪で書店勤務など様々な仕事を経て帰郷。鳥取県内の情報を扱うフリーマガジンの営業、企画、製作を10年にわたり行う。その後、鳥取市内にてロックバーの経営、鳥取大学の地域連携コーディネーターとして勤務したのち、2020年、本講座「ことばの再発明」の受講を一つのきっかけに、ひとり出版である小取舎を設立。



個人出版社を立ち上げた村瀬さんは、頭部から「私は私の考えを未来へ残す」という文字が流れ出ているオブジェと、装丁デザインに関わる鑑賞者参加型の作品を展示。机上には数種類のカバーが置かれており、そこに好きなタイトルと著者名を書き込むことができる。鑑賞者はそのカバーを白紙の本に掛け、書籍制作を擬似体験することで、デザインとコミュニケーションについて思考するよう促される。(佐々木)

小取舎 kotorisya

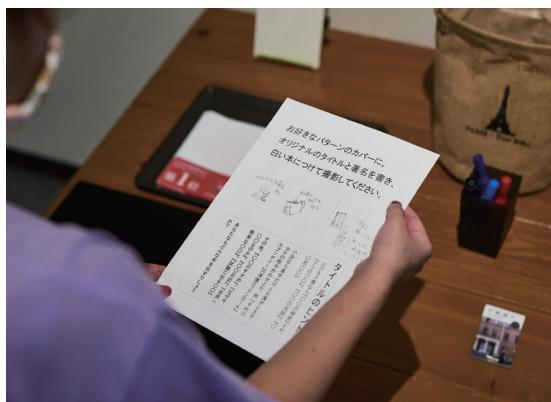
ひとと言葉、ひとと本の距離を縮める男。
ひとり出版社小取舎代表。村瀬は1978年、
鳥取市に生まれた。高校卒業後、大阪の
専門学校で映画を学ぶ。その後、書店員
でのアルバイトを経て、27歳に帰郷。鳥
取のフリーペーパーを扱うベンチャー企
業に入社。出版の環境がほとんどない鳥
取にあって、言の葉の新しい風を吹かせ
るために孤軍奮闘中。



「わたしはわたしの考えを未来へ残す」という
言葉が、天井から反対向きに吊られた顔のオブ
ジェから、幟のごとく下がっている。落ち着い
た明朝体が逆にユーモラスなこのオブジェ（立
体）のタイトルは「こと」である。それに対し
て、鑑賞者が本の帯の文章を創作できる参加型
のコーナーは、「葉」だそうである。村瀬自身
がキャプションで記す通り、「葉」で鑑賞者は
言葉を未来に残す擬似体験をすることとなる。



「言葉に対する向き合い方を考えたい」という言葉が印象的だった村瀬は、出版物を届けていく取り次ぎを活動の軸にすえようとしている。本はことばからなっているが、そのことばは本の中にあるだけではない。この作品は、流通という仕組みの中でことばが効果を持つ瞬間をシンプルなかたちで再現しようとする批評的な実験だと言えるだろう。



Comments 講師からのコメント



自身が装丁デザインした本のカバーを置き、来場者にタイトルを書いてもらうという参加型の作品。同じ視覚情報を基にしながら受け取り手がどういう反応をし、そこからまたどう表現するかという形式が、作品を鑑賞しに来たつもりが、作品に関わることで、作品についてまた別の方向から考えるきっかけとして機能していて面白かった。



言葉というものは、私たちひとりひとりの中から生まれ、声として飛び出し、刹那に消えていく。羽がついた、あるいは葉っぱのようにひらひらといなくなってしまう言葉の行き場。「言葉の行き場は、本ではないか？ 本であってほしい。」というストーリーがなんともロマンチックで、ニヤニヤしてしまう。鑑賞者が、本のラベルを考えてみることを通じて、「言葉としてあえて残したいことは何か？」を問われるというのも面白い。毎日生までは消えて残らない言葉がほとんどである中で、本のなかの言葉は現代にまで流れ着いた「生き残り」なんですね。

どうしても鳥取の文化を発信したい出版格闘家。ARかと思ったら勘違い。アーティスティック・リアル（AR）なコピー作品を実空間に出現させ、自己の熱き想いを炸裂させる表現者という側面も持つ。また、インタラクティブな装丁編集のコミュニケーションを通して、ストーリーの芯を食う言葉を、密林の中から探し出すジャングルクルーズ船長でもある。



もりさと (米泳ぐ代表／サンインテラス編集長)

京都府福知山市生まれ、鳥取県米子市育ち。日本一周の旅を途中で断念し、地元に戻り米子を拠点に活動を開始する。フリーランスとして、執筆や撮影業務などを行なながら行政と連携し、まちづくりに関わる案件などを担当。並行して、拠点を作るために、DIYなどしながら12月中旬のオープンを目指す。

2期受講

映像や言葉を使って表現し、ウェブメディアも運営するもりさとさん。コミュニケーションについて考える中で、成果発表展では「遺書」と「ラブレター」という二種類の手紙を展示した。コミュニケーションは常に双方向のものなのか、あるいは断絶を含んだものなのか。人間の「生」と「死」はそこにどのようにかかわるのか。シンプルでありながら、鑑賞者に様々な思考を喚起する作品となっていた。(nashinoki)

遺書とラブレターが展示される場所に居合わせた時に、人が何を思うのか。「中身まで見なくてもいいのかも」と作家本人がいうように、本作品はただ居合わせるだけで自分について考える、あるいは大切な誰かについて考えてしまうような状況を生み出すメディアアート作品である。死のうと考える時か、誰かを愛し契約を結ぼうとする時というのは、複雑な自分を相対化し、意味や理由や関係性を一番考え、意味や理由や関係性を一番手放すような時間かもしれない。



伝えたいことが多く、わかりたいことも多い人。生死という究極の対比というテーマを掲げコミュニケーションを問う。愛は始まらなくとも、したためた言葉は熱をおびたままだし、肉体は滅んでも、言葉だけは永遠に生き続ける。ある意味言葉は不死身だけど、殺そうと思えばいつでも殺せるものもある。だからこそこの保存のきくツールは厄介なのである。

「遺書」と「ラブレター」と書かれた、極めて思わせぶりな2つの開封された封筒が、それとなく置かれている。展示会場に行かないと読めない、さらに、鑑賞者は読む必要さえない、と作家は言うが、そこまで言われると反対に読みたくて仕方なくなる。一見素っ気なく、鑑賞者へ無関心な態度を見せるこの仕立ての背景に、実は、鑑賞者がどう動くか想像する、作家自身の綿密なシミュレーションがあるのだろう。もりさとのこの仕掛けは、テキストや発話など、既存の形式の中で言葉を工夫して伝えるものではない。言葉を受け取って返す(ラブレター)ことと、返すことを許さない(遺書)ことを並置して見せる、コミュニケーションの形式そのものについての作品だ。





Comments 講師からのコメント

自身が書いた〔遺書〕と〔ラブレター〕の展示。それぞれ書き記す内容は真逆のようであり、しかし大切な人へ向けたメッセージとしては共通する部分もあるな、と気付かされた。従来からある形式に自分の言葉を乗せることにより、改めて自分が大事にしている人だったり、普段は忘れている感覚を取り戻したりするきっかけになっているのではないかと感じた。



かつて言語学者の立川健二は『誘惑論』という本を書いた。その本のテーマは「他者を誘惑する言葉」であった。もりさとは「ラブレター」と「遺書」に着目する。どちらも強力な感情の磁場である。それだけでなく、恋愛も遺書も、本来的には双向性が保証されないコミュニケーションである。自己完結する言葉、しかし投げかけにはおけない言葉、そこに特別なコミュニケーションの場を発見するところに、彼の素質が見える気がする。



コミュニケーションを成立させるものとしてのことばに焦点を当てる作品。とりわけ、遺書とラブレターという二つの異なる様式の手紙をとりあげている。封筒に書かれた「遺書」と「ラブレター」の文字は、いわばことばを届ける前提に付与されることばだ。それがその後のコミュニケーションをどのように左右するのか、ということを参加者に投げかける実験的な作品だととらえることができる。



受講生と作品

Participants and Works

yamasaki (アニメーション作家)

1998年兵庫県生まれ。鳥取大学地域学部地域学科国際地域文化コース4年生(受講時)。2019年4月、映像研究のゼミに所属したことをきっかけにアニメーション制作を始める。初めて制作したアニメーション作品『くらやみせかい』は、「第12回よなご映像フェスティバル」で特別賞を受賞。

1期受講

yamasakiさんは、3つの画面に、奇妙なフルコースが登場する皿とそれを口に運ぶ手が映し出された映像作品《Concealed dish》を制作。普通の料理には使わない色彩を使っていると言う。また、食べる所作に音が乗っているのだが、その音がどうも料理の絵と合わない。(例えば、ナイフで切る時の音が、まな板で包丁を使って切る音になっていた気がしたのだが……)。あえて色と音のズレを生じさせることで、「普通の食事」という既成概念が崩れ、食べること自体を考えさせられる作品だった。(レポートより)



テーブルに並んだ料理と、それを食する様子を描いたアニメーション作品。スープの色が水色だったり、動きと音が噛み合っていなかったり、様々な違和感を覚えさせる作品。〔料理〕 = 〔美味しい〕、〔食べる〕 = 〔食欲〕という日常的に求める感覚と反しているのだが、異常に逸脱しているわけではなく、微妙なズレが何とも不思議な気持ちにさせられた。

勇気

勇気というのは、傷つくことを選ぶこと。
勇気というのは、失ってもいいからあげること。
むりに持たなくともいい。気づいたらふりしぶっていてもいい。
人間の美しさのひとつは、時に、勇気を持つことだと思う。
この世の美しさのひとつは、ふだん、そんなものとは無縁に暮らすことだと思う。
人間とこの世の間に生きていると、時々、勇気が呼びに来ることもあるかもしれない。
傷ついて、失って、人間は美しくなる、ということかもしれない。



たぶんyamasakiさんは、本人が意識されていないレベルで、独特の感性を持たれていると思います。今回の料理のアニメーションも、創作系のフランス料理か何かだと思うんですが、グロテスクな印象さえあるのが興味深い。料理は食べ物を自分の意志で口に運ぶので、ある種エロティックな行為だと思うんですが、おいしそうという感情よりも、音や触感といった形式美の方が先に来る。それがちゃんと作風になっていると思います。このまま自分が気持ちいいと思うことを信じて、何かを作り続けてください。





Comments 講師からのコメント



対談でも見せていただきましたが、なんとも不思議な間合いのアニメーション。控えめな音も良いと思います。あと、作品紹介文が短めで的確で、大変上手だと思います。語りすぎない「思わせぶりさ」があると思います。ゆえに一度見せていただいた映像ですが、文章との相乗効果で、アニメーション自体が「神秘性」を宿しています。これは言葉と映像の演出とも言えるし、詐欺的でもあり「ズレい」とも言えそうですが、そんなバランスの取り方が、現段階でとても効果的と感じました。



制作しながら思いついたことをその都度反映し仕上げていく、という制作スタイル上、「自分の表現や作品についてうまく理解出来ておらず、説明する際言葉に詰まる」と仰っていたyamasakiさん。作家紹介のキャプションテキストから、この夏秋にyamasakiさんが過ごした時間を感じました。「掴みどころのない作品たち」と自ら言いきる表現に、自然体でまっすぐな作家性が表れています。今の自身を“完成形”と表現せず、途上にあることに自信をもったことばが印象的でした。作品はとてもフレッシュで美しい違和感。ことばと作品が見事に共生していたと思います。

レイヤーや膜を重ね、透かして見せる表現が巧みで、触覚的と言いたくなるような独特のゾワゾワ感を与えるアニメーション。膜と内容物の質感の違い、それらが重なり合った部分の見え方、食事に触れる手と食器の感覚…こうしたディテールが、端正に作り込まれている。yamasakiは、成果発表展の作品キャプションでも、作中でも、言葉では語らない。しかし「Concealed dish」という思わせぶりなタイトルが、作品自体のゾワゾワ感と相まって、軽やかかつ不穏な雰囲気を作り出すことに成功している。



成果発表会「ギャラリートーク」

Report レポート



「ことばの再発明」受講生らの作品が一堂に介する、成果発表展「ことばの再発明×18展」が9月25日～28日に鳥取市の「ギャラリーソラ」で開催された。そして、会期中のプログラムとして企画されたのが今回のギャラリートークである。当初は一般公開を予定していたが、新型コロナウィルス感染防止の観点から受講生及び関係者約25名が参加するクローズドイベントとして実施した。

テーマは「空間の言語／インストールの技法」。「ことばの再発明」は、自身の作品や活動を適切に言語化して他者に伝えることを考える講座として実施。その成果発表は「展示設営（インストール）」という形で自らの表現を物理的な空間に配置していくことであり、これは他者に対してどのように伝えるかという「ことば」の延長線上にあるテーマであると言える。

今回の講師は、東京都写真美術館学芸員の多田かおりさんと、新宿眼科画廊ディレクターの田中ちえこさんのお二人。トークの冒頭、本講座企画者のひとりである佐々木友輔さんは、講師を依頼した理由について、お二人が多様かつ複合的なメディアを扱うコンテンポラリー・アートの作品展示に多く立ち会ってきたことを挙げた。今回の成果発表展もまた、受講生らが各自の表現を多様なフォーマットで示した展示となった。

多田かおり（ただ・かおり）

東京都写真美術館学芸員

2013年度より恵比寿映像祭（主催：東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館・アーツカウンシル東京／日本経済新聞社）に携わり、ナム・ファヨン、ジョウ・タオ、ダンカン・キャンベル、スタン・ダグラスといった国際的な評価の確立した作家から、佐々木友輔や青柳菜摘など日本の若手作家の作品までを紹介。カテゴライズの困難な新しい映像表現の紹介に努めている。

田中ちえこ（たなか・ちえこ）

新宿眼科画廊ディレクター

アーティスト、デザイナー、イベントオーガナイザーを経て2004年に新宿眼科画廊を開廊。既存の枠や形を超えたヒト・モノ・コトが集まり、発信してゆく場所と社会との関わり方を模索している。

トークは、受講生らが集まる展示会場と、講師のお二人及び会場に来ることができなかった受講生を、オンラインでのビデオ中継でつなぐ形で行われた。受講生は各自5分程度、展示についてのプレゼンテーションを行い、講師の二人より講評をいただく形で進行した。以下にその様子をいくつか紹介したい。



painter の exkeeeさんは、《Lisa》と題した「自分の角度から見たモナリザ」を180センチ四方の板に迫力の色彩で描いた大型の作品を展示。自身の作品のコンセプトをなかなか考えられず講座に参加したというexkeeeさんは、プレゼンの場で「多様な角度から物を捉えることや色の混じり合う瞬間を大切にする」「計画性や正確さに抵抗するために、その時に出会う線や形、色を自由に描いていく」と講座を通じて考えた自身の活動コンセプトを発表した。田中さんより今後の方向性について問われると、「講座を受けて、自身の今の作風をさらに突き詰めていこうと思った」という。両講師に「まさに言行一致」と言わしめた、プレゼンテーションをする本人の表情と作品のパワフルなキャラクターに、今後を楽しみに思った。

exkeeeさんのように、講座を通じて、改めて活動の方向性を自身で再確認・再設定した受講生も多かったんだろう。また、普段は作品として展示さ

れることがないものを展示した受講生も多数いた。「ことば」というキーワードの下に受講生らが集まった本講座ならではのことである。





本来は目でしか受け取れないイメージを音声で伝える、舞台芸術やイベントの音声ガイドの制作をしている田中京子さん。視覚障がい者などの鑑賞を補助する音声ガイドという職業自体の認知向上と、自分が感じている音声ガイドそのものの作品性をどのように展示するのか、大変悩んだという。最終的には、音声ガイドをつけた映像をディスプレイとヘッドホンで鑑賞できるようにし、手書きで校正した台本などの資料と併せて展示をした。多田さんは音声ガイドの展示について「自分にとって全く新しい存在。(音声ガイドを聞くことが)コンテンポラリーダンスの新しい鑑賞方法になるかもしれない」と驚き、田中さんは「展示として文句ない。一番興味がそそられる形なのではないか」とその展示方法を評価した。



アートイベント運営などを行う企画者の井澤大介さんは、自身の活動を通じて関心を持ってきた“人”にフォーカスする展示を用意した。ギャラリーを巡って収集してきたポストカードのアーカイブ、仲間達と共に運営する「深夜の美術展 in 鳥取」の様子、鳥取大学美術部在籍時より心理学やコミュニケーションに関心を持って制作した作品などをまとめて展示した。

多田さんが「生活や美術に対する意識がとてもはっきりわかる」と井澤さんが今回のために制作したキャプションのわかりやすさに触れると、田中さんは「自分が好きな“人”についての興味が伝わる展示」と評価。過去に同ギャラリーで何度も展示をしてきたという井澤さん自身も「講座を通じて自身でも今まで最も満足のいく展示ができた」と笑顔を覗かせた。



演劇を学ぶ鳥取大学地域学部4年生の中村友紀さんは、講座を通じて新たに制作した詩「ことばとからだ」を展示。会期中、作品の前で自身で詩を読むパフォーマンスを行なった。

多田さんは詩について「すごく練られたことば。今回の展示全体を包むようなことばでもある」と言う。田中さんは「パフォーマンスを見て作品への興味が出た。次の作品が楽しみになった」とパフォーマンスとの組み合わせを評価した。中村さんは「パフォーマンスをした時は相当緊張していた」としながら、「このくらいの規模の小さな演劇を続けていきたい」と今後の展望にも触れた。



未来



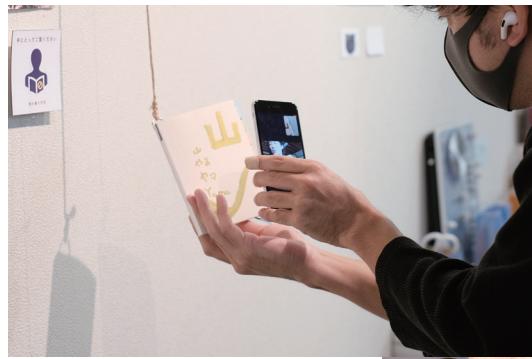
オンラインで各地を繋いでのトークはその展示作品数もあり大幅に時間を超過して終了した。

今回受講生らは、約2ヶ月という大変短い期間の中、オンラインで講座を受講し、内容を検討し（場合によっては新たな作品を作り）、実際の展示プランに落とし込んだ。結果、意図した通りに展示をできた受講生も、そうでなかつた人もいるかもしれない。また、現地で展示設営を行えない受講生がいるなどコロナ禍の時期ゆえの事情もありったし、成果発表展の開催自体も一時は危ぶまれた。これらの困難の中でも、受講生・運営とともに、次々迫られる〆切の中で最善の判断を行い、今回の展示の実施に漕ぎ着けることができた。これは、小さくても確かな点を打ち続けた結果である。

これからも我々は、その時々に表現をし、その時にしか紡ぐことができない「ことば」を残していく。そうやって何度も立ち止まり、自身の表現の横で「ことばの再発明」を繰り返しつづけることは、表現者に必要な営みに他ならない。この営みは螺旋階段のように、同じ場所をぐるぐると回っているように感じられるかもしれないが、根気強くつづければ、いつか、とても高い場所に立っていることに気づくだろう。今回の講座をきっかけに、受講生の中からそのような高みに登っていこうとする人が現れることを期待したい。

今回、展示を用意し、自身の「ことば」でプレゼンテーションを行う受講生らの姿を見て、そのようなことを考えた。

（文・野口明生／写真・藤田和俊、平木絢子）



「ことばの再発明」成果発表に 関する所感

多田かおり（東京都写真美術館学芸員）

本講座は、表現者が自身の表現について考えた末に、思考の結晶のような言葉を開陳するようなものではない。無論、受講者は自身の活動とそれを表現する言葉について熟考しただろう。そして本講座のなかで様々な言葉と出会いながら、自分自身は他者に対してどのような言葉を通して表現するべきか、選択していくたのだろう。しかし本講座の成果発表展という場は、孤高の表現者が放つ言葉が、一方通行の「話す」「聞く」関係を作る、というものではなかった。そこには他者と関係を取り結ぶことを目指した、様々な言葉の様相が現れていた。

筆者は本講座の最後に行われた前述の「成果発表展」での講評に、講師として招かれた。展示風景の写真と文字や映像など展示物のデータ、個々の受講者による展示物あるいは表現者としての自分自身を紹介するキャプションを、事前情報として運営側から受け取り、その情報を踏まえそれぞれの受講者と対面して講評を行った。本稿は、その成果発表を通して筆者自身が考えたことをまとめたものである。

本講座の企画者の一人、佐々木友輔による概要文において、アーティストなどの表現者がしばしば自身の表現を言葉にすることを避けがちであることが、指摘されている。佐々木によればそれは「語るべきことは作品で全部語っているのに……」「言葉にできないから作品を作っているのに……」という理由からである。しかしながら、筆者自身の経験によると、自身の表現を言葉にすることは、鑑賞者など他者に対するサービスとしてだけ機能するのではなく、表現者本人が表現を続けていくことにおいても、有効な作業だと言える。筆者は特に、現代美術や実験映画、つまり個人による創作活動の領域の、作り手の言葉を聞く、あるいは読む機会が多い。この領域においては、自分自身の表現したい欲望や、その表現がそうでなければならない必然性を、客観的に捉え、言葉にしていくという作業が必要だ。それは、前述の通り他者に発信していくためだけでなく、自分自身の向かうべき方向を知るために有効だからだ。本講座の成果展で、キャプションなどの形で発信された言葉も、正直に自分自身の表現と向き合った結果、生まれてきた言葉なのだと感じた。例えばexkeeeeや、「totto」代表の水田美世の言葉では、個別の作品やプロジェクトを説明しながらもさらに、その創作、あるいは活動の原理や、その表現の形がそうである理由が、明確にされていた。

表現者がその表現を言語化しない理由は、前述の佐々木が指摘したこと以外にも、様々にあるだろう。その1つに「作品の見え方を、言葉に制限されたくない・言葉で押し付けたくない」といった、鑑賞体験におけるバイアスを避ける場合がある。それでもなお、アーティストが自身の表現を言葉にすることによって「こう見られたい」あるいは「こう見るべきだ」というビジョンに、鑑賞者を誘導することができる、というメリットがある。ISOIYO の透徹した英語のステートメントや、yamasaki の思わせぶりなタイトルは、一見して観る人を寄せつけなさそうであるが、作品自体と併せて読んだときに、絵やアニメといった彼女たちの視覚的な表現に対して、過不足の無いことばが慎重に選ばれているということがわかる。

また、一般的に考えられるちょうど良いコミュニケーションではなく、迂回するような言葉を用いることで、作り手の態度を浮かび上がらせることが可能だ。例えば磯崎つばさの逡巡する日記は、結論こそ無いのだが、彼女の心のダイナミズムをありありと伝えている。さらに、読み取り不可能な写真を通じたイメージの操作から鑑賞者を引き込む奥井彩音や、読まなくても良い手紙を展示したもりさとなど、あえてコミュニケーション不全を起こすことによって、逆に発信者と受け手が共有する場を活性化させる試みも見られた。

アーティストなど表現者の言葉は、その人本人の人生よりも、長く残ることがある。10年前のステートメントが意図せずウェブ上に残ることなど、珍しいことではない。また作り手本人以外の人々が作り手の表現を言語化し、そちらの方が残っていく、という場合もある。それが作り手の意図と全く異なっていることすら、あるのだ。この場合作り手ではなく、言葉を発信した人たちにとって、有意義で、有意義なビジョンの中に、表現の見方が閉じ込められてしまう。したがって、作り手として自身の表現への、そのようなラベリングを回避するために、必要に駆られて言葉を発することもあるだろう。こういった言葉の流通を扱った表現としては、ひとり出版社・小取舎代表の村瀬謙介や、小さい頃からの言葉との付き合いの延長でZINEを出版するにやろめけリーの発表が挙げられる。

もちろん、言葉の内容を伝えること自体を主眼とする作品もあった。中村友紀の発話のパフォーマンスや、Seizanの映像におけるダイアローグが、それにあたるといえよう。中村が演じることをテーマに言葉によって「演じた」こと、またSeizanが、過去に存在した人々に共感し、彼らをイメージさせる、いわば「再演」するような言葉を選んだことは興味深い。発話することによって、その言葉を消化し自身のものにしているようにも感じた。

冒頭で述べた通り、本講座の成果発表において言葉は、硬直した1つの解釈を導くものではない。言葉を入り口に、むしろ非言語的な、発信者と受け手のダイナミックな関係が生み出されていた。佐々木が前述のテキストで論じている通り、今日の表現者は、自身の表現領域の言語を理解しない人々へ向けて、言葉を発信していくことが求められる。さもなければ活動を維持できない。あるいは、そもそも自身の表現領域の外に向かっていく興味こそが動機である表現もある。このようなとき、他者が異なる考え方を有していることを正しく認識し、他者の言葉を自分のそれと安易に同一視せず、真摯に耳を傾け、また言葉を尽くして自身の考えを伝えることが、道義上正しいばかりではなく、表現者として必須の技術であると言える。本講座の成果発表は、この状況を拡大鏡で覗くように丁寧に検証し、自身の表現と向き合いながら同時に他者へ敬意を持って伝える、ということが、いかにして可能かという実践のように見えた。

再発明された「ことば」の体系

大林寛（クリエイティブディレクター／編集者）

今回の展示を見て、なんだかとても安心した。これが率直な感想だった。安心したということは、何かを心配していたということになるが、心配していたのは、「ことばを再発明する」という壮大なテーマを、受講者たちがどう解釈して表現するのか想像できなかったからだった。しかし、自由気ままに「ことば」が使われている実際の展示を見て、いらぬ心配をしていたのだと思い直すことになった。

ところで「ことばの再発明」というときの「ことば」とは一体何だったのだろう。また何が「再発明」されたのだろうか。

このテーマを聞いたとき、まずわたしが思い浮かべたのは、二種類の「ことば」だった。ひとつ目は「作品を語ることば」で、これを〈ことばA〉とすると、〈ことばA〉は作者が主体になって対象の作品を伝える「ことば」で、今回の講義でも大義として想定されていたものだろう。

〈ことばA〉は、道具のようなものだ。使いはじめの道具は、その存在を意識しすぎてうまく使えないが、使い慣れてくるとわたしたちの身体に馴染んでくる。そのときわたしたちは、もはや道具を使っていると意識していない。〈ことばA〉も同じで、「ことば」を使って意識的に伝えようとしているうちは、大体うまく「ことば」を使えない。きっとそんなときは、伝えたい相手にも思うように伝わっていないだろう。意識から「ことば」が消えて、「ことば」を失ってしまうことで、はじめて「ことば」はわたしたちのものになる。相手にも伝わり、上手に使っている状態になる。「ことば」に頼りすぎると、自分の方が「ことば」に操られてしまうのが、〈ことばA〉の難点と言えるだろう。

もうひとつ想像していたのは、「作品 자체が語ることば」で、これを〈ことばB〉としておく。〈ことばB〉の主体は作品で、対象の鑑賞者に直接伝わってくるメッセージのようなものだ。

〈ことばB〉は書かれもしないし語られもない。詩的な魅惑であり、あくまで鑑賞者の主觀に委ねられている。〈ことばB〉が聞こえはじめると、鑑賞者は自分の意志と関係なく、恋するかのように惹かれずにはいられない芸術体験をすることになる。だから、鑑賞者として〈ことばB〉が聞こえるのは幸福なことなのだが、作品に取り込まれると死に近づきすぎてしまう危うさがある。

つまり、〈ことばA〉は社会的な言語で、〈ことばB〉は美的な非言語と言える。そもそも〈ことばB〉が聞こえてこないという人も一定数いるので、それを補うのが〈ことばA〉になるが、〈ことばA〉だけが饒舌でも作品とは言えない。また〈ことばA〉を取り込みすぎても、〈ことばB〉に取り込まれすぎてもいけないので、両者のバランスを保ちながら、うまく「ことば」と付き合わなければ

ればならない。これが、当初「ことばの再発明」と聞いて想像していた難しさだった。要するに、身体レベルのコツのようなものなので、教えられてもすぐに習得できるわけではないと考えていたのだ。

それから、今回の講座では対話のプログラムも準備されていた。そこで聞いたもののひとつは、先ほどの作品を説明する〈ことばA〉だが、さらに別の種類の「ことば」があることにも気が付いた。それは主体が作者で対象も作者である「作者自身を語ることば」だった。便宜上これを〈ことばC〉としておく。この自己言及的な〈ことばC〉を聞くことは、作者の経験を共有する機会であり、それがまた作品の意味へと還元されて、結果的に〈ことばB〉を豊潤にするプロセスにもなっていた。

また対話のプログラムでは、制作する上での作者の悩みを講師が聞いて答えるケースが多く、それはカウンセリングに近かった。ここで講師が「作者に投げかけることば」も交わされた。主体は鑑賞者でもある講師で、対象は作品であり作者で、これを〈ことばD〉としてみる。作者は、わたしが投げかけた〈ことばD〉以外に、何人の講師の〈ことばD〉を聞いているのだから、なかなか経験量だったと思う。なにより〈ことばD〉を作者が聞くことは、先述の〈ことばA〉や〈ことばB〉にも大きな影響を与えたのではないだろうか。

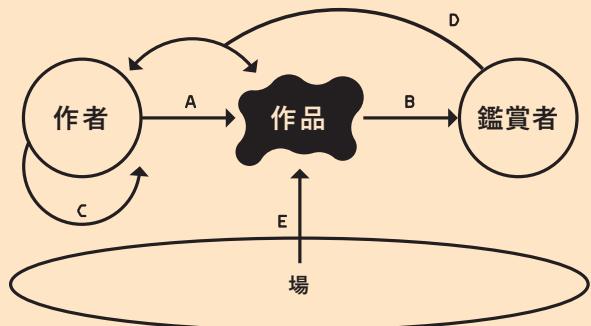
さらにもうひとつ、まったく想像も及ばなかつた〈ことばE〉にも出会うことになった。それは、この講座という「場」が作品に与える「これはアートだ」という宣言だ。〈ことばE〉は、作者が話すものでも、作品が語りかけるものでもない。その「場」に出展しているという事実によって、「場」が主体になり作品を対象にして、はじめて聞こえてくるものである。

「ことば」と同じくそれ以上に、アートも扱いづらいものだ。「これはアートだ」と言うことで、その作品のアート性が消えてしまうことがあるし、「これはアートだ」とあえて言わないことでアートに思えたりもする。その上「これはアートではない」と逆張りすることにさえ、わたしたちはすっかり飽きてしまっている。情報が増え続け

アーカイブされ続ける時代に、アートの重要な諸条件である「逸脱」は相当難しいことなのだ。

しかし、今回の講座で聞こえた〈ことばE〉は、計画してもできない「逸脱」を生む装置として機能したのではないだろうか。講座を受けることでアマチュアリズムのようなものは失われ、半ば自動的にインサイダーになってしまい、それでも強制的に期間内で作品を形にして「これはアートだ」と言ってしまうことで、偶然を生む可能性が出てくるのだと感じられた。

これまでの〈ことばA〉から〈ことばE〉を図解すると、こんな体系になる。



「ことばの再発明」とは、こうしたいくつもの「ことば」が折り重なる体系を「再発見」し、さまざまな「もの」の声、さまざまな「ことば」を聞いて、作品へと還元することだったのではないかと考えている。作品を制作するときには、誰かと対話した「ことば」がインスピレーションになるし、その対話があったから、作品の「ことば」が聞こえてきたりもする。今回の講座の意図は、それを計画して実行させることだったのではないかだろうか。

後世に残るのは、わたしたち自身ではなく、作品という「もの」であり、わたしたちの「ことば」の方である。この先も、作品や「ことば」が人に連鎖していく、別の誰かの新たな制作へとつながっていく。そのことを意識すれば、すでにあらゆる可能性は出尽くしていて、これ以上新しい価値が生まれることはないなどと、悲観しなくてもいいことに気づく。つまり、この講座を通じてさまざまな「ことば」を聞き、今回展示されたさまざまな作品に触れ、ここに書いたようなことを考えた結果、自分の心配は取り越し苦労だったと思い、とても安心したというわけなのだ。

熊野森人（コミュニケーションディレクター）

言葉で全て説明できるなら、絵も、彫刻も、音楽も、ダンスも、なんだって表現には意味がない。言葉で説明しきれないから、言葉以外の表現が存在するのだ。でも作品を見て、感じて、あなたの好きな解釈で記憶に刻んで！という半ば投げやりにも思えるコミュニケーションだと心許ない。そんな揺れ動く作家や表現者たちのニーズに寄り添う形で行われたのが、今回の「ことばの再発明」のコンセプトがありました。

言葉の組み合わせ 자체を表現手段とする作家もいるので一概には言えませんが、アーティスティックな閃きの瞬間や創作に没頭している時間は、言葉がない世界であると言えます。時制や時刻を告げる言葉もしくは記号がない世界であるので、それはすなわち時間の感覚がない世界とも言えます。表現を論理的にまとめればまとめるほど、言葉は時系列に丁寧に列をなし、作品の過去から未来を強制的にグリッディングしますが、その収まったどれもが言葉の意味の域を出ない制約付きの表現となることがしばしばです。

ということは、表現する者にとって言葉とは不自由な道具である確率が高く、また各々の表現手法と、その説明やアイデア、思想や哲学といった言葉が完全リンクすることは稀で、ほとんどの場合、言葉よりも抽象度が高い表現を言葉にコンバートする際に強制的にダウンコンバートが発生してしまい、低解像度な表現となって作家を苦しめるのだと思います。

言葉のボキャブラリーを増やすことや、表現手法を学ぶことで、ダウンコンバートの圧縮率を変化させることは可能でも、そもそも作家の中で、とびきり高解像度である作品の、言葉への100%劣化なしの変換は、言葉の表現がついてこれないので、とても困難であると推察されます。では、どのように自分の作品と言葉を共存させていけばいいのでしょうか。

ひとつの方法としては「客観視」を経ての「編集」があります。方法としては単純で「作家の自身とは別の視点で作品を捉えること」です。これには慣れるまでに多少の訓練が必要ですが、自身の目線（カメラ）の他に複数台のカメラを設置して、そのカメラから自身の作品を見てみることで、作品と言葉の共存が可能です。視点の話でいうと、例えば①じぶんの目線、②じぶんを俯瞰視した視点、③もっとじぶんを俯瞰視した視点、④（自分以外の相手を想像して）相手からじぶんを見た視点と4台のカメラがあった場合、①だけが主観的なカメラであり、②③④は客観的な視点のカメラとなります。①の主観的なカメラは、作品をつくっているカメラでもあるので熱量が高く、クールに自分の作品を批評したりなんてことはできません。ただ②③④は客観的な視点のカメラは慣れればそれができます。客観的カメラと自分の位置が遠ければ遠いほ

ど、感情も薄まっていくというように仮定して考えてみることで、かなり遠くから自身を捉えたカメラでは「あの人は、なんだかんだ悩みながらモノをつくるなんて物好きな人だなあ」くらいにはなります（笑）。

それらの客観的なカメラで、改めて自分の作品や活動自体を感じることができたとき、さきほどの①の視点である、作家視点での表現から言葉への難解な翻訳は、しなくていいことに気づくと思います。もしそれができたとしても、難解かつ抽象的な言葉の組み合わせとなり、結局その言葉に触れる人は「理解できない」もしくは「どう受け取っていいかわからない」となることが多いからです。それならば、最初から作家の気持ちや制作のプロセスにおける心情などとはリンクさせずに、出来上がった成果物や表向きに出ている（出している）情報だけで、それを語ればいい。僕はそう考えます。

心や頭の奥底の、もしくは漂っているものを瞬間的にキャッチして形作った、やわらかく、言葉にならない部分は無理に言葉にせず、それ以外の目に見えて、耳に聞こえて『理解』『共感』できる部分を掏ってまとめて見せること。すなわち、編集の作業が大事だということです。本を書くことよりも、本の帯を書くことの方が難しい時があります。本の帯の情報は端的にまとめたり、強い言葉で他者を惹きつけることを要求されるからなのですが、極端に言えば、自身の作品に帯をつけて、そのコピーを考えられるかどうかってことができれば、うまく創作と言葉の関係をつくることができるのではないかと思います。

近い将来、思いや発想を一度言語化せず、感覚をダイレクトに他者に転送できるテクノロジーが誕生するかもしれません。それができたら、僕も「はじめて●●したときの初々しい感覚」を追体験したいので、こどもから情報を転送してもらうかもしれません（いや、しかし受け側の経験値が高く、センサーが年齢と共に鈍っていると、子どもと同じような感動は得られないでしょう）それができるまでは、上手くない伝言ゲームのように、初っ端の言語化されていないものの情報量から言語化して情報を伝えていくプロセスにおいて、大事なものがポロポロポロこぼれ落ちていくことだと思います。ただ、だからこそこの表現であるとも言えるわけです。みんなにウケる表現だけがいいものではなく、たったひとりでも自分じゃない人と作品を通して深く繋がることができるならば、作家として大変な幸せを感じることでしょう。

そんな奇跡のような瞬間は、ものをつくっていたり、表現していたりすると必ず訪れます。心折れそうな時もあるかと思いますが、言葉とうまく付き合いながら、これからも素晴らしい作品をたくさんつくって、発表し続けてください。

作品制作を終えて

村瀬謙介（小取舎 代表）

講師との対話を経た講座のゴールが、ことばと自分との関係を作品に落とし込み、ギャラリーで発表するというもの。私の作品は対話中に思い浮かんだ。天井からぶら下がる人間の頭から文字が流れ出すというイメージ。受講コースが2期の「デザインとコミュニケーション」というテーマだったので、さらにもう一作品、作品を見に来てくれた方にも参加できるインスタレーションも作ろうと考えた。本のカバーとなるベースの用紙をデザインし、鑑賞者に本のタイトルと著者名を自由に書いていただく。そのカバーを白い本にセットして撮影してもらうというもの。鑑賞者が手を入れ、完成する。講座をきっかけに出版社を立ち上げる身として、本を作るという擬似体験をしてもらおうと思ったからだ。人は人生に1冊は本を出せると聞いたことがある。どんな人でもだ。さて、構想は出来た。具現化するにあたり、まずは材料の確保だ。そもそも芸術家ではないのでどのような素材がいいのかわからずこれまで遊びで使ったことのある紙粘土を使うことにした。頭部は100均で売っている頭部だけのマネキン。頭の部分を切り、理想の頭の形にするべく色付きの紙粘土をぺたぺたつける。流れ出す文字は「私は私の考えを未来を残す」にした。印刷したテキストを厚さ5mmほどのパネルに転写し、カッターでカットしていった。予想より時間が大幅にかかった。切り取った文字を糸に接着するがクルクル回る。糸を3本にするとやっと固定出来た。一連の作業がひと段落し、疲労感と充実感が心地よい。これまで蓄積していた思いや考え、思想などを、他者が目に見える物に作り替える。それを見た者は眼球を越え脳に伝達され、作者の想像を超えた物になる。ちょっとのお金とちょっととは言えない作業時間と試行錯誤する時間。苦労したことを伝えたいが、苦労は見せたくないという変な気持ちが混ざりあう、そんな作品制作であった。

part.3

フォーラム

「鳥取で出会う表現とことば」

～「ことばの再発明」成果発表企画



フォーラム「鳥取で出会う表現とことば」 ～「ことばの再発明」成果発表企画

2020.11.30

フォーラム①

ゲスト講師：波田野州平

参加受講生：exkeee、にゃろめけりー、もりさと

2020.12.14

フォーラム②

ゲスト講師：吉田恭大

参加受講生：磯崎つばさ、中村友紀

ナカヤマサオリ、水田美世

2021.1.20

フォーラム③

ゲスト講師：ひやまちさと

参加受講生：井澤大介、奥井彩音、にゃろめけりー



本講座では、自分の言葉を「語る」だけでなく、他者の言葉を「聴く」ことも大切にしている。そこで、9月の成果発表展に続くもう一つの「成果発表」の場として、受講生自らが企画・司会・進行をつとめるフォーラムを開催した。ゲスト講師には鳥取県出身の芸術文化活動者3名を招聘。受講生はこれまでの講座での対話の経験を活かし、「鳥取を経て／踏まえて活動すること」を切り口とした議論を行った。

フォーラムゲスト講師



波田野州平

映画作家



吉田恭大

歌人／舞台制作者



ひやまちさと

イラストレーター

フォーラム

「鳥取で出会う表現ことば」

①

波田野州平(はたの・しゅうへい)

映画作家

1980年鳥取生まれ、東京在住。初長編映画『TRAIL』(2012)が劇場公開される。『影の由来』(2017)が東京ドキュメンタリー映画祭短編グランプリ受賞。『断層紀』(2013-2018)、『旅のあとの記録』(2018)が東京ドキュメンタリー映画祭入選。2017年より記録集団・現時点プロジェクトを始め、鳥取の高齢者の個人的体験の語りを映像で記録する『私はおぼえている』などを行っている。



連続講座「ことばの再発明」の成果発表の一環として、受講生が鳥取県出身の芸術文化活動者と「表現ことば」について対話をを行うフォーラムの第1回目が開かれた。ゲストは映画作家の波田野州平さん。今回は受講者のうち exkeeee さん、にやろめけりーさん、もりさとさんがオンラインで対話を行った。

波田野さんは鳥取県倉吉市出身で、大学進学を機に上京。以後東京を拠点として映像作品の制作を行っている。また 2016 年までは東京都立川市で「gallery SEPTIMA」というスペースを運営、現在は鳥取の仲間と「現時点プロジェクト」を行うなど、映像以外にも多岐にわたる活動を展開している。最初は波田野さんが、自身の映画に関する姿勢を紐解くことで自己紹介を行なった。映画作家としての自己紹介には、いつも難しさが付きまとったという。以前親戚の集まる法事の場で自身の叔父からどんな映画を撮っているのか問われ、答えに窮することがあった。「叔父は映像制作の世界とは遠い人間だが、彼のような人のいない場所で映画を作るのかと問う声が聞こえ、その問い合わせずっと考え続けてきた」という。最近の映像作品『私はおぼえている』の連作（現時点プロジェクト）は、そのような人たちに向けてカメラを回し、正面から向き合おうとしたものだ。

『私はおぼえている』は、鳥取県に住む 80 ~ 90 歳の人たちの人生をただただ聞き、場所や風景を含めて一人 20 分の映像にまとめている。この作品のきっかけとなったのも、祖父の法事の席だった。「列席者から自分の知らない祖父について話を聞き、自身の知る祖父は、自分の知らない時間を使ってあの祖父にたどりついたのだと感じた。一人の人間の生涯が厚みをもって立ち上がりてくるのを感じ、その感覚をもっと味わいたいと思った」という。インターネットの延長では会えない人たちのもとへ時間をかけ足を運ぶと、戦争中本当に腹が減ったという戦争体験の言葉に返す言葉

がなかった。「あなたにはわからんと思うけど」と言わると、自分の小ささ、世界の奥行きを感じ、それが嬉しい。「そう言われて線引きされた部分を、映像制作の中でどうやって受け止め向き合っていくか」、それが自身の課題だと波田野さんは話した。

この後、講座受講者の3人を交えた対話が始まった。まずにやろめけりーさんが、波田野さんの作品によく登場する鳥取に対して、どういう思いがあるか質問した。にやろめけりーさんは沖縄で生まれ育ったが、故郷の文化が無意識のうちに作るものに影響していることを、周囲から指摘されて気づいたという。その経験が、質問の背景にはあったのかもしれない。波田野さんは、鳥取に根を張っている意識はなく、むしろその成り立ちを含めた場所というもの全般に興味があり、「風景の中にいろいろな層になって流れている時間が見える映像、いまここにある風景がずっと前からそこにあったと感じるようなこと」にカメラを向けているという。鳥取に限らず「この土地と最後まで付き合った」という場所があるといふと思うと答えた。沖縄と比べて鳥取には独特な風景があるかとのもりさとさんの問い合わせには、鳥取空港から倉吉までの車内で見える山陰の冬枯れの景色は、鳥取に特徴的だと思うと答えた。またexkeeeeさんは、自身の創作と場所との関係について、「絵はすごい自由で、どこへでも行けちゃう、何をしてても感動しないけど、絵を描いていると、自分にこんな感情があったんだと思う」と発言していた。

そのexkeeeeさんは、新しいオリジナルなかっこよさを作り発信することについて波田野さんはどう思うか質問した。exkeeeeさんはカート・コバーンの大ファンで、かつてカートになりたいと思い、彼が着ていたヴィンテージの服やスニーカーを全部揃えて着たことがあった。しかしその姿を鏡に映したとき、「自分は死んだんだ」と思った。そこから、新しい「かっこいい」を作りたいと思ったという。これに対し波田野さんは、「exkeeeeさんがカートになってそう思ったのは、自分にとってのリアリティがなかったということで、自分の中のリアリティとオリジナリティは近いところにあると思う」と答えた。波田野さんはかっこよさより、映画を撮ることで撮る前に

知らなかつたことと出会い、撮る前の自分が更新されることを求めていると答え、ただ「映画を撮る中で、自分の価値観ではダサいと思うけれど、そのリミッターを外して飛び込んでいかないと先にあるものにたどり着けないと思うことがある」と語った。

もりさとさんは、自身が運営するメディアで情報を伝える手段に迷った経験から、表現媒体として映像を選んだことには狙いがあったのかと尋ねた。波田野さんは、「自分にとって映画を作ることは目的そのもので、他の何かのための手段ではないし、映像という方法を意識して選択したわけでもない」「作りながら作品自体が動き出すようなものを求めているし、そのときには出来上がっていいくものの動きに寄り添い、見る側のことは考えていない」と答えた。また「映画や映像は、自分にとってはうまくできないもので、だから続けていて、それらを通して社会に触れ、また見ることや時間、記憶といったものを考えることができる」とも話した。

視聴者からの質疑応答の場面では、自身の作品を公に開くことにどのような態度をもっているかという質問があった。これに対し『自己肯定感』というZINEを発行しているにやろめけりーさんは、作品の宛先は自分自身でもあり、発表には不安や怖さもあつたが、自分と同じ悩みを抱える人にも届いたらいいという気持ちで作っていて、そのために届けたい人に届くよう値段設定を考えていると話した。波田野さんは、値段設定のことはあまり考えていないが、「『私はおぼえている』は、土に還すみたいに鳥取に返したいと思っている」と話し、作品の捉え方として印象的だと感じた。

会の進行はにやろめけりーさんがつとめ、互いに創作者として対等に議論したいとゲストに伝えたり、各受講生の質問がとても自然な流れで発されたりと、事前の打ち合わせも含め、綿密に練られた対話の時間となっていた。それぞれ創作を志す受講者が、作家としての波田野さんの胸を借り、あるいは波田野州平という「場」の上で、それぞれの思いや考えを熱く交わし合うような、そんな時間になっているようを感じた。

(文・nashinoki)

フォーラム

「鳥取で出会う表現ことば」

(2)



連続講座「ことばの再発明」の成果発表の一環として、受講生が鳥取県出身の芸術文化活動者と「表現とことば」について対話をを行うフォーラムの第2回目が行われた。ゲスト講師は歌人の吉田恭大さん。今回は受講生のうち磯崎つばささん、中村友紀さん、ナカヤマサオリさん、水田美世さんが対話を行った。吉田さんは現在東京都在住、吉祥寺シアターで舞台制作の仕事に携わりながら、歌人として活動している。

前半はゲストが「作品と場」に焦点を当て、自身が短歌と演劇の分野で関わる様々な場の紹介を行った。まず短歌については、吉田さんは以前から文学フリマなど様々な場で発表を行っており、2019年に「いぬのせなか座」から歌集『光と私語』を刊行。また、自分で歌を作り発表するだけでなく、公民館を利用した「北赤羽歌会」、奈良の町家を使った芸術祭「はならあと」でのスマートフォンを使いその場で歌を詠むワークショップ、ウェブサイトと実際の書店の棚を連動させた「うたとポルスカ」など、短歌を楽しむための様々な場を開く活動もしている。演劇については、劇団「アムリタ」などの企画へドラマトゥルクとして参加し、また、勤務先の吉祥寺シアターでは、劇場を使って何ができるのかというコンセプトで様々な企画を行っている。

吉田恭大 (よしだ・やすひろ)

歌人／舞台制作者

1989年鳥取市生まれ。早稲田大学文学部演劇映像コース卒。2019年いぬのせなか座より歌集『光と私語』を刊行。現在は吉祥寺の劇場に制作として勤務する傍ら、北赤羽で『北赤羽歌会』、下北沢で詩歌の一箱書店『うたとポルスカ』等の企画・運営に携わる。2020年より結社誌『塔』の短歌時評、日本海テレビ「いっちゃん歌会」選者。

講師の自己紹介の後は対話に移り、水田さんの進行で場が進んでいく。最初質問したのは、自身短歌を作っている磯崎さんと、演劇を実践するなかで言葉に関心をもつ中村さん。「なぜ戯曲ではなく、短歌なのか」というテーマに基づき、短歌と演劇の違いについて対話を行った。吉田さんは、自分の中に伝えたいことがそんなにたくさんあるわけではなく、短歌は三十一文字という制限があってそれをクリアすれば形になっていくので、そのあり方が戯曲よりも性に合っているのだと思うと答えた。磯崎さんは短歌の楽しみ方について、歌会で自分の意図と全くちがった解釈をされると楽しい

と述べ、吉田さんも「言葉の素材を提供した後の『調理方法』はお任せで、自分が読む場合も、なるべく作品を面白がるようにしている」と答えた。また中村さんは、『光と私語』のデザインを全て自分でコントロールせず、装丁についてはプロに任せるやり方は、短歌の楽しみ方と似ていると発言した。吉田さんが最後に、短歌でも演劇を依頼して制作するときでも「読んで（観て）もらうことが一番楽しい」と答えたのが印象的だった。

自身も短歌を含めた様々な文章を書くナカヤマさんは、「ことばを書く姿勢と、ことばの届け方」について質問した。吉田さんの言葉はどこに向けて発されているのかという問い合わせに対し、「『光と私語』あたりから、誰に向けてという対象を設定しないようにしている、作者としての『私』像を立ち上げたくない」と吉田さんは答えた。その理由として、自らの出自や人生などを表現し、はっきりとした目的をもって書く作家に対し、自分にはそういうものもなく、だから「誰にでも通るような声」で、共感できるかできないかの匿名性の高いラインを模索していると説明した。また『光と私語』のデザインの新しさや一部無料公開など発表方法をこだわった理由を尋ねられると、作家としての知名度もなかったため、「海のものとも山のものともわからないものを道端に置いて拾ってもらえるといい」と思ったと答えていた。

最後にウェブメディア「totto」を運営する水田さんが、「ご自身をかたち作ってきたもの」というタイトルで対話を行った。水田さんは、『光と私語』ではツタヤの延滞料金について詠んだ歌など、匿名性をもたせつつも作者の周りにいる人の気配をやんわりと感じるが、鳥取を含め周囲の歌人や演劇人からの影響はあるのかと尋ねた。吉田さんはまず鳥取について、歌会「みずたまり」や演劇と出会った「鳥の劇場」、また定有堂書店など、中高時代鳥取には教えてくれる大人がたくさんいて、その人たちから「当たり」の付け方、興味のある方向に対してどういう掘り下げ方をしたらいいのかを教えてもらったことが財産になっていると述べた。また作中の他者については、「きっかけになった具体的な出来事はあるが、歌の中ではそれが誰のものであったかは代替可能であった

方が居心地がよいと考えていて、人間の『かけがえのなさ』を代替可能にすることで、体験や行為の『かけがえのなさ』を表現したい」と答えていた。その背景に「人間そのものより、人間がはめ込まれているシステムの方が素敵なものだと思っている」考えがあると話した。さらに鳥取の駅名に言及した歌から、自身の中での鳥取の位置づけについて尋ねられると、知っている土地以外は頑張らないと情景を作れないが、鳥取は住んでいた場所なので無理なく情景を詠める。負荷をかけない、「頑張っている感じ」が出ないことが重要と答え、ナカヤマさんの質問に続けて、ゲストの言葉を書く姿勢について、さらに掘り下げられたやりとりとなった。

また水田さんは、自身の運営する「totto」など、自分が面白いと思うものを他者と共有する場作りの魅力について、吉田さんにも近いものを感じると言い、自分だけでなく他の人に委ねていくのは新しい素敵なものだと思うと伝えた。吉田さん自身、もともと発信するより鑑賞する方が好きで、よりよい鑑賞の仕方を考える中で劇場や歌会に入っていたという。自分が面白い、いいという作品に出会える場を作りたいから歌会などをやっているが、「そのためにはいろいろなものを面白がれるようになっていないといけないので、いろいろな人とやっていくことが大事」「なるべく自分の価値観とちがう人間と一緒にいられるよう、趣味の合わない友人をたくさん持つておくようしている」と答えていた。

最後の視聴者からの質疑では吉田さんだけでなく、磯崎さんや、お子さんと一緒に出演していた水田さんにも視聴者から質問があがった。第2回目となる今回は、それぞれ言葉で切実な表現を行う受講者が、吉田さんの歌や演劇に対する姿勢を手がかりに問い合わせ、どちらかといえば個人的な経緯などを排した、純粋な創作についての対話が行われているように思えた。そこには個性より他者が共感可能な匿名性を志向する、吉田さんの表現への姿勢も関係していたかもしれない。このフォーラムで提示された、表現や場を開くことへの新たな姿勢が今後どのような世界を開いていくのか、楽しみに思った。

(文・nashinoki)

フォーラム「鳥取で出会う表現ことば」

(3)

ひやまちさと

イラストレーター

1988年鳥取県出身。イラストレーションや版画の制作、デザインなどを生業にしつつ、2019年若桜町にギャラリーカフェふくをオープン。鹿野芸術祭実行委員会では、ディレクションを担当する。



連続講座「ことばの再発明」の成果発表の一環として、受講生が鳥取県出身の芸術文化活動者と「表現ことば」について対話をを行うフォーラムの第3回目が行われた。ゲストはイラストレーターで鹿野芸術祭のディレクターも務めるひやまちさとさん。今回は受講者のうち井澤大介さん、奥井彩音さん、にやろめけりーさんが対話を行った。

当日、ひやま家では別室でカルタ大会が開かれており、画面の向こうに賑やかな雰囲気を感じながら、まずひやまさんの自己紹介を聞いた。ひやまさんは1988年生まれ、3歳から18歳まで鳥取県鹿野町で過ごし、高校卒業後関西に出て大阪で長く暮らし、3年前に鳥取県若桜町に移住した。ひやまさんの活動には大きくわけて三つの柱がある。まずイラストレーション、デザイン、作家としての創作などの制作を行う仕事。最近は鹿野のパン屋「一心庵」の仕事のようにライター、カメラマンと組んで、イラストも含めたディレクションを行う仕事も増えているという。また作家としてリトグラフの版画作品を作り、個展も行なっている。

二つ目に鹿野芸術祭の企画・運営がある。2016年からはじまった鹿野芸術祭に、当初は地元に関わりのあるアーティストとして、2018年からは企画側として参加している。企画として関わった3年目からはチームとしての運営体制になり、鹿野で展示することに意味のある作品を求め、アーティスト・イン・レジデンス（以下AIR）の要素が加わった。4年目には芸術祭の開催が楽しくなってきたが、5回目の昨年は新型コロナウイルスの影響により方針の変更を余儀なくされた。そのため2020年は、2名の作家の活動を印刷物とウェブで紹介する形となった。三つ目の軸としてあるのが、ひやまさんが若桜町にオープンした「ギャラリーカフェふく」の運営だ。店を開いたのは、若桜に引っ越したとき、この町と仲良くなるには自分を開くことが一番だと思ったからだという。ゆっくりしてもらいたいとカフェも営業しているが、貸しギャラリーではなく自身による企画展だけを行い、重点はギャラリーにある。もともとうどん屋だった建物で、移住を決めたのはこの建物がよかったからという理由も大きい。AIRも行き、今年もPCR検査を受けた2名の参加を予定している（当初予定されていたAIRは、新型コロナウイルス感染症の影響により、延期となっている。〈2021年2月12日時点〉）。

フォーラムでは井澤さんが司会を務め、まずにやろめけりーさんが質問を行った。ひやまさんは多岐にわたる活動をしているが、どれか一つに軸があるのか、それ

ともどれも等しく力を入れているのか、また、まだ他に披露していないアイデアがあるのかと尋ねた。ひやまさんは「どれも同じくらい全力でやっていて、自分にとっては全部生活の一部」「たくさんのプロジェクトをやることはいろいろな人に支えられることもあるが、こうなつたら楽しいだろうな、これを他の人と一緒にやつたら楽しいだろうなと思うと、スイッチが入っちゃう」と答えた。このような活動はひやまさんにとって、「わたしをかたちづくる」ことだという。これまでひやまさんには、自分自身が崩されるような出来事が何度もあった。痴漢やレイプのようなことも遠い出来事ではないし、結婚して名字を変えることや、自分のお腹を切って小さな命を出す出産もそのような経験だった。その度に自分を立ち上げ、かたちづくるということを繰り返してきた。女性として生きていくことが、自身の大きなテーマとしてあるとひやまさんは言う。にやろめけリーさんも、以前同じような経験があり、それをもとにZINEを作ってきた。しかしそれがモノを作ることにつながっていて、「わたしも人生の目標はわたしになること」とひやまさんに応じた。負の側面だけでなく、そのような出来事があることによって自分を再び作ることができ、変えていける。「いつ、どこにいてもひやまちさとだということをかたちづくっている最中」というひやまさんの言葉が印象に残った。

続いて奥井さんは、ひやまさんが若桜や鹿野でアートに関わる活動を行うことで起こった変化について質問した。ひやまさんが育った鹿野町には、古くから町民ミュージカルがあり、「鳥の劇場」の活動や空き家を用いた街づくりもあって、アートと日常との距離が近かった。それに対し若桜町は、自然との共生環境が厳しいことから、木地師や石工、獵師など自然と関わる文化が豊かで、野性味や「手つかず」の感じるという。「ふくではできるだけ生活の中に溶け込んでいくような作品を、長い時間軸で取り上げていきたい。みなさんここにすごく恐る恐る来てくれて、それが嬉しい」とひやまさんは答えた。奥井さんの質問の背景には、移住した智頭町での経験があった。東京で美術系の高校を卒業した奥井さんは、鳥取でデザインの仕事を頼まれたが、相手とのデザインに関する感覚のちがいに驚くことがあり、地域とアートとの関係を考えることがあったという。自分は移住した智頭がとても好きなので、何らかの形で、ひやまさんのように芸術に関する自分の感覚を発信できたらいいと思っていると奥井さんは話した。ひやまさんは、「フリーで仕事をしているといろいろなことがあるので、デザインというよりどれだけコミュニケーションを取るかが重要だと思う。自分のデザインには自信を持つつ、でも変えてほしいと言われることには何か理由があるはずなので、それを汲み取れるようになったらいいですね」と具体的なアドバイスも行なった。

幼い頃集団行動が苦手だったという井澤さんは、ひやまさんと同じく図書館や習い事の教室など、鳥取の様々な

「サードプレイス」に助けられ、そこで生き方や表現に対する大きな影響を受けてきた。「深夜の美術展 in 鳥取」など鳥取で様々な企画を行う井澤さんは、ひやまさんの活動と鳥取という場所の関係について質問した。ひやまさんが高校を卒業し関西に出たのは家族に勧められたからだったが、ずっと鳥取に帰りたいと思っていたという。その背景には、高校時代の演劇経験があった。鳥の劇場が活動を始める前、主催の中島諒人さんが演出する舞台に参加したことがあった。いろいろな世代の人がいたが、そのとき中島さんから「高校生だろうが60代だろうが芝居に対して命をかける気持ちでここにいないのはだめだ」と真剣に怒られたことがあったという。「大人が表現することに対し全力で向き合ってくれたことで、何かが入れ替わった感じがした。あのときがなかったら、今こうやって絵を描いている自分もいない。こんなすごい人が東京じゃなくて鳥取にいるんだから、自分も帰らなければと思っていた」。鳥取の表現者が与えた、ひやまさんへの影響の大きさを感じた。

質疑応答の時間には、鳥取出身で現在東京に住み働きながら小説を書いているという男性が画面に登場し、創作することへの態度について質問した。ひやまさんは「版画など自身の作品を作るとき、自分の気持ちがどれだけそこに乗っているか、作品の表面の背後に自分がどれくらいいるかを考えている」と助言し、男性にもその言葉が響いたようだった。

この日ひやまさんの映る画面の中には、時折お子さんの姿ものぞき、前回のフォーラムとは対照的に、生活中における表現ということを考える様々な話題が上がっていった。

ひやまさんの話を聞いていると、ひやまさんが育ってきた町や人々、いま住んでいる土地、一緒に暮らしている家族、これから作ろうとしている世界、そういった風景が目の前に立ち上がっててくるようで、しかもそこへ受講生それぞれの世界が少しづつ重なっていくような透明性を感じた。ひやまさんが生きている世界は、わたしたちそれぞれがいる場所もある。そんなある意味当たり前の、しかしあまり改めて意識することのない感覚を、この対話から筆者は感じた。それはひやまさんが、限られた時間の中でも、目の前にいる人たちとともに、同じ一つの世界を作り上げようとする姿勢をもつ作家だからなのかもしれない。

その時間はまた、この鳥取という場所の今がどのようなものであるかを、浮かび上がらせるようでもあった。そのような対話が生まれたことには、受講生がやわらかでまっすぐな姿勢で、ひやまさんに向かっていたことも関係していたように思う。このフォーラムから開けていく世界がどのようなものになるのか、楽しみに思う。

(文・nashinoki)

ことばの再発明

—作品と言葉の関係について考えてみる—

田中ちえこ（新宿眼科画廊ディレクター）

駆け出しのアーティストの悩みは尽きない。
 「売れっ子になりたい。でも作品を手放したくない」
 「やりたい事がありすぎて作品の方向性が定まらない」
 「どうやったら大勢の人に見てもらえるのか」
 などなど。
 プレゼンテーションやステートメントの作成については
 「何かを説明するのが苦手だから作品で表現しているのに、どうしてそれを言葉にしなければならないのか？」
 などと、頭を抱えるアーティストは多いようだ。
 確かにそうだと思う。
 作品を観て、感じて、考えてほしい。説明なしでもわかってほしい。
 仕事を抜きにして、一人の鑑賞者として作品と対峙する場合、作品の前情報は確認しないまま、自分なりの解釈で作品を鑑賞する事は、アートの一つの楽しみ方だと思う。
 しかし深く作品を理解する為には作者の意図を知りたくなってくる。
 自分はこの作品を観てこう思ったけど、実際はどうなのだろう？
 考えているうちに作者がどういう人物なのかも気になってくる。

私が運営しているギャラリーは他のギャラリーとはちょっと違っていて
 アートに触れ合った事の無い人も沢山やってくる。
 そうすると、こういう質問を受ける事がある。
 「今回はどういう展示ですか？」
 あまりにざっくりとした質問なので、それを言われるといつも面食らってしまうが、質問をした当人からすると、日常生活にアートなんて無くて、展示自体が何の事なのかわからないわけで、意を決してギャラリーの扉を開けたは良いが、果たしてどうやって観れば良いのかもわからず、しかし折角来たからにはこのままでは帰れない、と、やっとの事で出てきた質問がそれなのだと思う。
 しかし、こちらとしては「さて、何から説明しよう？」と考え込んでしまう。
 そういう時は何だか逆に試されているような気持になってきて、
 「どういう風に話したらこの人がアートに興味を持ってくれるかな？」
 「またギャラリーに来たい、と思うようなきっかけを作りたい」と考える。
 作者の制作意図云々以前の、もっと入り口。ここで躊躇はいけない。
 作品を観て感じる、考える事の面白さ、というのは一般的な感覚からすると結構ハードルが高いのかも知れない。

私がアートに興味を持って勉強し始めてから今に至るまで 25 年。

沢山の作品、アーティストと出会い、対話をしてきた。

出会いは尽きる事なく、日々新しい作品やアーティストに出会っている。

常に驚きや感動があり、永遠に飽きる事はなさそうだ。

しかし私はアートに興味があるのか、人に興味があるのか、どちらなのだろうか、と時々思う。

作品と作家本人は切り離せない。

作品を観ると、「この作品はどういう人が作っているのかな?」と考えるし、

「この人は何故この作品を作ろうと思ったのだろう」と、制作に至った経緯やその人の思想を知りたくなる。

また、先に作者と会ってから作品を観る場合は「この人がこんな作品を作っているのか」と驚く時もある。

意外な時もあれば、納得できる時もある。

作品は作者そのものだ。

作品のコンセプトや制作のプロセスについて話を聞くこともとても興味深いけれど、

加えて、作者自身の興味の対象や嗜好を知り、日常的な他愛もない会話を重ねる事で、作品への理解が深まってゆく。

これは非常に個人的な話ではあるが、私は四六時中アートの話をしている人が苦手だ。

「アートの事だけ考えています」みたいな人よりも、もっと色んな事に興味を持っていて、自分の言葉で話す事のできる人の方が豊かだし、そういう人の作品の方に強度（必然性）があると感じる事が多い。

一方、作品を観ていて、こう思う時がある。

「この作品、無理があるな」

無理、というのは、作家が自分自身に対して無理をしているという意味。

もっと言ってしまうと、自分自身に嘘をついて作った作品。

生み出す必要のない作品。

多分、作者自身も自らを騙して生み出したであろう作品を観るとそう思う。

そういった作品に魅力は感じないが、しかしそれは作家自身に必要な場合もある。

所謂〔スランプ〕というのもその一種かも知れない。

その嘘を自分についた事で、より真剣に自分自身と向き合い、次のステップに進めるきっかけになる事もある。

勿論、ある一定期間その事で悩む事になるかも知れないが、それは、その後の作品を生み出す中でとても重要な時期になると思う。

作品を生み出す事、説明する事、言葉にするという事。

それらをあまり難しく考えなくても良いと思う。

無理に言語化するのではなく、自分自身が何を考え、どう感じ、それをどう表現したいのか、
ということを、

日常の会話と同等に発することから始めてゆけば、いつかそれが当たり前みたいに作品と一緒にになってゆくと思う。

嘘のない作品、嘘のない言葉。

説明する為の言葉ではなく、作者自身が作品に対して思っている事、考えている事。

作品と、言葉と、自分自身と向き合う事で、それが自然と形になってくるのではないか。

無理に自分や作品を良く見せようとするのではなく、作家自身から出てくる言葉を聞きたい。

言葉はその都度、発明されるもの

篠田栞（企画・編集／仮面劇作家）

夏に開催された講座からはや時間も過ぎ去り、今年も終わろうとしている。「ことばの再発明」に講師として参加させていただいて、言葉についての定義がそもそも人によって全く異なること自体の豊かさを感じた。各参加者同士、活動や人生を通じた言葉論を交換していく中で、ことばの書き方みたいなことよりもっと大切な、人が人に「伝える理由」のようなものを考えた気がした。

例の感染症により、直接展示会場には伺えず映像などでその様子を拝見して終わってしまったことが心残りではあるが、出来上がった展示作品を遠隔で拝見しながら、「作者の言葉との距離感や関係性を示すような具体的な展示物」を通じて、観覧者自身が自らのそれについて具体的に考える時間が流れる場がギャラリーに出来上がっていたのだろうなと想像する。

さて、この数ヶ月の自分は、フリーランスのライターとしての活動を続けながら、舞台芸術へのアクセシビリティを高めるための仕事に関わっている。「THEATRE for ALL」という取り組みで、障害のある人や日本語を母国語としない人などこれまで劇場にアクセスしづらかったひとたちにも、映画や舞台、メディアアートなどの作品を楽しんでもらおうというコンセプトのオンラインシアターを立ち上げるプロジェクトである。

この仕事を通して、様々な“当事者”と呼ばれる方にインタビューをする中で、また改めて「言葉」ってなんだろう？「伝える」ってなんだろう？と考えはじめている。

これまで劇場に行けなかった人たち、行かなかった人たち。その理由は様々である。視覚や聴覚に障害のある人たちは、音声ガイドや手話通訳、字幕などのサポートを必要とするし、精神障害、発達障害などを持つ人の中には、長時間劇場に座っているということがしんどくなってしまう人もいる。障害を持っていなくても、そもそも、舞台芸術に触れる機会がなく育ってきた人にとっては、舞台を見るということ自体に馴染みがない人もいるし、機会がなかった理由も、環境、経済など様々な理由がある。

様々な理由に対して、情報保障（例えば、手話通訳、字幕、音声ガイド、多言語翻訳）を施して、アクセス可能にしていくための仕組みを作るのが今の私の仕事である。情報保障を考えていく中に、言葉に関わる様々な視点が含まれる。

障害当事者と呼ばれる人たちの中には、内側には言葉をもっているけれどそれ

を上手く発話できない人もいる。触ることや手のサインを通じて会話をする人もいる。様々な身体、様々なコミュニケーションの工夫が存在する。例えば、手話はとても繊細でエネルギッシュな言語だし、手話を第一言語とする人ばかりの中に自分一人がいるとき、私はマイノリティとなる。

以前、障害のある人たちと一緒に踊るというダンスのプログラムに参加したことがある。知的、精神、発達、身体の障害を持つ人たちと一緒に踊る場で、最初にファシリテーターから言われたことは「動き出していいところになるまで、動き出さないこと」。動き出していいかどうか、というのは場の空気。他者の呼吸が聞こえ、なんとなく息があって、自然と音がなり始め、踊りがはじまった。言葉を介して相談して動く、ということがその場では通用しない。目を合わせて、なんとなく触れ合い、一緒に動いてみる。ぎこちなさからはじまって、だんだん場が馴染んでゆく。

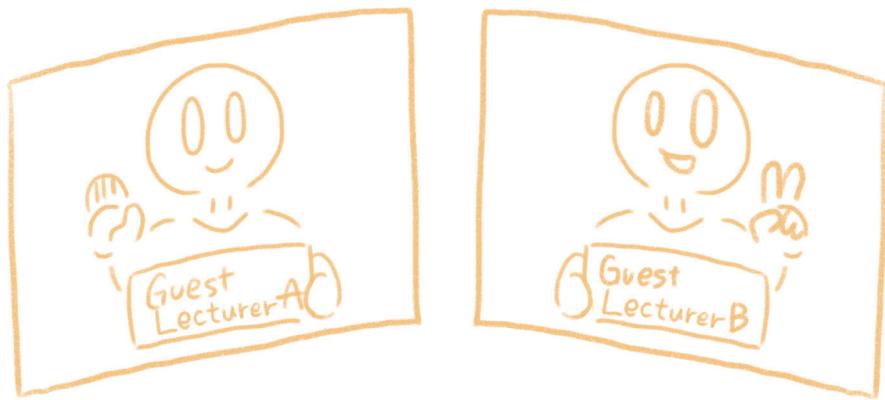
- 私とは違う身体を持つ他人とどうやってコミュニケーションしようか？
- 今の気持ちをどうやって伝えようか？

ずっとそればかり考える時間。「私が知っている言葉だけが言葉ではないのだな」と思った。バリアフリーというと、いわゆる健常者側の状態に対しての障害を持っている人たちのバリアを取り除いていくという感覚が強くなってしまう部分は否めない。それが必要な時もあるけれど、まず立ち戻るべきは、「異なる他者同士がどうやってこの場を共有しようか？」ということである気がする。

異なる価値観、異なる文化、異なる環境、異なる身体をもつ他者同士が、どうすれば同じ場にいられるのか？人間同士が一緒に生きていくためには、毎回、そこからスタートし、言葉を発明しつづける必要がある。

そう考えれば、言葉を選択するということは、誰とコミュニケーションしたいのかを考えることもあるかもしれない。「伝えたいが言葉は苦手だ」などと考えるとき、一体、誰にどうして自分のことをわかってほしいのか、ということから始めないと、実態のない「文章の上手い下手」というものに苦しめられることになる。

そんな虚に苦しめられないようにするために、書き手には、自分と外部を関係づける力につけることが必要なのだろうと思う。目の前の人にとって自分が誰なのか、今向き合う出来事に対して自分の人生や価値観と照らしてみたときに、どのような共感や違和感を覚えるのかを確認すること。つまり、書き手として以前に、人間としての当事者性というもののな気がする。自分と外部を関係づける力が問い合わせを生み出し、言葉を引き出してくれる。その先でアウトプットされるものが、文字であれ、絵であれ、場づくりであれ、音楽であれ。表現されたものを通じてやりとりしていく中で生じた違和感や共感をきっかけに、言葉はその都度、発明されていく。



Online Guest Talk

ことばの再発明

– 鳥取で「つくる」人のためのセルフマネジメント講座 –



Result Presentation

Gallery Exhibition



Lecture &

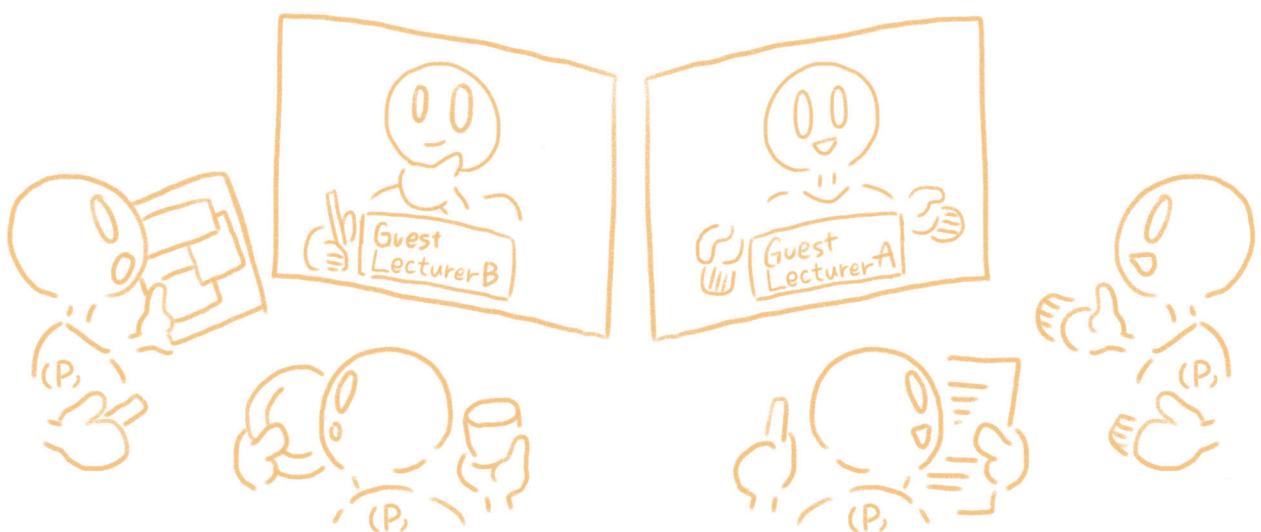


Workshop



を 終えて

Dialogue Time



「ことばの再発明」を終えて

ナカヤマサオリ（助産師／執筆業）

「ことば使いになりたい」。そう唱え始めてどれぐらい経つだろう。寺山修司さんが志したと本で読み、以来ずっと憧れている。

今回「ことばの再発明」を受講し、私はことばというものを自分の興味関心に偏って解釈していたことに気づく。ことばは私が思っていたよりももっと何層にも分かれていて、角度によって全く違った温度を持つ。

様々な領域でことばを生業とする講師陣達と、見上げるではなく肩を並べて対話していく中で、自分は一体どういうことばと付き合っていきたいかと何度も考えた。そして私は、自分自身が丸裸になり曖昧な部分を見つめてことばにすることを選んだ。意図やたくらみのないことばで。

フォーラムで映像作家の波田野州平さんが「映画を作ることは、手段ではなく目的そのものだ」と言うのを聞き、私にとってのことばも目的なのかもしれない感じた。使いこなすというよりは、生まれるもの。

ここまで考えて、ことば自体はもしかしたらもっとずっとシンプルなのかもしれないと気づく。そこに思いや解釈や意義が何重にも重なって、層や温度が生まれる。

今もこうして、一人ことばの再発明は続いている。

コラム・表現のことば

Lecturer's Column

白井明大（詩人）

ことばで何か自分自身を表わすとき、たくさんのエネルギーが必要とされるよう思います。継続的に言語表現を行なっていこうというのなら、なおさらです。

受講生十二名の皆さんには、個別の講評に代えて〈あることばと、偶然に出会うことで、自分にとっての意味を見い出せることもある〉という、ぼくが経験的に信じている仮説に則って、十二のことばを用意しました。それらをランダムに振り分けて、一人一人に送ります。出会い頭の偶然を楽しみながら読んでいただけたら幸いです。

言語による自己表現にかぎらないと思うのですが、言語表現、自己表現、ひいては、ことばに関わる仕事を続けていると、傷つきボロボロになることもあります。そんなときどうすればいいのか、ぼくにもわかりません。ただ、こうしたことをもし大事にできたら、あるいは何らかの一助になるのではないか、と思われことがあります。それを「内なる火」と仮に呼んでみますが、自身の内にあかあかと燃える熾火のようなものだとイメージしてください。てのひらにのるほどの、小さな炭火でかまわないと思います。消えてしまうこともあるかもしれません。それならそれで、また火を熾せば済むことです。

これは、何かをし続けなければならないという話ではなく、何かをし（続け）ているときに、自分自身を励ましてくれるものは何だろうか、という問いです。「内なる火」を主題として、こうした詩を書きました。どうかこの詩を皆さんに贈らせてください。

この講座で皆さんとご一緒できたひとときは、ぼくにとって有意義な時間でした。皆さんとともにことばについて考えることを通じて、ことばへの信を置くことについて、ぼくの中に何かあたたかな経験を残してくれました。それは紛れもなく、皆さんから伝わってきたことばに向けられた関心や熱意のおかげです。心より感謝申し上げます。

内なる火 白井明大

自分を空にすることを
後回しにして
切れそうな糸の端を握りしめる人のもとにはばかり
どんな仕組みのせいなのか
プラ容器が吹きだまっていく町に暮らして

もういちど
焚き木を集めてくるところから
どこに自分の森があるのかを
思い出し あるいは気づき直すつかの間から
こころの地面に
足をつけるなりふりがはじまる

小枝を拾う 息づまる用事の後で
火を熾す 喜びのありかを記憶にしまって
絶やさず薪をくべていく
一日一日と 今日を今日の土にして
明日をまた明日の土にして

出まかせを投げつけるしぐさに手慣れた
木枯らしに立ち尽くす日も
川に流した笹舟を忘れられず
上着をひっかぶって寝入った夜も

水を汲み 火にかけ 湯を沸かし
一羽の鳥の姿を目にし
一人のあなたと声をかけ合うことが
実の一粒 若芽の一伸びになる

にくしみが楽にしてくれたあの
帰る道のなさを嘆くのは自分自身だから
途方に暮れるしかないのは
犯した罪の償いだと
藁縄で地面を叩いてまわるのは童だけでいい

けれどもし
泣き声さえ奪われたひとを
悲しむこともできないぐらいなら
花を膝に抱えてうつむいたまま地下鉄を終点まで乗れ

だって
それはいつ
俺の過ちではないと?
昨日より森が遠くなる
焚き木を拾いに出るのすら
いつだって遅いのに…

空をはらまない場所に
何度も灯の明かりを運び込み
ろうの匂いが染みつくくらい
ひとときひとときを繰いでいく先に
いつしか場所は空となり
炉となり 洞となり 問いのように
だれかを いいえ こころのもう半分を
迎え入れる支度ができていく

思うとおりに言葉を口にしづらい日々を送るとき
何が自分を支えるのか
からだはいつも心とひとつながりの夢だから
朝昼晩にごはんを食べること
ぐっすりたくさん眠ること
白湯や湯船でよく温まること
それぐらいしか言えないけれど
それぐらいさえ決してたやすくはないけれど
大事
大事なのはこの詩の向こうで息をする人

空に熾す
内なる火よ
小さく灯って
明くる日も明くる日も明くる日も灯って
小さく内に 地をあからめて
夕暮れの土手に
どんな思いも時も入り込まないしづけさを
この身の芯から感じられるように

芸術（家）の再発明

佐々木友輔（映像作家）

「ことばの再発明」で誰に講師をお願いするかを検討するとき、企画者間で共有していた信念は、優れた芸術家は「作ること」だけではなく「見ること」や「聞くこと」のプロフェッショナルであるということです。また、そうした人々こそが未来の芸術家のモデルとなっていくべきだということです。「誰もが芸術家」であり得る時代に、それでもなお芸術家やアーティストの肩書きを背負う者が果たすべき役割は、自分自身の作品を作ったり、独創的なアイデアを実現するだけでなく、他者の持つ魅力や面白さを見つけ出し、そのポテンシャルを引き出す手伝いをすることではないかと考えたのです。

こうした芸術家のモデルは、必然的に「一人」では成り立ちません。直接的であれ間接的であれ、多かれ少なかれ、誰かと誰かの何かしらの信頼関係もしくは共犯関係が必要になります。個人の単位を超えつつも、継続的な集団（コレクティブ）未然にとどまる、そのたびごとに結び、また解いては結び直すような芸術の主体を想定することができないでしょうか。

本講座の受講生たちは、講師との対話の中で、「こう語ればこう伝わるのか」「この話をするとそこを拾われるのか」「自分の作品はそんなふうに見えているのか」といった発見を重ね、自らの言葉の組み直しを続けてきました。それは「己れ自身の端緒のつねに更新されてゆく経験」（メルロ＝ポンティ）です。慣れ親しんだ土台を（他者の力を借りながら）自ら揺らし、亀裂を走らせ、掘り崩す作業です。きっと楽しいことばかりでなく、不安や迷い、時には激しい痛みが伴うこともあるでしょう。

解体と再構築の成果は長い時間かけて表れてくるものだから、早急に結論めいたことを述べて、個々のポテンシャルを無闇に狭めてしまいたくはありません。ひとまず今は、受講生18人全員が、それぞれの仕方で講座のプログラムを完走してくださったことを何より嬉しく思います。皆様が今後、それぞれの望む舞台で、「作ること」にとどまらず「見ること」「聞くこと」のプロフェッショナルとして、存分にその力を発揮していくように願っています。

聴講のみの方も含む受講生の皆様、「受講生と一緒に悩んでほしい」という奇妙な依頼を快く引き受けてくださった講師の皆様、共同企画者の蔵多さんをはじめとして、運営や記録制作に関わってくださった皆様、多くのご助言やサポートをしていただいた鳥取大学の教職員の皆様、この一年間お付き合いいただき、本当にありがとうございました。

現時点での私の「ことば」

藏多優美（デザイナー／コーディネーター）

鳥取に生まれて18年間過ごした後、進学を機に京都で11年間学業と仕事をしていた私は、療養のため鳥取にUターンをする。「しばらく鳥取にいるのだろう」と思い、身体と精神を休ませながら鳥取県内を東・中・西部と横断してみると、私の知らない鳥取人達が何かしらを「つくる」人として生活をしている。自分と同じようにUターンをした人、鳥取という地に惚れ込んだり進学や仕事を得て移住してきた人、地元から動かずに住み続ける人、十人十色。「この地で「つくる」人と繋がりたい。それぞれがやっている活動を語り合い、知り、次の何かが生まれると良いな」という思いはそんな中で生まれた。

縁があり、鳥取大学地域学部附属芸術センターでアートマネジメント講座事務局の職を得て、そんな思いはここで形作れるのではないかという期待が芽生えた。担当教員の1人である佐々木さんと話をしていく中で意気投合し、共同で企画を練ることになった。お互いが歩んできた道を混ぜ合わせるとどうなるんだろうか。人材育成プログラムを企てる中で、文化庁が「アートマネジメントを担う人材」に求める役割、すなわち、それぞれの生きる地域社会において作り手と受け手をつなぎ、芸術や文化の価値を広く伝える人材とは、他者の作品やことばに粘り強く向き合い、大切に受け取る技術を備えた人のことであると、私達は定義付けた。鳥取で「つくる」人がそのような視点を取り入れ、それぞれの活動にプラスになることを願い「ことばの再発明」を実施する。

結果は、この記録集の中に詰め込んだ。本書を読んでいただき、それぞれの捉え方は異なると思うのだが、私自身は単純に「ことば」を切り口に「つくる」ことに向き合えた時間が持てたことが良かったな、と思う。自らが行う「つくる」活動を「ことば」にし、対面した相手に届けるのは容易ではなく、投げかける技術も受け取る技術も必要だと、そんなことを再認識出来た時間になったのだ。これがコロナ禍ゆえのオンライン開催だから出来たのか、それとも受け取る技術に優れた講師陣のおかげかは分からないが、関わる人、皆が「ことばを再発明すること」について考えさせられたのではないだろうか。

「ことばの再発明」という名前をつけた講座は、共同企画者2人が足し算に足し算を重ねた内容を講師陣や鳥取運営チームの協力を得て、最終的には受講生も一緒になって「つくる」ことを実践出来た時間だったようだ。今後同様の規模で開催することは考えてはいないが、小さくても継続的に続けていきたい、と企画した身として願っている。自らを語る「ことば」を都度、再発明し、その時の自分にとってピッタリな「ことば」を紡いでいく必要がある。現時点での私にとっては、この「ことば」なのかもしれない。

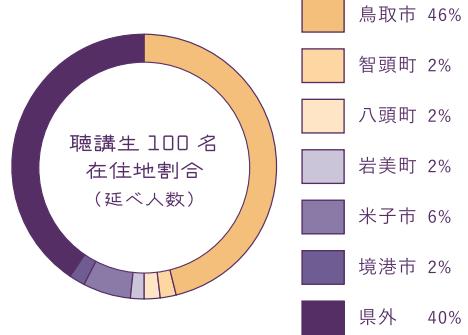
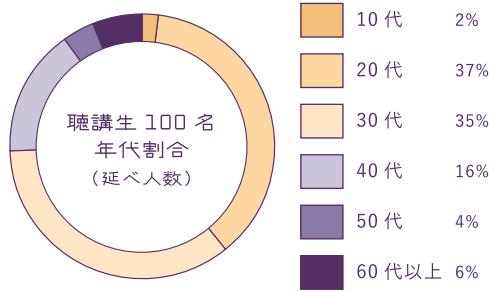
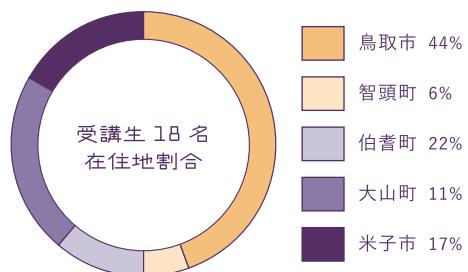
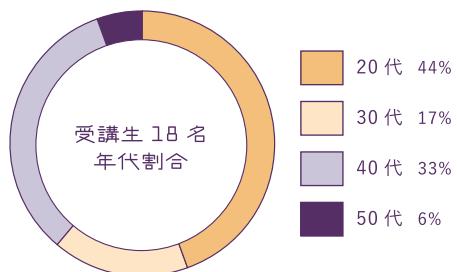
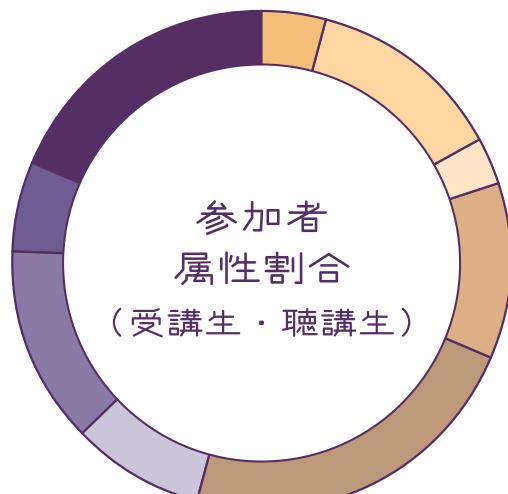
これから先の未来でも つくっていくことを目指して

にやろめけりー (ZINE 作家／DJ／音楽をつくる人)

日頃からお世話になっている佐々木さんと藏多さんから、「来年は面白い事をやるぞ」というお話を伺ったのは、いつ頃だったでしょうか。「このお二人が『面白い』と思って作られる…絶対面白いに決まってるじゃないか」という気持ちで、講座が始まるのを楽しみに待ち望んでいた日々が懐かしく感じられます。たしか、一昨年前にはもう既に耳に入れていた気がするのですが、何月だったかまではどうにも思い出せなくなってしまいました。ともかく、それくらい長い時間をかけて行われてきた講座でした。そして、結果的にこちらが思っている以上に充実した内容で、様々なかたちで言葉にアプローチ出来た講座だったと、身を持って感じています。講師の方々との対話や成果発表展、さらにはフォーラムでの司会進行など、これまでに蓄積してきた言葉たちを試行錯誤しながら組み立てていく過程は、まだ形になっていないやわらかな言葉の粘土たちがゆっくりと練られていくような感覚でした。そして、今ではしっかりと固い陶器のように、その言葉たちが私の中に在るのを感じます。自分と言葉と向き合って、ものをつくっていくことの尊さを改めて受け止められたこと、さらにはその感覚を掴めたことで、そうしていく私を先の未来に見ることが出来ました。きっと私はこれからも、粘土を捏ねるように自分と言葉と向き合って、たくさんの作品を焼き上げていくと思います。

参加者データ

Participant data



編集後記

「ことばの再発明」のことは開講前から気になっていたのですが、様々な事情から参加することができませんでした。今回編集をお手伝いさせていただき、みなさんのやり取りを後から見せていただいて、最初は外側にいるつもりだったのが、いつの間にか自分も自らの言葉を考えざるをえない場所に立っていました。でもなんだかそれが楽しかったです。言葉と表現からは、誰も逃げ隠れできないものだなと改めて感じつつ、その普遍性を嬉しくも思いながら。

(nashinoki)

民藝運動の主導者で、「限界芸術の批評家」としても語られる柳宗悦。彼の思想の源泉である神秘主義は、自己の外部から到来するものを「受け取ること」について考え方抜く思想であり、また、語り得ぬものをそれでもなお語ろうとする熱情によって駆動する思想です。新作民藝で知られる鳥取で、かたちを変えて、「受け取ること」と「語ること」を主題とし、考え方抜く機会を設けられたのを誇らしく思います。嘘や詭弁が常態化している世界で、この試みが、ことばへの信頼を取り戻す一助になればと願っています。

(佐々木友輔)

「ことばの再発明」では、鳥取企画運営チームを各パートで野口さん、藤田さん、nashinokiさんとメンバーを入れ替えながらスリーマンセルで回していました。「三人寄れば文殊の知恵」らしく、頼りながら補いながらもこの講座を運営し、最終的に記録集まで完走したように思います。考える時間が長い分のしんどさがありましたが、それを上回る気付きや「やってよかったです！楽しかった！」という喜びの方が強かったです。今後、同様の内容・規模感での「ことばの再発明」をする気は全くないのですが、その時その時に合わせて「ことばの再発明」を続けていきたいと、本書の作成を通じて改めて思っています。コロナ禍で大変な2020年でしたが、「ことばの再発明」があったことで救われた1年でした。今後も新しい未来を開拓出来るように日々前進しあらゆる物事を紡いでいきたいと、心にささやかな祈りを。

(藏多優美)

鳥取企画運営チーム

佐々木友輔 (ささき・ゆうすけ)

映像作家

1985年兵庫県生まれ、映像作家。映画・ドキュメンタリー制作を中心として、執筆、出版、展覧会企画など領域を横断して活動。近年の主な長編に『コールヒストリー』(2019)、『映画愛の現在』(2020)、著作に『人間から遠く離れて——ザック・スナイダーと21世紀映画の旅』(noirseとの共著、2017)、「房総ユートピアの諸相——〈半島〉と〈郊外〉のあいだで」(『半島論——文学とアートによる叛乱の地勢学』所収、響文社、2018)など。

藏多優美 (くらた・ゆみ)

デザイナー／コーディネーター

1989年鳥取市生まれ。京都精華大学デザイン学部卒業。IT・Web企業で企画制作や広報、営業など幅広く担当後、2019年にUター。ン。「“デザイン”を軸とした解決屋」として、ビジュアルデザイン制作、ウェブマガジン「totto」ライターや「ヌーン企画」企画運営に携わる。2019年6月から2021年3月まで鳥取大学地域学部附属芸術文化センターに文化庁事業連携コーディネーター勤務。以降は鳥取を拠点に企画運営PM・デザインを軸に活動予定。

プロフィール

野口明生（のぐち・あきお）

企画者

1985年鳥取県生まれ。場所や企画など作ったりやったりする人。現在は、鳥取県中部で活動する「現時点プロジェクト」メンバーとして、映像シリーズ「私はおぼえている」などを主にマネジメント方面から手がける。過去に、岡山市にてゲストハウス「とりいくぐる Guesthouse & Lounge」、シェアスペース「NAWATE」、飲食とイベントのスペース「奉還町4丁目ラウンジ・カド」の立ち上げおよび経営、鳥取県総合芸術文化祭2019メイン事業「鳥取銀河鉄道祭」事務局など。

藤田和俊（ふじた・かずとし）

ライター／フォトグラファー／編集者

1981年鳥取県生まれ、ライター、フォトグラファー、編集者。新聞社勤務（記者としては9年間、運動部と社会部に所属）を経て、2019年よりフリーランスとして活動を開始。ドキュメンタリー取材をライフワークとし、鳥取県智頭町で人と暮らしを紡ぐローカルメディア「脈脈」を立ち上げる。

nashinoki

ライター

1983年、新潟県生まれ、鳥取で育つ。他者や風景とのかかわりの中で、時にその表面の奥にのぞく哲学的なモチーフに惹かれ、言葉にすることで考えている。ウェブマガジン「totto」等に文章を執筆する。

※

講師プロフィールは各レポートページ、受講生プロフィールは「受講生と作品」ページに掲載。

「ことばの再発明」実施体制

共同企画運営／1期講師／担当教員

佐々木友輔

受講生

井澤大介

ISOIYO

磯崎つばさ

exkeee

奥井彩音

音泉寧々

神山かなえ

品岡トトリ

Seizan

田中京子

中村友紀

ナカヤマサオリ

にやろめけりー

藤原京子

水田美世

村瀬謙介

もりさと

yamasaki

1期講師

後藤怜亜

聴講生

白井明大

100名

大林寛

(講演・フォーラム延べ人数)

西島大介

2期講師

榊原充大

成果発表展会場

篠田栞

ギャラリーそら

熊野森人

成果発表展写真撮影

高橋裕行

平木絢子

ギャラリートーク講師

ギャラリートーク写真撮影

多田かおり

藤田和俊

田中ちえこ

フォーラムゲスト講師

成果発表展来場者

波田野州平

200名(延べ人数)

吉田恭大

講演②グラフィックレコード

ひやまちさと

坂間菜未乃(OVERKAST)

ことばの再発明 - 鳥取で「つくる」人のためのセルフマネジメント講座 -

記録集 2020-21

編集

佐々木友輔、藏多優美、nashinoki

編集ディレクション／制作進行

nashinoki、藏多優美

執筆

佐々木友輔、藏多優美、野口明生、藤田和俊、nashinoki

後藤怜亞、白井明大、大林寛、西島大介

榎原充大、篠田栄、熊野森人、高橋裕行

多田かおり、田中ちえこ

田中京子、ナカヤマサオリ、にやろめけりー、村瀬謙介

写真

平木絢子、藤田和俊

アートディレクション／デザイン／構成／イラストレーション

藏多優美

カバーデザイン／デザインサポート

bank to LLC.

印刷会社

株式会社グラフィック

発行日

2021年3月12日

発行所

鳥取大学地域学部佐々木研究室

鳥取県鳥取市湖山町南4丁目101

sasakiyusuke@tottori-u.ac.jp



本書は「ことばの再発明」の記録集として制作されました。

本書を無断で複製・複写・転載することを禁じます。

鳥取大学地域学部附属芸術文化センター「地域を知り、地域で実践するアートマネジメント講座 2020」

[実践活動編 E] ことばの再発明 - 鳥取で「つくる」人のためのセルフマネジメント講座 -

<http://www.rs.tottori-u.ac.jp/artculturecenter/artmanagement2020/e/>

令和2年度 文化庁 大学における文化芸術推進事業採択「地域資源を顕在化させるアートマネジメント人材育成事業」

令和2年度 鳥取大学地域学部学部長経費



ことばの再発明

—鳥取で「つくる」人のためのセルフマネジメント講座—

記録集 2020-21